

博士学位論文

現代日本語におけるオノマトペの意味拡張
— 「CVQCVri」型を対象にして—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

陳 帥

平成 27 年 3 月

目次

第1章 序論	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 本稿の対象と目的.....	2
1.3 使用するコーパスについて.....	5
1.4 本稿の構成.....	6
第2章 オノマトペに関する先行研究	7
2.1 はじめに.....	7
2.2 オノマトペの定義と分類.....	7
2.3 オノマトペの音韻・形態と統語的特徴.....	11
2.3.1 音韻・形態的特徴.....	11
2.3.2 統語的特徴.....	12
2.4 オノマトペの多義性と共感覚比喩.....	15
2.4.1 オノマトペの多義性と意味拡張.....	16
2.4.2 共感覚と共感覚比喩.....	18
2.4.3 「一方向性仮説」.....	20
2.4.4 共感覚比喩の認知的基盤.....	23
2.5 本章のまとめ.....	24
第3章 理論的背景	26
3.1 はじめに.....	26
3.2 認知言語学の意味観.....	26
3.2.1 経験基盤主義.....	26
3.2.2 百科事典的意味観.....	27
3.3 その他の関連用語.....	29
3.3.1 カテゴリー化とプロトタイプ.....	29
3.3.2 二次的活性化.....	30
3.4 多義語分析の方法.....	30
3.4.1 複数の意味の認定.....	31
3.4.2 プロトタイプの意味の認定.....	31
3.4.3 複数の意味の相互関係の明示.....	32
3.4.4 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明.....	34
3.5 本章のまとめ.....	37
第4章 「こってり」と「あっさり」	39
4.1 はじめに.....	39

4.2 分析の前に	39
4.3 「こってり」	42
4.3.1 先行研究の検討	42
4.3.2 分析.....	45
4.3.2.1 別義 1	45
4.3.2.2 別義 2	46
4.3.2.3 別義 3	48
4.3.2.4 別義 4	49
4.3.3 「こってり」の意味のネットワーク	50
4.3.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係.....	50
4.3.3.2 感覚内の意味転用	54
4.3.4 まとめ	55
4.4 「あっさり」	55
4.4.1 先行研究の検討	55
4.4.2 分析.....	59
4.4.2.1 別義 1	59
4.4.2.2 別義 2	60
4.4.2.3 別義 3	63
4.4.2.4 別義 4	64
4.4.2.5 別義 5	65
4.4.3 「あっさり」の意味のネットワーク	67
4.4.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係.....	67
4.4.3.2 感覚内の意味転用	71
4.4.4 まとめ	71
4.5 本章のまとめ.....	71
第5章 「しっとり」「さっぱり」「すっきり」	75
5.1 はじめに.....	75
5.2 「しっとり」	75
5.2.1 先行研究の検討	76
5.2.2 分析.....	78
5.2.2.1 分析の前に	78
5.2.2.2 別義 1	80
5.2.2.3 別義 2	81
5.2.2.4 別義 3	81
5.2.2.5 別義 4	83
5.2.2.6 別義 5	84
5.2.3 「しっとり」の意味のネットワーク	85
5.2.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係.....	86

5.2.3.2 感覚内の意味転用	89
5.2.4 まとめ	89
5.3 「さっぱり」	89
5.3.1 先行研究の検討	89
5.3.2 分析.....	93
5.3.2.1 分析の前に	93
5.3.2.2 別義 1	94
5.3.2.3 別義 2	94
5.3.2.4 別義 3	95
5.3.2.5 別義 4	96
5.3.2.6 別義 5	97
5.3.2.7 別義 6	99
5.3.2.8 別義 7	99
5.3.2.9 別義 8	100
5.3.3 「さっぱり」の意味のネットワーク	101
5.3.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係.....	101
5.3.3.2 感覚内の意味転用	105
5.3.4 まとめ	105
5.4 「すっきり」	106
5.4.1 先行研究の検討	106
5.4.2 分析.....	108
5.4.2.1 分析の前に	108
5.4.2.2 別義 1	109
5.4.2.3 別義 2	110
5.4.2.4 別義 3	111
5.4.2.5 別義 4	111
5.4.2.6 別義 5	113
5.4.3 「すっきり」の意味のネットワーク	114
5.4.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係.....	114
5.4.3.2 感覚内の意味転用	117
5.4.4 まとめ	118
5.5 本章のまとめ.....	118
第6章 オノマトペの意味拡張	124
6.1 はじめに	124
6.2 感覚以外の意味拡張.....	124
6.2.1 メタファーによる拡張	124
6.2.2 メトニミーによる拡張	125
6.3 感覚内の転用.....	126

6.3.1 慣習的な感覚用法.....	126
6.3.2 非慣習的な感覚用法.....	127
6.4 共感覚比喩再考.....	129
6.4.1 形容詞における共感覚比喩.....	129
6.4.2 「一方向性仮説」再考.....	131
6.4.3 武藤(2003)の修正案について.....	132
6.5 本章のまとめ.....	133
第7章 結論	134
7.1 本稿のまとめ.....	134
7.2 今後の課題.....	136
参考文献	138
謝 辞	144

本論文の第4章と第5章は、以下の論文に基づき、その後の研究によって明らかにしたことを加味して大幅に加筆・修正を施したものである。

第4章 2013年5月 「類義語「あっさり」「さっぱり」の相違について」
『日本認知言語学会論文集』 第13巻 pp.535-541

2014年2月 「擬態語動詞「あっさりする」の意味分析」
『言葉と文化』 第15号 pp.49-60

第5章 2014年4月 「擬態語動詞「さっぱりする」「すっきりする」の意味に関する考察」 『表現研究』 第99号 pp.50-59

2014年5月 「感覚・心理を表すオノマトペの多義性とその動機づけに関する考察」 『日本認知言語学会論文集』 第14巻 pp.87-98

＜本稿における表記法＞

- (1) 先行研究を直接引用する場合、その引用部分を「」で括って示す。
- (2) 先行研究、辞典の意味記述の引用に施した下線は、特に断らない限り引用者によるものである。
- (3) 引用文中、筆者によって省略した箇所は、(前略)、(中略)、(後略)で示す。
- (4) 例文の冒頭に示される「？」は、非文ではないが容認されにくいことを表す。
- (5) 例文中の分析対象語には、実線を施し、太字で示す。比較対象を分析対象語のすぐ後ろの()に示す。また、分析対象語以外に注目すべき箇所には波線を施す。
- (6) 引用例の出典は例文の後の()内に示す。インターネットの検索エンジンから得た実例の場合、例文の後にURLを記す。また、例文の後に出典が示されていないものは筆者による作例、ないしは、筆者が実例を簡素化したものである。なお、筆者は日本語母語話者ではないため、各例文は、日本語母語話者によるネイティブチェックを受けたうえで論文に掲載した。
- (7) 例文番号は、各章ごとの通し番号を付す。
- (8) 図表番号は、各章ごとの通し番号を付す。
- (9) 注は、各ページ末に挙げる。なお、注の番号は、全章を通じての通し番号である。
- (10) 意味に関わる特性は、<>で括って示す。

第1章 序論

1.1 はじめに

オノマトペ¹を持つ言語は日本語だけではないが、日本語は、オノマトペを豊富に持つ言語の一つとして知られている。飯島(2004)も「この種の言葉に頼らずには、日本人の会話そのものが成り立たない」(p.24)とオノマトペの重要性について述べている。また、日本語のオノマトペは、日本人独特の感性に訴えるものであり、外国人には理解が難しい。

言語は一般的に、その音と意味の結びつきが恣意的であるのに対して、オノマトペの音と意味の関係は恣意的ではなく、ある程度合理的な結びつきがある(金田一 1978、田守・スコウラップ 1999 など)。また、Kita(1997)によると、一般語彙は、思考・経験が意味的部分に組成分解される「分析的次元」(analytic dimension)と呼ばれる客観的次元に属しているのに対し、オノマトペは、言語情報が感覚・感動・感情的情報と直接接触する「感情・イメージ的次元」(affecto-imagistic dimension)と呼ばれる次元に属している。これらのことから、オノマトペは、一般語彙とは異なる特殊な語群とされている。また、日本語話者はオノマトペ語彙と一般語彙を比較的簡単に区別することができる(田守・スコウラップ 1999: 5)。

近年、オノマトペの多義性と意味拡張が注目されている(Hasada 2001、井上 2013、Akita 2010、2013、浜野 2014、游 2014 など)。一般語彙にも五感に関わるものはあるが、日本語のオノマトペは、元々五感に根ざしたものであり、複数の感覚にまたがるもの(がたがた、ごろごろ、がんがんなど)が豊富である。

このように、オノマトペは、複数の感覚にまたがり、関連性を持っているため、多義語²として捉えられるが、特殊な語群とされることから、その意味の拡張は、一般語彙の意味拡張と異なるだろうと考えられる。一般語彙の場合、多義語の意味のネットワーク(多義構造)を明らかにする研究は少なくないが、オノマトペの場合、本格的に扱っ

¹ オノマトペという語の由来であるギリシア語の *onomatopoeia* は主に音声の模倣表現を指す。しかし、日本語研究では、泉(1976)以降、「オノマトペ」が「擬音・擬態語」や「音象徴語」と同義の総称として定着しており、日本語の「オノマトペ」には、必ずしも音を伴わない様態や心情を表す語も含まれている。本稿は、総称としての「オノマトペ」という用語を用いている。

² 「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う(国広 1982:97)。

たものは、十分にあるとは言えない³。本稿は、現代日本語におけるオノマトペを対象とし、一般語彙と同じように多義語分析を行い、その意味拡張を考察する。

1.2 本稿の対象と目的

本稿は、認知言語学の意味観に立ち、複数の感覚にまたがり、「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」という5つのオノマトペの意味を分析・記述することを通して、オノマトペの意味拡張を明らかにすることを主たる目的としている。

これらのオノマトペは、次のように用いられる。

- (1) フランス料理はこってりしていて胃にもたれるといったイメージが強いが、消費者のヘルシー志向に配慮し、無農薬の野菜をふんだんに使った料理を増やしている。 (日経流通新聞 1996.03.05)
- (2) 暑いと食欲が落ち、そうめんやそばなどあっさりした食べ物ばかり口にしがちだ。肉や魚、野菜などが欠けると、エネルギー源となるたんぱく質の他、ビタミンB1など疲労回復に必要な栄養が不足し、だるさの原因ともなる。 (日経プラスワン 2010.07.24)
- (3) 肌にハリと弾力を保たせるアンチエイジングクリーム。「翌朝まで肌が乾かずしっとり。 (BCCWJ 『an.an』 マガジンハウス 2002)
- (4) 髪を切る間は鏡を見られなかったが、家で初めて鏡を見て、「さっぱりした姿に達成感があった」。前向きな気持ちが生まれた。 (中日新聞 2005.08.09)
- (5) 新都心の玄関口であるのを配慮、すぐ隣の新宿モード学園やペDESTリアン・デッキと色調などを統一、すっきりした景観をつくり出した。 (毎日新聞 1990.10.29)

例(1)-(5)における「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」それぞれの語は、五感の中でも「味覚」「味覚」「触覚」「視覚」「視覚」を慣習的に表す。

日本語オノマトペには、五感に関わるものが豊富に見られ、それらは一般的に単一の感覚に還元することができない。本稿の考察対象である5つの語は、上記の感覚だけではなく、五感内の他の感覚を表すことができ、複数の感覚にまたがるものである。例えば、次の例(6)-(10)

³武藤(2003)は、五感に関わる形容詞(甘い、酸っぱい、渋い、辛い)、動詞(聞く、ふれる、におわせるなど)の多義構造と意味間の転用を明らかにしたが、オノマトペについては、食に関するオノマトペを取り上げ、感覚間の転用にメトニミーが多く関わることを確認するとどまり、各語の多義構造は明らかにされていない。

における「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」は、それぞれ「触覚」「嗅覚」「味覚」「聴覚」「嗅覚」を表している。

(6)野村院長によると、ひびやあかぎれの症状には、血行を改善するビタミンが入ったタイプがいいという。こってりとした肌触りのものが多く、手に傷がある時に塗ってもしめない。

(中日新聞 2013.02.02)

(7)宮城県丸森町の財団法人「阿武隈ライン保勝会」が24日から、町特産品でキク科の根菜ヤーコンを原料に開発した「ヤーコン焼酎もりもり」を、町の「蔵の郷土館・斎理屋敷」で販売する。試飲では「あっさりとした香りで飲みやすい」と好評。

(毎日新聞 2010.06.24)

(8)好評なのはケーキ。しっとりした味で、ほのかに甘い香りがする。一般的にケーキ(スポンジ)の原料となる小麦粉(薄力粉)と比べて、玄米粉はグルテン(たんぱく質)が少ない。

(朝日新聞 2003.01.13)

(9)今度はアコースティックギターを練習したが、さっぱりした音色にリッチさや色気は感じられず、徐々に弾き語りから遠ざかっていった。

(朝日新聞 2002.09.26)

(10)JR九州は3月1日、ICカード乗車券「SUGOCA(スゴカ)」のサービス開始1年を記念して、ペットボトル入りのオリジナル緑茶「すごか茶」を発売する。伊藤園が九州産の茶葉だけを使用し、「すっきりした香りと、ほのかな甘み」に仕上げた。

(毎日新聞 2010.02.27)

上掲の例は、例(1)-(5)に比べ、日本語話者にとって、慣習的な用法とは言えない。辞典に記述されていないことから、それらの慣習性は低いと考えられ、従来の意味転用の考察においても十分に注目されていない。しかし、実例は存在しており、日本語話者にとって慣習的ではなくとも容易に理解できるものである。本稿は、このような非慣習的な用法も含めて考察していく。

オノマトペの意味転用は、主に共感覚比喩の枠組みにおいて考察されてきた。その転用が一方向的であることが指摘され、共感覚比喩の「一方向性仮説」と呼ばれる。例えば、「あっさり」は、本来例(2)のように「味覚」に用いられるが、例(7)の「あっさりとした香り」は「嗅覚」に用いられている。「味覚」と「嗅覚」の共感覚が起こり、「味覚」から「嗅覚」に転用されている。この「味覚→嗅覚」の転用は、共感覚比喩の「一方向性仮説」に従う。一方、「こってり」は、本来例(1)

のように「味覚」に用いられるが、例(6)の「こったりした肌触り」は「触覚」に用いられている。だが、「味覚」と「触覚」の共感覚は起こらないとされており、「味覚→触覚」の転用は、「一方向性仮説」に従わない。

Williams(1976)、楠見(1988)、山梨(1988)、国広(1989)などは、一部の例外を認めつつ、基本的に「一方向性仮説」を認めるが、実際の言語使用においては、「一方向性仮説」に従わない反例が多く見られる。小森(1993)は、共感覚表現の共感覚と原感覚の組み合わせの方向性は決して完全なものではなく、それぞれの表現は方向性や慣用性の点で柔軟さを持っているとしている。その他、瀬戸(2003)は日本語の形容詞、武藤(2003)は日本語オノマトペの「一方向性仮説」の反例を挙げている。特に、武藤(2003)は、食に関するオノマトペを対象にした共感覚体系を提案し、「一方向性仮説」が放棄されなければならないとしている。

このように異なる見解が見られることから、感覚間の転用の方向性については、再考する必要があると考えられる。本稿は、考察対象の意味分析を通して、この問題の解明を試みる。

また、「一方向性仮説」に従う転用の中にも、慣習的な転用と非慣習的な転用が見られる。

(11) 白や紫や紅など、日なたでは鮮烈な色が、夕景のにび色をまぶされて、しっとりと落ち着いた色あいを見せている。

(BCCWJ『笑い絵』出久根達郎 文芸春秋 1995)

(12) 高山市西之一色町の観光施設「飛騨開運乃森」でコアジサイが満開になり、淡い青色の小さな花がしっとりとした芳香を放っている。
(中日新聞 2007.06.21)

例(11)の「しっとり」のように、「視覚」への転用は慣習的であるのに対して、例(12)の「しっとり」のように、「嗅覚」への転用は非慣習的であると言える。「一方向性仮説」に従わない転用の実例の存在、及び「一方向性仮説」では成立するはずの転用ではあっても実例がほとんどないことは先行研究においてもしばしば指摘されているが、このように、「一方向性仮説」に従う転用の中に、慣習性の程度が異なるものが存在することは、注目されていない。その違いが何によるものであるのかを明確にする必要があると考えられる。

以上、考察対象である5つの語が五感に用いられる場合を見てきたが、これらの語は、次のような五感に関わらない場合にも用いられる。

- (13) 仏政府が用意してくれたプログラムは、連日3、4件の会見をこなすハードスケジュールだった。「移民問題」や「国防問題」などこってりしたテーマに、必ず時間通りに始まる正確さ。通訳の出番がないほど会見相手は誰も流ちょうな英語を話した。
(毎日新聞 2002.12.24)
- (14) 一昨年末、静岡市の葵区役所に婚姻届を出した。仕事の合間に提出したので職員の滞りない手続きには助かったが、前日に緊張しながら書いた。淡々とした確認作業を見ながら「意外とあっさりしているんだな」と感じたのを覚えている。
(日本経済新聞 2014.06.17)
- (15) 米国出身のリード姉弟組が「日本の美」を演出した。姉キャシーがあずき色の着物、弟クリスが黒の和服をそれぞれアレンジした衣装を着て、しっとりした演技を見せた。(毎日新聞 2010.02.22)
- (16) 大学の英語の授業はさっぱり分からないけど、自宅学習でなんとか頑張っている。
(中日新聞 2014.07.30)
- (17) フランスの経済学者トマ・ピケティの『21世紀の資本論』が話題になっている。といってもずっしり大部の原著はとても読めそうになく、経済誌の特集などをのぞいていたが、十日付朝刊「視座」欄の佐々木毅氏の明快なチャートですっきりとわかった。
(中日新聞 2014.08.17)

例(13)-(17)では、5つの語がいずれも五感と関わらない抽象的領域に用いられている。各語それぞれその複数の意味・用法を記述した先行研究は、参考にすべき点も多いとは言え、これらの意味と前掲の五感に関わる意味との有契性は十分に説明されていない。本研究は、五感に関わる意味だけではなく、すべての意味の関連性を明らかにすることを目指す。

本稿は、5つの語の意味を分析・記述することによって、それらの意味のネットワークが一般語彙と同じように捉えられるかを検証し、共感覚比喩について再考する。5語のすべての意味のネットワークを解明するにあたり、慣習性が低い意味・用法を排除するのではなく考察対象に含め、従来の研究では不十分であったところを補完することを試みる。

1.3 使用するコーパスについて

本稿で挙げる実例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』や新聞データベース及びインターネットから収集している。『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』は、「書籍」「雑誌」「新聞」「白

書」「教科書」など11種類のデータ、合計約1億500万語のコーパスである。新聞データベースは、それぞれ『聞蔵Ⅱ ビジュアル 朝日新聞記事データベース』、『中日新聞記事データベース』、『毎日新聞記事データベース』、『日経テレコン 21 記事データベース』である。いずれもおおよそ過去30年分の記事が掲載され、大規模なコーパスである。石川（1998）は「新聞や論説などの、事実を客観的に伝える場面においてオノマトペが多用されると、品位の低下や卑俗さといったマイナスの印象を与えるためオノマトペがあまり見られない」と述べ、新聞におけるオノマトペ使用の少なさについて指摘しているが、実際の新聞に目を通すと、多くのオノマトペの使用例がある。インターネットにおける実例は、「話し言葉」的要素が含まれており、臨時的な言語使用や個人特有の言語使用も含まれると考えられるが、その点には十分に配慮して、分析を行った。

1.4 本稿の構成

本稿の構成は、次のとおりである。

第2章では、まず、オノマトペの定義と分類を確認する。次に、オノマトペの音韻・形態及び統語的特徴に関する先行研究を取り上げ、特に「CVQCVri」型オノマトペの特徴及び「オノマトペ+スル」動詞の分類を見る。また、オノマトペの多義性と共感覚比喩に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘して本研究の課題を整理する。

第3章では、本研究の理論的背景を概観する。まず、本研究が依拠する認知言語学の意味観を確認する。そして、多義語分析の方法を提示する。

第4章では、「こったり」と「あっさり」について、まず、個々の意味を分析・記述し、それぞれの意味間の相互関係と意味のネットワークを解明する。次に、感覚内の意味転用について検討する。

第5章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」について、まず、個々の意味を分析・記述し、それぞれの意味間の相互関係と意味のネットワークを解明する。次に、感覚内の意味転用について検討する。

第6章では、第4章と第5章の分析を踏まえ、オノマトペの意味拡張を考察し、さらに、共感覚比喩を再考する。

第7章では、本研究の結果をまとめ、今後の課題を述べる。

第2章 オノマトペに関する先行研究

2.1 はじめに

従来、音韻・形態・統語・意味などの観点からオノマトペの研究が進んでおり、通時的研究や対照言語学的研究もある。そして、近年は、日本語教育、認知言語学の分野でもオノマトペ研究への関心が高まっている。本章では、オノマトペ研究の中で、本研究と関連があるものを取りあげて概観する。2.2 節では、オノマトペの定義と分類について確認する。2.3 節では、オノマトペの音韻・形態的特徴と統語的特徴について見る。音韻・形態的特徴において、主に「CVQCVri」型の特徴、統語的特徴において、「オノマトペ+スル」動詞、いわゆる擬態語動詞の分類を取り上げる。2.4 節では、オノマトペの多義性及び共感覚比喩に関する先行研究を取り上げる。2.5 節では、本章のまとめを行う。先行研究の問題点を指摘した上で、本稿の課題を整理する。

2.2 オノマトペの定義と分類

オノマトペは、ギリシア語の“onomatopee”に由来する外来語であり、狭義では音声の模倣表現を指すものとして知られる。つまり、擬音語のみを指すため、本来は日本語の擬態語も含めてこれらの用語を用いるのは不適切である。従来の日本語研究では、大きく音の描写に基づく擬音語（擬声語）と状態の描写に基づく擬態語とに分類されている（天沼 1974、阿刀田・星野 1995、飛田・浅田 2002）が、これらの用語はそれほど厳密に使い分けられてはおらず、泉（1976）以降、「オノマトペ」が「擬音・擬態語」や「音象徴語」と同義の総称として定着している。次に、金田一（1978）、笈・田守（1993）、泉（1976）の分類を見る。

金田一（1978：13-14）は、「擬音語・擬態語概説」（浅野（1978）『擬音語・擬態語辞典』所収）において、以下のように分類している。

● **擬音語** …… 外界の音を写した言葉

擬音語 …… 無生物の音を表すもの ザーザー ガチャー

擬声語 …… 生物の音を表すもの ワンワン ぼそぼそ

● **擬態語** …… 音をたてないものを、音によって象徴的に表すもの

擬態語 …… 無生物の状態を表すもの きらきら ごたごた

擬容語 …… 生物の状態（動作の様態）を表すもの うろうろ

擬情語 …… 人間の心の状態を表すようなもの いらいら

金田一（1978）は、「擬音語」をさらに「擬音語」と「擬声語」に分け、「擬態語」をさらに「擬態語」「擬容語」「擬情語」に分けている。

笥・田守(1993)は、金田一(1978)の分類を以下のようにさらに細かく分けている。

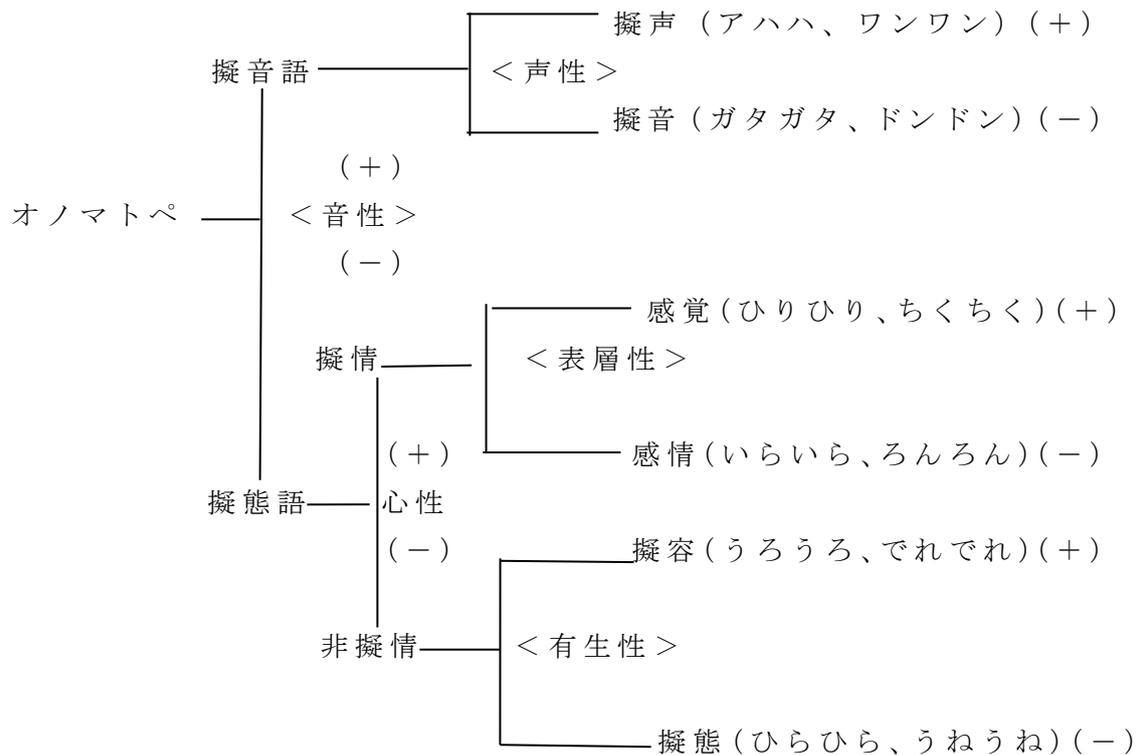


図 2-1 笥・田守(1993)によるオノマトペの分類

笥・田守(1993)は、金田一（1978）と同様に、<音性>の有無によって、大きく「擬音語」と「擬態語」に分け、さらに、「擬音語」を「声性」の有無によって、「擬音」と「擬声」に分けている。金田一（1978）の分類と異なるのは、金田一は「擬態語」を「擬態語」と「擬容語」と「擬情語」に下位分類しているのに対して、笥・田守(1993)は「擬態語」を<心性>によって「擬情」と「非擬情」に分けたうえで、さらに<表層性>と<有生性>によって下位分類しているという点である。

このように、従来言われてきた「擬音語」「擬態語」の下位分類は、研究者によって、様々な名称が用いられている。しかし、このように細かく分類しているものの、あるオノマトペが、どの分類に入るのかは判断しにくい。例えば、笥・田守(1993)では、「感覚」と「感情」を

表すオノマトペが〈表層性〉を有するか否かによって分けられているが、本稿の考察対象の「さっぱり」と「すっきり」は、「さっぱりした味/気持ち」「すっきりした姿/気持ち」というように、「感覚」と「感情」両方を表している。このようなものは、図 2-1 のどの分類にあてはめられるのかが判断できない。

本稿の考察対象である「こったり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」は、多義性を持ち、擬音、擬声、擬態、擬容、擬情などにまたがるため、本稿でも、総称の「オノマトペ」を用いることにする。

金田一（1978）、笈・田守（1993）の音性、声性、心性などによる分類に対して、泉（1976）は、オノマトペをその入力感覚に基づいて区分し、「外からの入力」「聴覚」によるものは擬声語であり、「視覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」そして「気分」や「心理状態」を入力とするものは擬態語（p.141）であるとした上で、これらの意味分野には偏りがあるとして、感覚別オノマトペの分布を論じている。また、三上（2007）は、泉（1976）の記述を引用し、さらに考察を加えてまとめている。以下、三上（2007：27-28）のまとめから抜粋し、感覚別オノマトペの分布を確認する。

（Ⅰ）味覚

味覚を表す擬態語はほとんどないに等しく、「ヒリヒリ」「ピリピリ」くらいであり、「サッパリ」「ネットリ」「コッテリ」なども同様に、味覚というよりは触覚と言ったほうがよいようなものである。この他に、「スーッとする味」「すっきりした味」なども使われるが、最近では「まったりした味」という表現もよく耳にする。しかし、味覚については、形容詞でも「あまい」「からい」「すっぱい」「しぶい」「にがい」くらいしかなく、決して豊富とは言えない。

（Ⅱ）嗅覚

嗅覚つまり匂いを表す擬態語も、「プンプン」「プーン」「ツン」くらいで少ない。これらは、良い匂い、悪い匂いの区別がなく、連続的に匂うとか鋭く刺激的に匂うという意味である。匂いを表現するには、擬態語ではなく、「花のようなよい香り」、「生ゴミのように臭い」という直喩の形式をとる。

（Ⅲ）触覚

金田一（1978）も指摘した通り、触覚に関する擬態語は、「サラサラ」

「ザラザラ」「スベスベ」「ツルツル」「ゴツゴツ」「ゴワゴワ」など豊富である。味覚を表す擬態語が少ない中で、舌触り、歯ざわりなどを表す「ガリガリ」「ジャリジャリ」「サクサク」「サラッとした味」「口の中でトロリと溶ける」などは、口の中の触覚というべき例である。

(IV) 気分・心理状態

痛みを表す擬態語が、「ズキズキ」「シクシク」「キリキリ」「チクチク」など、たくさんある。金田一が「擬情語」と名づけたところの「ハラハラ」「ドキドキ」「クヨクヨ」など、心理状態を表すオノマトペが多いのも日本語の特徴である。

(V) 視覚

視覚からの入力をもとに人や事物の動き・状態などを表すオノマトペは、擬態語の多くの部分を占める。その中でも、日本語に目立つのは、人の様子を表すものである。「ノロノロ」「セカセカ」「スタスタ」「フラフラ」など人の歩く様子を表すもの、「モジモジ」「オロオロ」「テキパキ」など態度を表すもの、「ツンツン」「ニヤニヤ」「ヘラヘラ」「ムーッと」など表情を表すものがある。

(VI) 聴覚

擬声語の中でも、鳥の鳴き声を除いた動物の鳴き声はそれほど多くない。特に少ないのが虫の鳴き声である。しかし、人の鳴き声に関しては、笑い声などを表す擬声語が多く、体系的に存在していると言える。

ここまで見てきたように、先行研究では、「触覚」に関するオノマトペが豊富であり、「気分・心理状態」「視覚」「聴覚」に関するものも体系的に存在することが指摘されている。特に、「味覚」については、「味覚」というよりは「触覚」と言ったほうが良いものがあることが指摘され、その中に、「さっぱり」「こってり」といった本稿の考察対象がある。このことから、「さっぱり」と「こってり」は、「味覚」と「触覚」が未分化であることが窺える。同様に、本稿の考察対象の「しっとり」「すっきり」「あっさり」についても、「味覚」と「触覚」の未分化現象が見られると思われるが、語によって、「味覚」と「触覚」のどちらがより中心であるかには違いがあると考えられる⁴。

⁴ 第4章と第5章の意味分析により、「こってり」「あっさり」「すっきり」は「味覚」が中心であり、「しっとり」「さっぱり」は「触覚」が中心であることが明らかになった。

2.3 オノマトペの音韻・形態と統語的特徴

従来のオノマトペ研究では、音韻・形態及び統語的特徴の考察が、最も盛んに行われてきた。本節では、「CVQCVri」型の音韻・形態の特徴及び「オノマトペ+スル」動詞の特徴を取り上げて見る。

2.3.1 音韻・形態的特徴

オノマトペの音韻・形態的特徴を考察したものに、小林(1933)をはじめ、天沼(1974)、泉(1976)、金田一(1978)、田守・スコウラップ(1999)などが挙げられる。それらは、基本的に語基とモーラ数によって音韻・形態のパターンを分類している。その中で、田守・スコウラップ(1999)は、1モーラの語基を持つもの(CV、CVQ、CVN、CVVQなど)⁵と2モーラの語基を持つもの(CVCV、CVCVQ、CVQCVriなど)など語基のモーラ数によって、17種類に分け、さらに、反復形や変種ものを羅列している。オノマトペはCVCV型のものが最も多いことが知られており、盛んに研究されてきた。本稿で取り上げる「こってり」「あっさり」などのようなCVQCVri型は、CVCV型に次いで数が多いものである(守山 2002 など)。本稿の考察対象は、すべてCVQCVri型のオノマトペであるため、ここでは、CVQCVri型のオノマトペに関する考察を見る。

田守・スコウラップ(1999)は、「語基の存在が認められず、同じ形態構造を持つ語でありながら、一方が他方よりオノマトペ的であると感じられるという主観的な印象だけで両者を区別するのは理に叶っていない」(p. 24)と指摘し、「CVQCVriという形態を持つものは、便宜上すべてオノマトペとして考察の対象とする」(p. 24)としている。例えば、「ばっさり」「ばさり」「ばさばさ」のように対応する異形が存在することから、「ばさ」という語基の存在を認めることができる。しかし、「がっぷり」「きっぱり」「はっきり」「ゆっくり」のように対応する異形を持たないものも多数ある。これらには「がぶ」や「きぼ」のような語基が認められないものの、日本語話者にとってはこれらもオノマトペと感じられるのではないかということである。ただし、「はっきり」や「ゆっくり」は同じ形態構造を持っていても、「がっぷり」「きっぱり」ほどオノマトペ的であるとは感じられないようでもあると述べている。

これらのことから、CVQCVri型のオノマトペには、オノマトペ度⁶が

⁵ Cは子音、Vは母音、Qは促音、Nは撥音を表す。

⁶ 「オノマトペ度」とは、ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度、すなわちその語がそれによって指示される音、様態、状態の非恣意的な現れとして認識される程度である(田守・スコウラップ 1999)。つまり、オノマトペ度が高いものほどオノマトペらしいと感じられる語である。

高いものと低いものがあることがわかる。その要因について、三上(2007)、守山(2002)は、それぞれ次のように考察している。三上(2007)は、「第一にその語の使用頻度、すなわちより基本的で使用頻度が高く、日本語教育においても初級から導入されるような語にはオノマトペであるという意識が薄れるのではないかということ。第二にその語が共起する動詞が多いもの、すなわち共起制限が弱いほとんどないかで、どんな動詞とも結びつく語は一般の副詞と認識されるのではないかということである」(p. 33)と述べ、二つの要因を挙げている。守山(2002)は、「CVQCVri型の語がオノマトペだと判断されるときに、対応する促音がないCVCVri型の語と2音の語基を重ねたCVCV-CVCV型の語の存在が影響している」(p. 66)としている。例えば、「ばっさり」は、「ばさり」「ばさばさ」といった対応する型が存在するので、オノマトペ度が高いと感じられるのに対して、「そっくり」は、「そくり」「そくそく」が存在しないため、オノマトペではないと感じられる。さらに、守山(2002)は、「CVQCVri型の語には、擬音語はほとんど見られない。擬音語は、具体的な音を表現しているので、擬音語か否かの判断は比較的簡単であるが、擬態語が表現するものは、擬音語が表現するものと比べて具体性に欠ける。このことは、この型の語がオノマトペか否かを判断しにくくさせている理由の一つだと考えられる」(pp. 59-60)としている。

本稿の考察対象を上記の判断基準に照らしてみる。まず、「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」は、いずれも共起する動詞に制限がある⁷。そして、「さっぱり」は、対応する「さばさば」はないが、「さばさば」が存在する。「こってり」は、「こてこて」「ごてごて」と対応し、「しっとり」は、「しとしと」「じとじと」「しとり」との対応が見られる。結果として、「しっとり」は、最もオノマトペ度が高いと言え、「しっとり」「こってり」は、基本的に「あっさり」「さっぱり」「すっきり」よりオノマトペ度が高いということになる。本稿の考察対象語は、オノマトペ度に差があるものの、すべてオノマトペとして認める⁸。

2.3.2 統語的特徴

これまでの研究においては、音韻・形態と同様に、オノマトペの統語的特徴にも焦点があてられてきた。オノマトペは、文中において、

⁷ 5語と共起する動詞の制限について、第4章、第5章のそれぞれの意味の文法的振る舞いについての記述を参照されたい。

⁸ 浅野(1978)、飛田・浅田(2002)、小野(2007)など数多くのオノマトペ辞典において、5語すべて掲載されていることから、これらの語を全てオノマトペと認めることに問題はないと考える。

副詞、動詞、名詞、形容詞（形容動詞）として働くことができる。その中で、副詞としての用法が最も多い⁹。オノマトペの副詞的用法は、「様態副詞」「結果副詞」「程度副詞」「頻度副詞」に分けられる。動詞として働く際には、「オノマトペ+スル」動詞が最も生産的である。守山(2002)は、CVQCVri型の語は、副詞として、あるいは、「～する（～して、～した）」の形で、「スル動詞」として使われることがほとんどであり、名詞として使われることはあまりないと指摘している。本稿の考察対象は、副詞として使われる場合が見られるが、ほとんどは、「スル動詞」として使われる。そのため、次に、「オノマトペ+スル」動詞について見る。

「オノマトペ+スル」動詞については、意味構造(Kageyama2007)、自他の対立(西尾1981)、意志性の有無(西尾1981)、アスペクト(西尾1981、鷺見1996、大塚2009など)、ヴォイス(Akita2009)などの様々な観点から、その分類をめぐって議論されている。その中でも、アスペクトによる分類が多い。ここでは、西尾(1981)、鷺見(1996)両者の分類を取り上げる。

西尾(1981)は、「動詞にテイルがつくかつかないか、つく場合にはどういう意味になるか」を考察し、アスペクトの観点から4グループを取り出している。これは、金田一(1950)に始まる動詞の四分類、「状態動詞、瞬間動詞、継続動詞、第四種動詞」に影響を受けたものだと考えられる。以下、西尾(1981)が分類した4グループを示す。

< 1 >アスペクトの体系が欠けており、シテイルの形でのみ使われて、スルの形を持たない。

シテイル、シタ（連体用法のみ）の形で使われるだけであって、動的な過程を表すことがなく、単なる状態を表し、形容詞と通じる性格を持っている。

例) ほっそりする あっさりする すらりとする

< 2 >アスペクトの体系が欠けており、スルの形でのみ使われて、シテイルの形を持たない。

瞬間的な動きを表す意味が強く、シテイルの形をとって継続の意味を実現できない。

例) はっとする ひやりとする どきんとする

< 3 >スルとそれに対立するシテイルの形を持ち、シテイルは「変化の結果の継続」を意味する。

例) ほっとする ぐったりする

< 4 >スルとそれに対立するシテイルの形を持ち、シテイルは「動作の

⁹ Watson(2001)は、オノマトペは、通言語的に副詞用法が最も一般的であるとしている。

継続」を意味する。重複形式のものがわりあいに多い。

例) ぶるぶるする うろうろする にんまりする

西尾(1981)の分類を見ると、本稿の考察対象の「あっさり+スル」は、グループ<1>に属するが、その他の考察対象は、どのグループにも入れ難い。

西尾の考察は「オノマトペ+スル」動詞が、アスペクト的観点において一般動詞(金田一分類の対象となったような「オノマトペ+スル」動詞以外の動詞)と同様に多様であることを示しているが、分類というには不十分であるという問題が指摘されている。鷺見(1996)は、金田一(1950)の考え方に基づき、西尾の問題を解決するために、新しい視点を加え、「オノマトペ+スル」動詞の分類を試みた。「状態動詞と動作性動詞」、「継続動詞、変化動詞と瞬間動詞」、「性質表現化する動詞としない動詞」という3つの枠組みの下位区分を組み合わせ、各グループに名称を与えた。その結果、より細かい10のグループに分類された。以下、鷺見(1996)の分類したグループの内、本稿の対象語が含まれる4語が含まれるグループ④、⑧、⑩を示す。

④<動作性><変化><非性質表現化>動詞

④の中には、継続動詞よりのものと、瞬間動詞よりのものがあり、中心的な変化動詞を合わせて、さらに3つに下位分類できる。その中の一群は、変化動詞でありながら、「一タ瞬間」、あるいは、「一タまま」と言えるものや、またその両方が言えるものであり、変化動詞の中でも瞬間動詞に近いものだと言える。

⑧<動作性形容詞的状态><変化><性質表現化>動詞

⑧は、『『いつも一テイル』』と言えるか否か』によって、2つのグループに下位分類できる。

「いつも一テイル」と言えるグループは、長期的な変化としてその変化の過程を捉えることができ、それが状態化して性質表現化した場合変化の過程は意識されない。一方で、その場限りの変化という可能性もある。

⑩<形容詞的状态><性質表現化>動詞¹⁰

⑩は、テイル形でのみ使われ、性質表現化する。

¹⁰ ⑩は、西尾(1981)分類の<1>に相当するが、鷺見は、条件節を伴えば、このグループの語も何ら問題なく「する」の形で使えるものがあるとし、西尾の分類とその意味解釈に対して批判的に論じている。

本稿の考察対象である「さっぱり+スル」「すっきり+スル」は、④に入っている。鷺見(1996)では、「さっぱりする」「すっきりする」は、感覚・心理的な変化を表し、夕形で発話時の心的状態を表すことができるかとされている。さらに「さっぱりする→さっぱりした→さっぱりしている」という時間的順序がはっきりしており、「だんだんすっきりしてくる」とも「すっきりした瞬間」とも言え、変化が徐々に起こる場合も瞬間的に起こる場合も考えられると指摘されている。

そして、本稿の考察対象である「しっとり+スル」は、⑧に入り、「あっさり+スル」は、⑩に入る。鷺見(1996)では、「こってり+スル」について触れられていないが、「あっさり+スル」と同じ性質持っているのではないかと考えられ、グループ⑩に属すると言える。

このように、「オノマトペ+スル」動詞のアスペクトの観点による分類は、統語的特徴をより明確にすることができるが、その意味を分析するにあたっては、統語的特徴による分析のみでは不十分である。本稿は、考察対象のオノマトペ動詞の意味を考える際に、統語的特徴によって生じる意味を参考にしつつ、分析を行う。

また、「オノマトペ+スル」動詞について、中北(1991)は、「擬態語は、動詞になり得る語彙的意味を持っていても、単独では動詞として機能することができない。形式動詞「する」と結合し、動詞相当の語となることによって、動詞として機能するための文法的な資格を得る。「擬態語+する」がどのような動詞として機能するかの決定は「する」に固定的に備わっている性質によるものではなく、補足成分である擬態語の語彙的意味と構文によって決定される。」と述べている。影山(2005)でも、「擬態語+する」は、形態的には複合語になっていないものの、意味・機能としては、「擬態語+する」全体が1つの述語(合成述語)と見なされると述べられている。

本稿は、考察対象語のオノマトペ自体の意味を明らかにすることを目指しているが、「オノマトペ+スル」動詞として使われる場合は、「オノマトペ+スル」を1語とし、「オノマトペ+(ト)スル」¹¹の形も含めて考察する。

2.4 オノマトペの多義性と共感覚比喩

オノマトペと多義に関する研究はこれまでにさまざまなアプローチからなされてきた。近年は、複数の感覚領域にまたがるオノマトペの多義性が注目され、共感覚比喩の観点から盛んになされている。

¹¹ 宮地(1978)は、「ト」を伴う「トスル型」は実質動詞の場合との区別が明確にできるわけではないが、「スル」を伴う全体として(文)節相当に機能すると指摘している。

2.4.1 オノマトペの多義性と意味拡張

オノマトペの意味に関する研究は、音象徴的意味の研究が中心であったが、近年はオノマトペの多義性に注目が集まっている（Hasada 2001、武藤 2001、2003、中里 2002、2004、三上 2006、呂 2006、Akita 2010、2013、井上 2013、浜野 2014、游 2014 など）。中里(2002)は、現代語の多義のオノマトペを対象に意味相互の関連を考察し、擬音と擬態の共通性、様態の共通性、感覚の共通性、一般語彙との関連、隣接オノマトペとの関連、音の類似性という6つの特徴を見出した。近世・近代の「まじまじ」を例に、多義の派生とそれが解消されていく過程¹²を検討した。また、中里(2004)は、現代語の「わくわく」を取り上げ、類義関係にあるオノマトペとの関連性、プラス・マイナスという意味の評価性の二点からオノマトペの意味縮小について考察した¹³。

序章で述べたように、オノマトペは、五感に根ざすものである。また、人間の身体性と密接に関わる。そのため、認知言語学的観点からの考察も数多く見られる。三上(2006)は、多義オノマトペについて、意味の拡張のプロセスに「痕跡的認知¹⁴」（ごろごろ、ばらばら、ぶく

¹² 「まじまじ」は、「目ばちばちさせる」という一動作とその動作を行う一般的状況を表したが、その状況が「眠れない」「平然と（見る）」「見ていて落ち着かない」に分化したとき矛盾する意味を含んでしまい、混乱を生じた末、一動作を表す意味「じっと見つめる」になり、本来の「目をばちばち」という象徴性が失われた。「落ち着かない」意味は隣接オノマトペの「もじもじ」に、「眠れない」意味は語基が共通する「まんじり」にその意味が移行し、多義の縮小につながっている。形態による意味の分担も多義性の解消に関連すると思われる（中里 2002:282）。

¹³ 「わくわく」は、現代語においては①期待・喜びなどのプラスの感情、②将来の出来事に対する感情という意味特徴を持つが、明治・大正期には①プラス・マイナス・中立的な感情、②過去から現在、将来にいたる出来事全般に抱く感情という、現代語より広い意味領域を持っていた。現代語のように意味が縮小された背景には、①類義語「どきどき」との関連により意味が限定されたこと、②マイナスの感情を表すオノマトペが多いことによりプラス方向へ意味が傾いていったこと、③身体的意味を「わなわな」に譲り「わなわな」とは異なるプラスの方向の精神的意味に限定されたことが考えられる（中里 2004:842）。

¹⁴ 「痕跡的認知」とは、人間が物の形や位置関係を実際には起こらなかった変化の結果として認知することである。「痕跡的認知」による表現には、状態の変化や位置の移動等を表す動詞によるものが多く見られる。例えば、「かどが落ちた正方形」を言葉で表現する時、実際に正方形のかどが“落ちた”わけではないのに、あたかも最初には存在していたかどが「落ちた」と認知して表現するのが普通である。また、「かどが折れた」、「かどが欠けた」、「かどが切れた」、「かどが取れた」などいろいろな表現できるけれ

ぶく)、及び「予期的認知¹⁵⁾(かちかち、つるつる)が関わることを示している。呂(2006)は、オノマトペの理解の基盤として、日常生活の中に繰り返される経験を重視し、理想化認知モデル(ICM)¹⁶⁾によりオノマトペの比喩的拡張を論じている。浜野(2014)は、CVCVタイプのオノマトペの副詞的用法を対象として、メタファー及びメトニミー¹⁷⁾によって意味が拡張する過程を考察した。その結果、「オノマトペで最も生産的なメタファーが、オノマトペの意味の中核である「運動」の音象徴に基盤をおくメタファーであること」(p.73)が明らかにされた。また、異形のタイプ別に見られる意味の拡張の傾向として、特に「語尾に「リ」を含む「リ形」で、接中辞「ッ」を含んだものは、具象性が低く、メトニミーを介して程度副詞に拡張しやすい」(p.86)と述べている。さらに、CVタイプの意味拡張について、「「ッ」で終わるCVタイプのオノマトペの多くは、動詞との共起制限がもともと弱いだけでなく、主にメトニミーによって意味がさらに転化し、より多くの動詞と共起できる」(p.94)と指摘している。游(2014)は、擬音語の意味と意味拡張について、フレーム内で起こる場合とフレーム間で起こる場合に分け、フレーム意味論の観点から検討している。フレーム内の意味拡張は、焦点の移転に伴って意味が変わり、移転時の焦点の行き先は主に音源、音源の状態、音源の心理状態、働きかけ・変化の4つのタイプがあることを指摘している。また、フレーム間の意味拡張は、音または声のフレームと拡張義が参加するフレームの間に

ども、これはすべて「現在目の前にある形は、別の形が変化した結果である」と捉えているのである。つまり、形を変化の“痕跡”と捉えているのである(国広1997:238)。

15 「予期的認知」は、未来に起こることを予期して表現したものである(三上2006)。

仲本他(2004)は、人間の予期が不安に基づく場面(scene)をベースに「予期的認知」が構成されているとしている。

16 ある語を適切に理解し用いるためには、社会制度、文化習慣、時代的背景などをもとに、その語が指す対象(事物や事態)を意味づけする必要がある。その際重要なことは、我々が対象を単純化し、理想化して意味づけしているということである。このように、対象の意味づけに際し、種々の背景的要因をもとに、単純化・理想化して対象を捉える知識モデルを、理想化認知モデル(ICM)と呼ぶ(辻2002:252)。

17 浜野(2014)で言うメタファーとメトニミーは、Kövecses(2010)の定義に従っている。

メタファー: ある認識領域(起点領域)の1つの要素を使って他の認識領域(目標領域)内の要素を指示することである。

メトニミー: 経験的に形成された認識領域の1つの要素を使って同じ認識領域内の他の要素を指示することである。

何らかの対応関係が結ばれることによって起こるものであると述べている。

以上見てきたように、オノマトペの意味拡張の考察は、CVCV型を対象にしたものが中心であり、CV型、擬音語の意味拡張についての考察も見られる。本稿の対象であるCVQCVri型の意味拡張を対象にした考察はなされていない。また、認知言語学的な観点からの意味拡張プロセスの考察では、拡張の方向性についての議論がなされていない。

2.4.2 共感覚と共感覚比喩

「共感覚」というのは、簡単に言えば、音を聴くと色が見えたり、あるいは何かを味わうと形を感じたりするということである。つまり、ある1つの感覚様相の刺激が別の感覚様相の感覚を自動的に引き起こす現象である (Baron-Cohen & Harrison 2003)。「共感覚」は、もともと神経科学的現象であり、心理学的、脳科学的、芸術的アプローチから研究されている。「共感覚」現象には、様々な種類があり、代表的なものに、文字や数字に色を感じる「色字共感覚」、音を聴くと色が見える「色聴共感覚」がある。また、すべての人が共感覚者というわけではなく、どのぐらいの割合で出現するかが異なる。一人で様々な種類の共感覚を持つことも可能で、共感覚を持たない人もいる。

楠見(2005:91-92)では、共感覚を3つのレベルに分けている。以下、楠見(2005:91-92)より抜粋したものである。

第1のレベルは、狭義の共感覚現象であり、感覚経験が入力系の感覚様相¹⁸とは異なる様相において生じる現象である。例えば、音を聞くと色が見える現象(色聴)が起こる。ただし、色聴のような明瞭な共感覚が生じる人は限られている。その出現比率のデータは最も多い見積もりでも2000人中1人である。

第2のレベルは、通様相性現象であり、感覚様相の性質や次元が様相を超えて共通に見られる現象である。例えば、「大きいー小さい、強いー弱い、重いー軽い」などは、視覚、聴覚、触覚などに共通する性質、次元である。さらに、普通の人でも、音の高さと色の明るさを対応させる実験(交差様相照合課題)をさせると高い音と明るい色、低い音と暗い色を対応させることができる。こうしたことから、通様相現象は、(厳密な意味での共感覚ではな

¹⁸ 感覚様相とは、感覚の種類(五感、内臓感覚など)を指す。例えば、舌を通して感じる味の感覚と、耳を通して感じる音の感覚は異なる。すなわち、味覚と聴覚は様相が異なる(楠見 2005:91)。

いが) 誰でも経験できる共感覚的現象と位置付けることができる。

第3のレベルは、言語学で言う共感覚的比喩である。ここでは、感覚経験(例えば、味覚)とそれを表現する形容語が異なる感覚様相(例えば、聴覚)に属する表現を共感覚比喩(例えば、うるさい味)と呼ぶ。ただし、これはあくまでも比喩であって、疑似共感覚(pseudosynaesthesia)であることに注意する必要がある(Baron-Cohen & Harrison, 2003)。しかし、共感覚的比喩も、第一と第二のレベルの心理的経験に依拠していると考えれば、共感覚現象は普通の人でもレベルの差こそあれ、経験し理解できる現象として位置づけることができる。しかし、共感覚的比喩がすべて共感覚現象に依拠するのではなく、メトニミー(換喩)や連想と区別することの必要性が提唱されている(小森 1993 他、武藤 2003)。

楠見(2005)を見ると、第3のレベルの言語学で言う共感覚比喩には、「ある1つの感覚様相の刺激が別の感覚様相の感覚を自動的に引き起こす」ことによる比喩とは言えないものが含まれる。「甘い香り」は、私たちが甘いものを食べるときにそのものにおいを同時に経験することから、「味覚」と「嗅覚」の経験的な同時性に基づいた表現であると考えられ、共感覚現象に基づく比喩である。しかし、「重い味」「硬い音」は、同時性に基づいた表現ではない。

このように、従来の言語学で言う共感覚比喩の中には、共感覚に基づく転用とは言えないものが含まれると考える、つまり、感覚間の転用ではあっても共感覚による転用と共感覚によるとは言えない転用が存在し、両者の転用の仕組みは異なると考える¹⁹。本稿では、心理学における「共感覚」の定義に従い、「共感覚」を、「甘い香り」「すっぱい匂い」の基盤となる「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と再定義する。しかし、心理学における「共感覚」は、楠見(2005)の第1レベルで指摘しているように、それが明瞭に生じる人は極めて限られており、一般の人が「色聴」を経験するようなことはない。それに対して、楠見(2005)が第3レベルで述べられているように、われわれ一般の人でも共感覚現象を経験することはある。例えば、あるものを食べるときに、自然にそのものの匂いも感じるというのは日常的な経験である。本稿の再定義は、心理学における定義に基づいてはいるが、一般的に経験できる「共感覚」であり、コミュニケーションに使用する「言語」の分析に十分適用できるもの

¹⁹次節以降、共感覚に基づく転用を「転用」とし、それ以外を「拡張」として区別する。

であろう。

2.4.3 「一方向性仮説」

楠見(2005)が述べられているように、言語学においては、共感覚がことばに現れたものに限らず、感覚経験とそれを表現する形容語が異なる感覚様相に属する表現を全て「共感覚比喩」と呼んできた。「甘い色」は、色の表現なので、視覚（例えられる方）が「原感覚」であり、味覚（例える方）が「共感覚」である。また、共感覚比喩の特徴としてよく知られているのは、比喩の方向性に制約があるということである。「甘い色」というように、味覚を表す形容詞で視覚を表現することができるが、「*明るい味」のように、視覚を表す形容詞で味覚を表現することはできない。このように、共感覚比喩における修飾と被修飾に方向性があることは、「一方向性仮説」と呼ばれる。「一方向性仮説」については、最初に Ullman(1951)が、英語、フランス語、ドイツ語の詩の用例を考察し、触覚が最も共感覚として用いられやすい傾向にあるとした。

Williams(1976)は、*The Oxford English Dictionary*、*The Middle English Dictionary*、*Webster's Third* といった 3 冊の辞典に基づいて、通時的に五感内の転用を調べ、一部の例外を認めつつも、その転用に、次の図 2-2 を示すような一方向性が認められると主張している。そして、Williams(1976)は、日本語の調査も行い、英語と同じような傾向が見られることから、この一方向的傾向は、通言語において普遍的であると主張した。

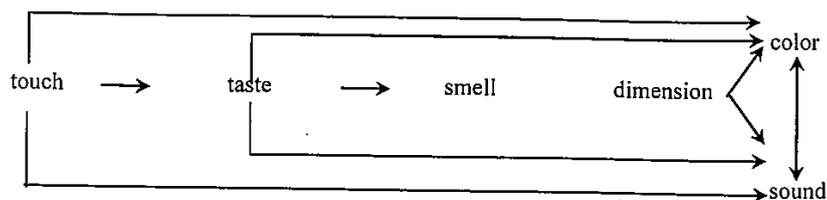


図 2-2 五感内の転用関係 (Williams1976)

Ullman(1951)と Williams(1976)によって指摘された五感内の転用の方向性はほぼ一致している。

日本語を対象とした共感覚比喩の考察として、国広(1982)、山梨(1988)が挙げられる。国広(1982:124)は、Williams(1976)の図 2-2 を認めた上で、‘touch’とされている感覚の内容には触覚・温度感覚・重量感覚が含まれているとし、「スルドイ匂い」がありそうなことから、‘touch→smell’の線が必要になると補足した。

山梨(1988)も、Williams(1976)の主張を肯定し、新聞や小説などにおける実例に基づいて五感内の修飾関係を考察した。山梨は、図 2-2 の dimension (次元) を取り除き、また、color と sound の間の双方向の転用関係を視覚から聴覚への一方向に変更した。次に、山梨の主張による転用と具体例を示す。

- | | | |
|------------|---------|-----------------|
| (i) a. | 触覚→味覚 | やわらかな味、なめらかな味 |
| | b.触覚→嗅覚 | さすような香り、つくような香り |
| | c.触覚→視覚 | あたたかな色、つめたい色 |
| | d.触覚→聴覚 | なめらかな音、あらい音 |
| (ii) a. | 味覚→嗅覚 | あまい香り、あまずっぱい臭い |
| | b.味覚→視覚 | あまい色調(?)、あまい柄 |
| | c.味覚→聴覚 | あまったるい音色、あまい声 |
| (iii) a. | 嗅覚→視覚 | かぐわしい色調/色彩(?) |
| | b.嗅覚→聴覚 | かぐわしい音聴/音色(?) |
| (iv) | 視覚→聴覚 | 明るい声、くらい音色 |

(山梨(1988:58)表 3-3「共感覚にもとづく比喩」)

以上は、基本的に「一方向性仮説」を肯定する研究である。しかし、「一方向性仮説」に従わない反例が多く見られるため、「一方向性仮説」に対する反論もある。Williams(1976)においても、日本語に関し、元々「濃い色(rich color)」のように視覚表現に用いられる「濃い」が、「濃い液体(thick fluid)のように触覚表現、「濃い味/匂い(deep taste/smell)のように味覚・嗅覚表現に用いられる」というような一部の例外も認められている。小森(1993:64)は、共感覚表現の一定の方向性は決して完全なものではなく、A の感覚の表現を表現するのに B の感覚に固有の語彙を用いると言っても、B の語彙のすべてを A の表現に使うことはできず、それぞれの表現は方向性や慣用性の点で柔軟さを持っており、これが新しい共感覚表現を生む可能性を秘めていると述べている。また、瀬戸(2003)は、「一方性仮説」に従わない例を挙げている。その例を以下に示す。

- | | | | |
|-----------|---------|--------|-------------|
| (i) a. | 聴覚→視覚 | うるさい色 | 静かな光沢 |
| | b.聴覚→嗅覚 | 静かな香り | にぎやかな香り |
| | c.聴覚→味覚 | うるさい味 | 味を聞く |
| | d.聴覚→触覚 | 静かな暖かさ | (頭が) がんがん痛い |
| (ii) a. | 視覚→嗅覚 | 明るい香り | はっきりした香り |
| | b.視覚→味覚 | 丸い味 | すっきりした味わい |

- | | | | |
|-------|----------|------|-----------|
| | c. 視覚→触覚 | 深い痛み | すっきりした冷たさ |
| (iii) | a. 嗅覚→味覚 | 臭い味 | 焦げ味 |
| (iv) | 味覚→触覚 | 甘噛み | (ペンの) 書き味 |

また、武藤(2003)は、反例の存在を踏まえ、日本語の「五感を表すオノマトペ」におけるそれぞれの基本義からの意味の転用を検討し、五感を表すオノマトペにおける修飾・被修飾関係について、次の図 2-3 を提示している。

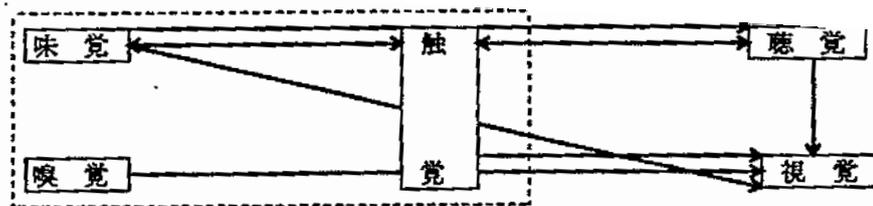


図 2-3 日本語の「五感を表すオノマトペ」の共感覚的比喩体系

この図 2-3 からわかるように、五感を表すオノマトペにおける共感覚比喩体系は、従来主張されてきた主に形容詞を対象とした共感覚比喩体系とは異なる。オノマトペにおいては、嗅覚、味覚、触覚、聴覚、そして視覚の順に転用される。これは、先に挙げた Williams(1976)の図 2-2 における触覚を最も低次な感覚とし、味覚、嗅覚、そして視覚、聴覚への転用を示したものと異なる。ただし、武藤(2003)は、点線枠内は判別しがたい場合もあることから「触覚的領域」としてまとめ、方向性はほぼ触覚的領域から聴覚、視覚の順へと転用されるとしている。

武藤(2003)の修正案を見ると、「こってりした感触」というような「味覚→触覚」の転用は、元々「一方向性仮説」の反例であるが、この修正案には従う例になる。ただし、武藤(2003)の修正案では、味覚、嗅覚、触覚は判別しがたい場合があることから、触覚的領域としてまとめられる。確かに、飲食物に関しては、「口の中の食感」、「味」、「香り」は、一体化している。しかし、「皮膚で触れる触感」であれば、触覚と味覚、嗅覚は明確に判別できるのであろう。そのような場合は、この体系とは異なる可能性がある。

さらに、武藤(2003)は、食に関するオノマトペの共感覚的比喩の体系(感覚間の転用現象)について、次の図 2-4 のように整理されている。

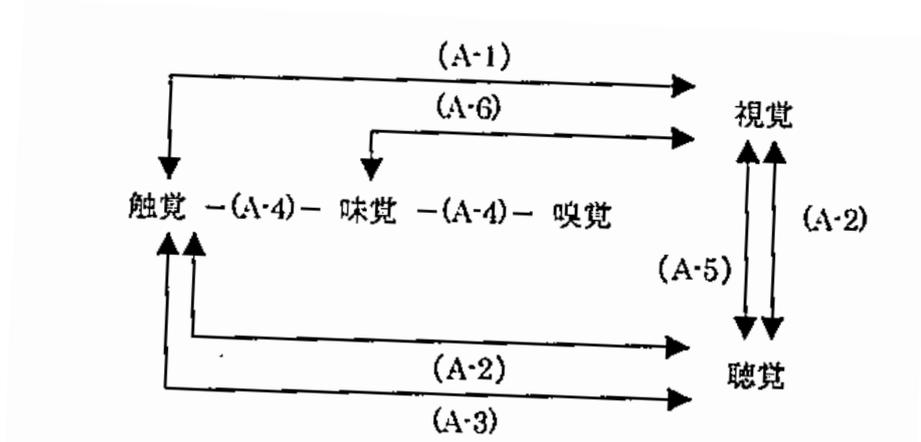


図 2-4 「食感覚を表すオノマトペ」における共感覚的比喻体系

図 2-4 によれば、共感覚表現に関する一方向性の仮説が放棄されなければならないことになる。しかし、この体系も食感覚を表すオノマトペを対象としており、前述の問題は残されている。そして、武藤(2003)は、共起する感覚間（図 2-4A-1 から A-6）の関係は、すべてメトニミーによって説明可能になると指摘している。

本節の検討から、「一方向性仮説」に対して、認めて発展させる立場と認めない立場があることがわかった。武藤(2003)の修正案は、感覚間の転用の方向性を再考する必要があることを示唆しており、第 6 章で詳細に考察する。

2.4.4 共感覚比喻の認知的基盤

共感覚比喻は、メタファーやメトニミーを基盤として成立することが指摘されてきた。どちらを基盤とするかは個々の事例によって異なるとされ、また、どちらかに決めかねる事例もあるようである。「メタファー」による説明には、Ullman(1972)、国広(1967)、池上(1985)が挙げられる。池上(1985:99)は、意味の類似性に基づく転用として、ある感覚領域を表す語が別の感覚領域に転用される場合があるとし、sweet voice のように感覚の種類は異なっても、味覚について「甘い」といえる場合の感じと聴覚についてのある種の印象の間に平行性が感じられることから転用が起こっているわけであると述べている。池上が言っている異なる感覚間にある「ある種の印象間の平行性」というのは、「印象の類似性」であり、メタファーによる転用だということになる。

一方、「メトニミー」との関わりを指摘したものとしては、貞光(2000)、谷口(2003)、小森(1993)がある。小森(1993:59)は、感覚器官の隣接性

に注目し、これまでメタファーの中で扱われてきた「甘い香り」などの表現は、「換喩（メトニミー）的側面」であると主張している。だが、この考察は、日本語の共感覚比喩全般を対象にしたものではない。

さらに、山口(2003:149)は、味覚を表す表現について、共感覚比喩が成り立つ基盤を次のように分類している。

- | | |
|------------------|------------|
| ① 身体感覚のメタファー | (例：甘い声) |
| ② 感覚器の隣接によるメトニミー | (例：あつあつの味) |
| ③ 概念メタファー | (例：味は人である) |
| ④ 共時的なメトニミー | (例：赤い味) |
| ⑤ 連想的なメトニミー | (例：まんまるな味) |

武藤(2003)は、感覚間の意味転用は、メタファーやメトニミーを含む複数の動機づけにより成立すると指摘している。また、山口(2003)の分析を踏まえ、共感覚比喩に関わるメトニミーは、「感覚器の隣接によるメトニミー」(冷たい味)、「(二つの性質の)同時性に基づくメトニミー」(湿った匂い)及び、「(二つの事項の)時間的隣接に基づくメトニミー」(ほっとする味)を挙げて論じている。

以上の概観から、共感覚比喩について、従来は単にメタファーの観点から考察されてきたが、現在は、メトニミーを含んだ複数の基盤に基づいて成り立つといった指摘が見られることがわかる。

本稿では、共感覚を「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と定義している。この定義によれば、共感覚比喩の基盤は必然的に「同時性に基づくメトニミー」ということになる。ただし、感覚内の転用であっても、共感覚を基盤とした比喩とは言えない「拡張」については、その基盤を検討する必要がある。

2.5 本章のまとめ

本章では、オノマトペ研究を概観し、本稿の考察対象の位置付けを確認した。まず、オノマトペの定義と分類を確認したうえで、日本語研究においては、総称の「オノマトペ」が定着していることから、本稿もそれに従うことを述べた。次に、オノマトペの音韻・形態的特徴について、本稿の考察対象である CVQCVri 型のものの特徴を確認した。また、統語的特徴について、副詞としても働くが、「オノマトペ＋スル」動詞として働く場合が最も多く、それらを含めて考察することを述べた。

最後に、オノマトペの多義性と意味拡張に関する先行研究を検討した。以下、先行研究の問題点をまとめ、本稿の課題を示す。

一つ目の問題点は、オノマトペの多義性と意味拡張は、従来 CVCV 型を対象として考察したものが中心であり、CVQCVri 型のものがあまり注目されていないという点である。

二つ目の問題点は、従来、オノマトペの多義性と意味拡張について、主に共感覚比喩という枠組みにおいてなされてきたが、言語学で言う共感覚比喩には、実は、共感覚とは言えないものが含まれているという点である。本稿では、共感覚を「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と定義し、共感覚比喩を再考することにした。

三つ目の問題点は、共感覚比喩の感覚間の転用の方向性を再考する必要があるという点である。

本稿は、以上の問題点を踏まえて、CVQCVri 型のオノマトペの意味拡張を考察する。具体的には、「こったり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」という 5 つのオノマトペを対象とし、多義語分析により、各語の意味のネットワークを明らかにする。あわせて、共感覚比喩について再考し、オノマトペの意味拡張について考察を深めることを目指す。

第3章 理論的背景

3.1 はじめに

具体的な分析に入る前に、分析の理論的背景を本章で確認する。3.2節では、本稿の依拠する認知言語学の意味観である経験基盤主義と百科事典的意味を取り上げる。3.3節では、本章以降において用いられる認知言語学の関連用語を確認する。3.4節では、本稿の多義語分析の課題を提示する。3.5節では、本章のまとめを行う。

3.2 認知言語学の意味観

認知言語学は、認知主体と環境の関わりを重視する学問である。すなわち、環境世界の中で心的・身体的・物理的なさまざまな内的経験や相互作用を持ちつつ生活する人間の営みを、認知という大きな枠組みから言語に焦点をあてて明らかにしようとするものである（辻：2003:3）。オノマトペは、子どものことばとして軽視される傾向にあり、詩人の使用する創造力が豊かな擬音語・擬態語も特別な表現として扱われてきた。しかし、オノマトペは、人間（認知主体）と外界との相互作用を反映し、人間の身体性に基つき成立しており、認知言語学の言語観に立てば、人間の営みを明らかにするには、むしろ重視すべき表現である。本節では、経験基盤主義と百科事典的意味観から認知言語学の意味観を概観する。

3.2.1 経験基盤主義

認知言語学は、人間の理性が認知主体と環境世界との相互作用によって動機付けられていると考える。Lakoff(1987)は、これを経験基盤主義(experientialism)と呼び、この認識は多くの認知言語学者によって共有されている理性感であるとしている。Lakoff(1987)では、経験基盤主義について、以下のように述べている。

経験基盤主義のアプローチは、客観主義のアプローチとはずいぶん異なっていて、思考を行う生命体の性質及び経験に基づいて意味を特徴づけようと試みるというものである。そこには個々の人の性質及び経験だけではなく、人類の、そして社会の性質及び経験も含まれる。従って「経験」ということばはひとりの個人に「偶然に起こった」事柄という狭い意味では用いられていない。そうではなく、経験は広い意味に解釈されている。すなわち、人間の経験の総体、及びその中で何らかの役割を果たすものすべて、例

例えば、われわれの身体の性質、われわれが遺伝的に受け継いだ能力、世界の中でのわれわれの身体を用いた行動の様式、われわれの社会的様式などである。(中略)従って、経験基盤主義の意味へのアプローチは、非常に一般的な概略を述べると、客観主義のアプローチと対照をなすものである。客観主義は思考する人間の性質及び経験から独立させて意味を定義するが、経験に基づく実在論は、意味を身体化に基づいて特徴づける。すなわち、われわれのさまざまな生物学的能力、及びわれわれを取り巻く環境の中で機能する人間としてのわれわれの身体的、社会的経験に基づいて特徴づける。(Lakoff 1987 [池上・河上他訳 1993: 322])

このように、経験基盤主義は、身体的・心理的経験(知識)を基盤に、環境世界との相互作用によって意味づけを行うという考え方に基づいている。本稿では、考察対象の意味を分析する際に、認知言語学の意味観に立ち、経験基盤主義の考え方を重視して考察する。

3.2.2 百科事典的意味観

私たちは、言語表現の意味を把握する際に、その言語に関連する様々な背景知識に基づいて理解する。例えば、「眼鏡」という語の意味は、辞書において、<不完全な視力を調整したり、強い光線を防ぐために、目につけるレンズや色ガラスなどを用いた器具>と記述されているが、サングラスなど様々な眼鏡は、視力を調整したり、強い光線を防いだりするためだけではなく、ファッションの道具としても使われる。辞書の記述は、辞書的意味あるいは言語的知識と呼ばれ、それ以外に連想される知識は、百科事典的意味あるいは非言語的知識と呼ばれる。構造主義言語学では、辞書的意味を研究対象とし、百科事典的意味と明確に区別した。例えば、「父」の意味は、「母」「息子」「おじ」といった隣接する語との差異関係から<男性、一世代上、直系>と記述され、それ以外の「父」に関することとは切り離されることになる(Leech 1974)。このように、辞書的意味のみを扱うことには、欠点がある。例えば、「近代言語学の父」における「父」は、<男性、一世代上、直系>という意味記述のみでは解釈できない。

これに対して、認知言語学では、百科事典的意味を取り込み、辞書的意味と百科事典的意味は明確に区別することができず、連続的であると考える。本稿は、個々の考察対象の意味において、百科事典的意味を取り込んだ記述を行う。靱山(2010a)は、百科事典的意味について、以下のように定義している。

ある語（に相当する言語単位）の百科事典的意味とは、（その語から）想起される（可能性がある）知識の総体のことである。

（靱山 2010a:5）

そして、「（その語から）想起される（可能性がある）知識の総体」には、少なくとも次のような事柄が含まれるとしている。

- ・その語に、（現実）世界に指示物（の集合）が存在する場合は、その指示物が有する諸々の特徴。
- ・その語から連想される（可能性がある）諸々の事柄。

（靱山 2010a:6）

なお、靱山(2010a:5-6)は、この定義における「（その語から）想起される（可能性がある）知識の総体」とは個人レベルのものを想定しているとしている。従って、言語共同体レベルで考えた場合、各個人レベルでの「（その語から）想起される（可能性がある）知識の総体」を構成する諸要素には、ほぼすべての人が知っているものからごくわずかな人しか知らないものまで、共有される程度がさまざまに異なるものが存在するとする。本稿もこの靱山(2010a)の定義に従う。

また、靱山（2010a:7）は、Langacker(1987:159)に基づき、百科事典的意味を構成する諸要素²⁰は、「定着度」、「一般性」、「内在性」、「特徴性」という4つの観点から、その語の意味に対する中心性あるいは重要性について考えることができるとしている²¹。

さらに、靱山(2014:661)は、ある語（などの言語表現）の百科事典的意味を構成する要素が、その語が表すカテゴリーのどれだけの成員にあてはまるかという程度、即ち「一般性」の程度に注目し、特に、語の百科事典的意味の一部として、一般性の程度が完全でない意味を認めることが必要であることを指摘し、その下位カテゴリーとして Lakoff（1987:Ch.5）の分類した「典型例」、「理想例」、「ステレオタイプ」に、「顕著例」を加えた4カテゴリーを挙げている。本稿の分析には、「典型例」が関わるため、「典型例」の定義を確認する。

- ・典型例：（ある言語共同体において）あるカテゴリーの中で、数多く見られ、想起しやすい一群の成員（下位カテゴリー）のこと。

²⁰百科事典的意味を構成するすべての諸要素が、百科事典的意味として同等に重要性を持つわけではない。百科事典的意味はその内部において、より中心的な要素からより周辺の要素に至る中心性の異なる諸要素が段階的・連続的に存在する（靱山 2010a:6）。

²¹ある語の百科事典的意味として、「定着度」、「一般性」、「内在性」、「特徴性」の程度が完全でないものも認める必要がある（靱山 2010a:7）。

以上、百科事典的意味について確認した。百科事典的意味は、多義語の複数の意味の関連性を記述する際に必要であると考えられる。例えば、前述の「彼は、近代言語学の父である」における「父」は、＜男性、一世代上、直系＞という意味ではなく、＜新しい世界を開いて偉大な業績を残した先駆者＞を表している。従って、「父」という語は、複数の意味を持つ多義語であることになる。「父」の2つの意味の関連性を考えると、「男性、一世代上、直系」という意味を基本的意味として認めるだけでは不十分である。＜家の大黒柱（家で重要な地位にある）＞という百科事典的意味を認めれば、「近代言語学の父」における「父」の意味について説明が可能になると考えられる。

本稿は、語の意味及び意味相互の関連性の記述に際しては、百科事典的意味を取り込む立場に立つ。

3.3 その他の関連用語

本節では、認知言語学その他の関連用語を確認する。それぞれの用語について、靱山(2010b)による定義を提示した上で、例を挙げる。

3.3.1 カテゴリー化とプロトタイプ

カテゴリー化とプロトタイプについての靱山(2010b:18-19)の説明を確認する。「カテゴリー化とは、この世に存在するさまざまなモノやコトを、必要に応じて何らかの観点から整理・分類する（＝まとめるべきものはまとめ、区別すべきものは区別する）」(p.18) ことである。また、「その結果作りだされたそれぞれのまとまりを、カテゴリー」(p.18) という。例えば、私たちは、学生用の教科書、聖書、映画の脚本、小説などを形、内容などの点で違いがあっても、内容が文字で表される点に注目し、「本」と呼ぶ。これに対して、線や色で表されるものをまとめるときに、「絵」と呼ぶ。

カテゴリー化には、必要十分条件に基づくものとプロトタイプに基づくものがある。必要十分条件に基づくカテゴリーは、「あるものがカテゴリーに属するか否かが明確であり、カテゴリーの境界が明確である。しかも、カテゴリーのメンバーは同じ資格でそのカテゴリーに所属している」(p.19)。例えば、「2で割り切れる整数」という条件を満たすのであれば、必ず偶数である。「2で割り切れない整数」という条件を満たすのであれば、必ず奇数である。

プロトタイプに基づくカテゴリーは、「プロトタイプに基づき形成されたカテゴリー」である。プロトタイプとは、「あるカテゴリーの

典型的メンバー、あるいは典型的なメンバーが満たす条件・特性の集合」(p.19)である。例えば、「鳥」と言えば、「スズメ」「ツバメ」などを思い浮かべやすい。「ニワトリ」や「ペンギン」なども「鳥」であるが、思い浮かべにくい。「飛ぶことができる」という特徴がプロトタイプであるかどうかを判断できる基準になり、「スズメ」などは、プロトタイプである。「ニワトリ」などは、空を飛ばないという点で周辺の成員である。

プロトタイプ・カテゴリーは、必要十分条件に基づくカテゴリーとは異なり、メンバーによって典型性の程度に差があるとともに、カテゴリーの境界が明確ではない。

プロトタイプは認知言語学の意味観における重要な概念である。本稿は、多義語の複数の意味によって形成される多義ネットワークを1つのカテゴリーと位置づけ、また、個々の意味自体も一つのカテゴリーとして認める。それらのカテゴリーは、プロトタイプ・カテゴリーである。

3.3.2 二次的活性化

靱山(2010b: 38)によれば、二次的活性化とは、「本来の意味が、新たな意味あるいはその場で意図されている意味を背後で支えること」である。それに対して、新しい意味あるいはその場で意図されている意味は、「一次的に」活性化される。靱山(2010b:38)は、「肩の故障」を例に挙げ、「故障」の<スポーツ選手などの体(の一部)が正常に機能しなくなること>という意味は、本来の<機械などが正常に機能しなくなること>という意味が完全に消え去ってしまうわけではなく、機械などが正常に機能しなくなることも頭に浮かべつつ、スポーツ選手などの体が正常に機能しなくなるのが理解されると説明している。

本稿の考察対象の意味にも、二次的活性化が見られる。この二次的活性化は、語の「本来の意味」つまり、プロトタイプ意味を認定する際に重要な手掛りとなる。

3.4 多義語分析の方法

本節では、多義語を分析するにあたって解明しなければならないと考えられること、すなわち、多義語分析の課題について、靱山(2001)に基づき述べる。靱山(2001)で示された「多義語分析の課題」とは、以下の4つである。

- ① (それぞれ確立した) 複数の意味の認定

- ② プロトタイプの意味の認定
- ③ 複数の意味の相互関係の明示
- ④ 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

以下では、他の先行研究にも言及しながら、靱山(2001)の提示する課題のそれぞれについて検討し、本稿で取り組む課題を明確にする。

3.4.1 複数の意味の認定

靱山(2001)は、「多義語は、(相互関係のある)複数の意味を持つのであるから、個々の多義語(と想定されるもの)の意味を記述するにあたり、複数の意味が存在することを明示することが前提となる。」

(p.33)と述べ、この課題(1)を、多義語の定義から必然的に導かれるものだとする。

多義的別義の認定方法に関しては、靱山(1993)が、国広(1982)を踏まえ、「ここで、ある語に対して、M1、M2、M3……という複数の多義的別義を認める基準として提案するのは、M1、M2、M3……は、それぞれ関連語(非両立関係にある同位語、反義語、反対語、類義語、上位語)が異なり、さらには属する意味分野が異なる時、M1、M2、M3……を多義的別義と認定するという基準である。」(p.47)と提案している。

本稿は、多義的別義の認定に際しては、類義語・反義語・上位語などの関連語の異なりを考慮するが、関連語の異なりという基準は絶対的なものではないと考える。前節で述べたように、多義的別義は、それぞれ一つのプロトタイプ・カテゴリーであり、周辺的になればなるほど、カテゴリーのメンバーとして認定しにくくなり、隣接する多義的別義と連続的であるためである。

3.4.2 プロトタイプの意味の認定

靱山(2001)は、「②の課題は、認知言語学におけるプロトタイプ理論に基づくものである。つまり、多義語の複数の意味の全体を1つのカテゴリーと考えた場合、そのカテゴリーを構成する個々の要素、個々の意味は、すべて同等の重要性を持つのではなく、何らかの意味で優劣があることを前提とするものである。このような前提に基づき、複数の意味の中で、最も重要であり、慣習化の程度・認知的際立ちが高いといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定することになる。」(p.33)と述べている。しかし、「最も重要であり、慣習化の程度・認知的際立ちが高いといった特徴を備えたもの」をいかに客観的に認定するかが問題となる。

靱山(1992、1995)では、「用法上制約のないもの、少ないものをプロトタイプの意味とする」という基準が提示されている。また、瀬戸(2007:47)は、中心義を「共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である」としている。そして、中心義は「他の意義を理解するうえでの前提となり、具体性(身体性)が高く、認知されやすく、想起されやすく、用法上の制約を受けにくい」といった性質を有する意味であるとしている。さらに、松本(2009)は、瀬戸(2007)などを踏まえ、多義語における中心義は2種類の中心性を持つと主張している。1つは、「概念的中心性」²²であり、もう一つは「機能的中心性」²³である。この両方を併せ持った意味が、典型的な中心的意味であるとし、両者が一致しない場合もあることを指摘している。

本稿は、靱山(1992、1995)の提示する認定方法とともに、瀬戸(2007)の提示する条件を考慮した上で、母語話者の判断と実例の存在を重視して、「プロトタイプの意味」を認定する。本稿で認定する「プロトタイプの意味」は、松本(2009)が言う「機能的中心性」を持つ意味、つまり、母語話者によって想起されやすい意味である。

3.4.3 複数の意味の相互関係の明示

靱山(2001)は、「③の課題も、①と同様、多義語の定義から必然的に導かれるものである。つまり、多義語の複数の意味には、相互に何らかの関連が認められるのであるから、個々の多義語の実際の分析を通して、その関連の実態を明らかにすることが課題となる。さらに、多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にはどのような種類の関連が認められるかということも明らかにすることも課題である。」(p.33)と述べている。さらに、メタファー、メトニミー、シネクドキーという3種類の比喩が多義的別義の相互関係を動機づけると指摘している。まず、靱山(2002:65)は、佐藤(1992[=1978])を踏まえて、二つの事物あるいは領域同士を結ぶ関係を重視し、メタファーを以下のように定義している。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

²² 概念的中心性を持つ意味とは、「派生のもとをたどっていったときに、最終的に行き当たる意味(派生の起点)」(松本 2009:90)である。

²³ 機能的中心性を持つ意味とは、「(中立的な文脈で)ある語を聞いたときに話者が最初に思いつく意味であり、その語の使用例として最初に口をついて出る意味」(松本 2009:92)である。

メタファーの例として、「職場の花」が挙げられている。

- (1)花瓶に花が活けてある。
- (2)Aさんは職場の花だ。

(1)における「花」は、＜植物が咲かせる美しく人目を引くもの＞という意味であるが、(2)における「花」は、＜美しく人目を引く人＞という意味である。このように、両者は、＜美しく人目を引くもの＞という類似性を持っている。

次に、靱山(2002:76)は、瀬戸(1986)などを踏まえて、隣接性だけではなく、関連性を重視してメトニミーを以下のように定義している。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミーの例として、以下の例が挙げられている。

- (3)素敵な鉢をいただいた。
- (4)今日は車で来た。
- (5)お手洗い

(3)における「鉢」は、＜(鉢に入っている)花などの植物＞を表すが、＜鉢そのもの＞と＜花などの植物＞が空間的に隣接していることに基づき、本来＜鉢そのもの＞を表す「鉢」という語によって、＜花などの植物＞を表すことができる。(4)における「車」は、＜自動車＞を表している。これは、＜車輪＞と＜自動車＞が部分—全体関係に基づくメトニミーである。(5)の「お手洗い」は、＜用便＞と＜手を洗うこと＞が時間的に連続して行われることに基づき、本来の＜手を洗うこと＞という意味から、時間的に先行する＜用便(をすること)＞という意味が成り立っている。

最後に、靱山(2002:69)は、シネクドキーを以下のように定義している。

シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

シネクドキーの例として、「花見」における「花」、「下駄箱」における「下駄」が挙げられている。例えば、「下駄箱」における「下駄」は、＜履物一般＞を表すが、＜下駄＞は、＜履物一般＞の一種であり、より特殊なく下駄＞という意味が、より一般的なく履物一般＞という意味になっている。

本稿は、メタファー、メトニミー、シネクドキーという3種の比喩の上記の定義に従って、考察対象の意味拡張を記述する。

3.4.4 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

靱山(2001)は、「④の課題は、③をさらに発展させたものだと考えられる。つまり、多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味を抽出すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを明示することなどが課題である。」(p.33)と述べ、この課題に取り組んだ研究として、Langackerのネットワーク・モデルと国広の現象素に基づく認知的多義を取り上げている。

Langacker(1987、1988a、1988b)によると、ネットワーク・モデルとは、カテゴリー化関係によって結び付けられる複数の成員が、プロトタイプからの拡張とスキーマ²⁴からの精緻化によって形成されたカテゴリー構造である。Langacker(2008)は、英語の mail を例に挙げて説明している。mail は、本来[MAIL (普通の郵便)]だけを指すが、現在[EMAIL (電子メール)]も表すようになってきている。つまり、両方の意味が定着している。2つの意味は、ある点で類似しているが、[MAIL]が紙に書かれたことが郵便職員によって物理的に配達されるのに対し、[EMAIL]はコンピューターによって送られるという点で異なり、本来の意味[MAIL]から拡張したと考えられる。その関係は、[MAIL/mail].....▶[EMAIL/mail]というように破線の矢印で表される。しかし、[EMAIL]は、主に言語によって表現されるという中心的特徴だけでなく、書いて送ったものを相手が受け取って読むという一連の流れがあり、一定のネットワークを通じて配達されるという特徴があ

²⁴ スキーマとは、「本来異なる構造の違いを大まかな見方を取ることで抽象する事によって生じる共通性」のことである (Langacker 2000:8)。

る。したがって、[EMAIL]と[MAIL]の間には、共通性つまりスキーマが抽出できる。つまり、[MAIL]から[EMAIL]への拡張は、スキーマ化を伴い、[MAIL]と[EMAIL]は、[MAIL']の精緻化された例である。この関係は、[MAIL'] → [MAIL]、[MAIL'] → [EMAIL]というように実線の矢印で表される。この小さなネットワークは、以下の図のように示される。

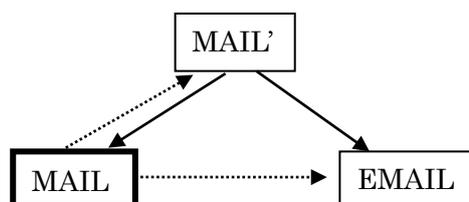


図 3-1 Langacker (2008:226 図 8.5 の一部)

太線のボックスで囲まれる[MAIL]は、その意味がプロトタイプであり、最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。mailの場合は、本来の意味[MAIL]と拡張した意味[EMAIL]だけでなく、両者を特別な事例として包含する、スキーマ的なmailの意味[MAIL']も確立されている²⁵。また、Langackerは、この図では、[MAIL]と[MAIL']の関係は、[MAIL]から見て[MAIL']がスキーマ的であるというだけでなく、[MAIL']が[MAIL]からの拡張でもあることが示されていると述べている。

なお、ネットワーク・モデルの前提となるのは、言語カテゴリーは、一般的に複合カテゴリーであり、1つの構造（節点）に還元できないものであるということである(Langacker 1987:369-370)。つまり、ネットワークの各意味は、並存しており、1つの意味に還元できない。その中で、プロトタイプの意味は、最も喚起されやすく、定着度が高い。そして、各節点の定着度が異なる。「ある語の意味がはっきりしない」と感じられるとき、それは語の意味が曖昧である場合²⁶と、漠然としている場合²⁷に分けられる。曖昧である場合は、一般的により

²⁵ Langacker(2008:225)では、以下の例を挙げて、スキーマ的な意味[MAIL']を確認している。

A: I got a lot of mail this morning.

B: Email or hard mail?

この例を見ると、文脈に応じて[MAIL] [EMAIL]いずれかの意味が喚起されることがわかる。

²⁶ 曖昧である場合とは、その語が2つ以上の意味を持ち、どの意味を表すのかがはっきり決められない場合である。

²⁷ 漠然としている場合とは、その語の意味がぼんやりとしていてどこまでを適用範囲とするのかがはっきりしない場合である。

具体的な意味の定着度が高く、漠然としている場合は、一般的にスキーマ的意味の定着度が高い。Tuggy(1993)は、この意味の曖昧性と漠然性の問題について、それが段階的な判断であることを論じて、ネットワーク・モデルの有効性を示している。また、ネットワークにおいて、他のすべての意味から抽出した最も抽象的な意味は「スーパー・スキーマ」と呼ばれるが、必ず抽出できるわけではない。

以上から、ネットワーク・モデルにおける拡張関係はメタファーに、スキーマ関係はシネクドキーに相当することがわかる。しかし、類似性が抽出できないメトニミー的拡張が、ネットワーク・モデルにどのように組み込まれるかは、明示されていない。靱山(2001)は、国広(1994、1995、1997)が提案する現象素に基づく認知的多義は、メトニミーに相当することを示している。次に、国広(1994、1995、1997)が提案する現象素に基づく認知的多義を確認する。「現象素」と「認知的多義」は、それぞれ以下のように定義される。

「現象素」とは、ある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えることができるものである。従来の「指示物」(referent)に近いが、思想的背景が異なる。単なる外界の存在物ではなく、人間が認知²⁸したものである。その認知のしかたは、言語の用法を通じて捉える。(国広 1995:40)

現象素の認知のしかたの違い²⁹が主な原因で生じる多義を「認知的多義」と呼ぶ。(国広 1997:226)

ネットワーク・モデルと現象素に基づく認知的多義のどちらか一方では全体構造は記述できない。靱山(2001)は、多義語の複数の意味を統括するモデルとして、Langacker(1987、1988a、1988b)と国広(1994)の両者を統合したモデルを提案し、その具体例として「かたい」の統合モデルを提示している。まず、「かたい」の3つの意味は次のように提示されている。

① 意味1 (プロトタイプの意味)

< 単一の個体に関して > < 外部から加えられる > < 力に対して >
< 抵抗感を感じさせる > < さま >

(例) ダイヤモンドはかたい。この肉はかたい。

²⁸ 国広(1994:23)は、「認知」を「知覚内容にある解釈を加えたもの」と定義している。

²⁹ 「現象素の認知のしかた (の違い)」とは、より具体的に言えば、「現象素をいろいろな角度から捉えたり、焦点を絞ったりすること」(国広 1997:226)である。

②意味 2

<複数の密着したものに関して><引き離そうとする><力に対して><抵抗感を感じさせる><さま>

(例) びんの栓がかたい。口をかたく閉じる。

③意味 3

<人間が精神的に緊張した状態にあるさま>

(例) 面接試験でかたくなってしまった。

靱山(2001:53)では、まず、意味2と意味1は<加えられる何らかの力に対して><抵抗感を感じさせる><さま>という共通点が存在する一方、食い違う点も存在するため、意味2は意味1からメタファーにより成り立っていると述べている。なお、<精神的に緊張した状態>と<肉体(筋肉や関節)的なかたさ>(意味1)は同時に生じることであるため、意味3は意味1からメトニミーによって成り立っていると述べている。このような分析を図示したものが次の図3-2である(靱山 2001:54)。

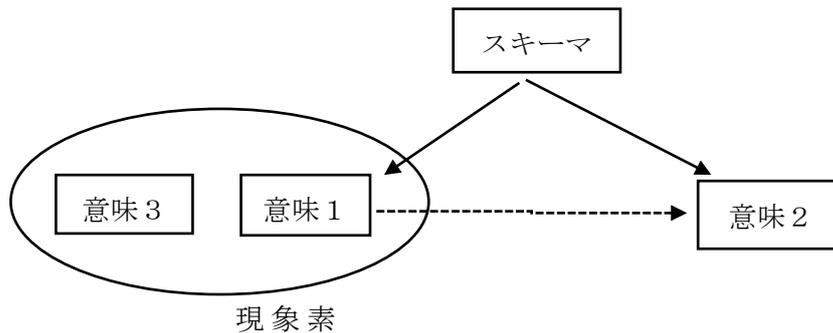


図 3-2 (靱山 2001:54 図 7)

以上、Langacker のネットワーク・モデル及び国広の現象素についてそれぞれ確認し、靱山の統合モデルを取り上げた。本稿では、多義語の意味をネットワークとして考え、特に多義的な意味カテゴリーの階層性を重視して、オノマトペの意味のネットワークの記述を試みる。

第4章と第5章の個別語の多義語分析は、上述した4つの多義語分析の課題を踏まえて進めていく。

3.5 本章のまとめ

以上、第3章では、認知言語学意味観を確認し、本稿の立場を示した。また、次章以降での分析に関連する用語を確認した。さらに、多義語分析の課題を提示した。次章以降は、このような考え方に基づい

て、対象語を分析する。

第4章「こってり」と「あっさり」

4.1 はじめに

本章では、「あっさり」「こってり」2つの語について、その意味を分析・記述する。

- (1) ラーメンは魚介ベースのスープ。しょうゆ味はほんのり甘く和食の趣が漂う。夏向きのうす塩もあっさり系。八丁みそなどをブレンドした黒みそのこってり系もそろえる。(毎日新聞 2008.12.18)
- (2) 開会式の入場券に外れました。どうしても見たい気持ちが抑えられず、前夜から国立競技場に侵入。入場者に紛れて中に入ろうと徹夜したものの、夜が明けたら警察犬を連れてお巡りさんと目が合い、あっさり御用。こってりお説教を食らいました。

(毎日新聞 2013.09.25)

例(1)において、対立的に用いられている「あっさり」と「こってり」は、両語とも「味」を表すのに対して、例(2)においては、副詞的に用いられ、両語とも「行動」を表している。従って、本稿では、「あっさり」と「こってり」を多義語として捉え、複数の意味及び意味間の関連性を考察する。

4.2 節では、分析に入る前に、「こってり」と「あっさり」の意味に深く関わる経験を確認する。4.3 節では、「こってり」について、4.4 節では、「あっさり」について、それぞれ考察を行う。4.5 節では、本章のまとめを行い、両語の対応関係についても考える。

4.2 分析の前に

「こってり」と「あっさり」は、前掲の例(1)に用いられているように、「味」を表す点で対立的である。例えば、両語は「味」を表すとき、次の例のように用いられる。

- (3) フランス料理はこってりしていて胃にもたれるといったイメージが強いが、消費者のヘルシー志向に配慮し、無農薬の野菜をふんだんに使った料理を増やしている。(日経流通新聞 1996.03.05)
- (4) 東洋水産は22日、即席麺「マルちゃん 味の逸品 旨コク塩バター味ラーメン」を発売する。濃厚なコクとスパイスのうまみが味わえる「味の逸品」シリーズの新品。これまで発売してきた「担担麺」や「ちゃんぽん」と比べてあっさりした味わいに仕上げた。昼

食や夜食に食べても重すぎず、女性や高齢者を含む幅広い層に売り込む。
(日経産業新聞 2012.10.11)

例(3)では、フランス料理について、「胃にもたれる」イメージが強いことが述べられており、その味を「こってり」で表している。「胃にもたれる」と同じような状態を「胃が重い」と表現することもある。また、例(4)では、新発売の旨コク塩バター味ラーメンについて、「昼食や夜食に食べても重すぎない」と述べられており、その味を「あっさり」で表している。この2つの例から、「こってり」と「あっさり」は味を表すとき、「重い」か否かに深く関わると言える。また、実例を観察すると、味以外の意味を表すときにも、「重い」ということと関わることが感じられる。そのため、本稿は、両語の意味分析に入る前に、「重い」に関する「身体的経験」について確認する。

あるものが「重い」ということは、一般的に物理的な重さを表す。また、私たちは物理的な重さを感じるものに対して、そのものが動かしにくいことも経験している。ものを動かすときに動かしにくいということは、身体的な負担を感じるなどの困難を経験することでもある³⁰。

このように、ものの場合であれば、物理的に「重さがある」こと、「動かしにくくて困難である」ことは理解しやすい。しかし、物理的に捉えられないものの場合、そのもの自体には物理的な重さがないにもかかわらず、私たちはそれらのある性質に対しても「重い」と捉える。これはどういうことだろうか。「重い」に関する経験を考察した研究として、荒川(2002)、新地(1997)などが挙げられる。

まず、荒川(2002)は、「重いデータ」という表現は、「データ量の大きさを重さに例える」・「データ処理の遅さを重さに例える」ものであり、それらは、「重いものを持つ動作」が「移動する動作」と共起しやすいという身体経験に基づいて成立していると指摘している。

次に、新地(1997)は、「重い」の多義性に関する考察で、重さの身体的経験が単に形容詞「重い」の多義性を分析するための道具ではなく、他の言語現象にも関わっている重要な基本的身体的経験であることを述べている。新地(1997)は、「胃が重い」という表現を例に挙げ、胃そのものが重いわけではなく、胃の中に入っているものによって胃の働き、すなわち、消化することが困難となることにより、重いと捉えられるのだと説明している。また、「食べ物が重い」という場合、

³⁰ 鍋島(2011)では、プライマリー・メタファーの例として、*Difficulty Is Heaviness* 《困難は重荷》が挙げられている。「困難」は「サキ領域」であり、「重さ」は「モト領域」である。その基盤を「重いものを持つのは困難であること」としている。

この「食べ物」は、脂っこい食べ物のような消化の悪いものを指し、「食べ物」によって結果的には胃の消化活動が難しくなると述べている。

先行研究の考察から、「消化することが困難である」ということは、「人が重い荷物を持ち、物理的な移動を行う」ことによって経験する「困難さ」や「負担」と同様に感じられるため、「胃が重い」や「食べ物が重い」などと捉えられることがわかる。「こってりした食べ物」を食べて、「胃が重い」と言えるということは、「こってり」についても、「重い」と同様の経験が基盤にあるのではないかと考えられる。

例えば、油分が過剰に含まれるものを食べると、一般的には食べ物が口の中からなくなっても、脂っこさが残る。油分のあるものは、消化が悪いものであり、胃の消化活動を困難にする。また、脂っこさが口の中に残ると、口の中が粘りを感じ、口の動きが困難になる。逆に、油分が抑えられていれば、脂っこさなどはあまり残らず、口の中は比較的早く元の状態に戻る。

これは、味だけに限った経験ではなく、他の感覚においても類似した経験があると考えられる。

例えば、視覚の場合、濃厚な色や派手なものを見ると、一般的に刺激が強く目に焼き付きやすい。つまり、目にしたものの濃厚さや派手さなどは、目に負担が大きい。その他にも、過剰な装飾などを見ると、残像も残り、不快に感じる。逆に、濃厚さや派手さなどが抑えられていれば、刺激が弱く、目への負担が小さい。

同様に、触覚の場合、油気や粘り気があるものを触ったり、肌に塗ったりすると、油気や粘り気が少ないものと比べて、落ちにくい。つまり、油分の粘り気などが残り、取り除きにくい。逆に、粘り気などが抑えられていれば、肌に残りにくい。

そして、嗅覚の場合、「鼻につく」という表現があるように、濃厚な匂いや香りを嗅ぐと、一般的にはすぐに消えず、鼻の中や身辺に残る。逆に、その濃厚さが抑えられていれば、刺激は弱く、匂いや香りが比較的早く消失する。

最後に、聴覚の場合も、「耳につく」という表現があるように、音の刺激が強ければ、耳から離れにくい。逆に、その刺激の強さが抑えられていれば、すぐに消えて残らない。

これらのことから、脂っこさや粘り、強い刺激といった解消されにくいものは、感覚器官に残りやすいので、感覚器官の動きが困難になり、「重い」と捉えられると言える。

以上、感覚において、「重さ」との関係性を述べたが、感覚の場合だけではなく、「重い口調」「重い女」といった表現があるように、人間

の言動や性格などは、人に「重い」と感じさせる場合がある。例えば、執着の強い人と付き合えば、身動きがとれないように感じられ、心理的負担が大きい。逆に、その執着が抑えられていれば、そのような負担は感じられない。

また、「重い話」や「重い記憶」「重い経験」などの表現から、「話」や「記憶」「経験」などの量や質によって、人に「重い」と感じさせる場合があると言える。例えば、悲惨なことや重大なことは、忘れてたくてもなかなか忘れられず、心理的負担が大きい。心も重くなって苦しい。逆に、すぐに忘れられるようなことには、重さが感じられない。

さらに、「重い決定」や「重い展開」などの表現からもわかるように、重要で深刻な事態は、常に慎重に進められ、時間がかかるため、重さを感じさせる。逆に、簡単に進められるようなことには、重さが感じられない。

次節以降では、このような身体経験を踏まえ、例文に基づき、意味記述を行っていく。

4.3 「こってり」

本節では、「こってり」について、多義語分析を行う。4.3.1 節では、「こってり」の意味記述に関する先行研究を取り上げ、その記述を検討し、問題点を指摘する。4.3.2 節では、「こってり」の複数の意味を認定する。4.3.3 節では、プロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係及び、すべての意味のネットワークを示す。

4.3.1 先行研究の検討

「こってり」の意味を考察したものは、管見の限り、国語辞典、擬音語擬態語辞典などに限られる。本節では、擬音語擬態語辞典の中から、飛田・浅田(2002)、阿刀・星野(1993)の記述を中心に検討していく。

飛田・浅田(2002)は、次のように記述している。

(I)非常に濃厚である様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語³¹。

厚みが厚いという意味（荒れた肌にこってりとクリームを塗る）³²、味が濃厚であるという意味（かぼちゃをこってりと甘

³¹ 「こってり」は、飛田・浅田(2002)で指摘されているように、ややマイナスよりのイメージの語であるが、「食糧不足を背景とし、豚骨のこってりした味が庶民に好まれた。」(日本経済新聞 2014.03.08) という例のように、マイナス評価を伴う場合だけではなくプラス評価を伴う場合もある。

³² 飛田・浅田(2002)では、意味記述とは別に、例文が提示されているが、本稿では、意

辛く煮込む)で、濃厚さが表面に感じられる様子を表し、しばしば結果としてあとに残る不快の暗示を伴う。

「こってり」は、「こてこて」に似ているが、「こてこて」は濃厚にしている過程そのものの様子を表す。

こってり塗りたくる。(分厚く盛り上げて)

こてこて塗りたくる。(何度も何度もしつこく)

- (II)「こってり(と)油を絞られる」の形で、ひどく叱られるという意味(無断外泊したらおやじにこってりと油を絞られた)を表す。マイナスイメージの語句。何か好ましくないことをした罰としてひどく叱られる様子を表し、主体の迷惑と被害者意識を暗示する。(p.47)

飛田・浅田(2002)によると、「こってり」の「非常に濃厚である様子」は、「厚みが厚い」「味が濃厚である」という2つの捉え方があることがわかる。また、「濃厚さが表面に感じられる様子」ということから、「こってり」は、「味」を表すものの、その「濃厚さ」は、「視覚」からも知覚できると読み取れる³³。しかし、次の例からわかるように、両者は、常に一致するわけではない。

- (5) メーンのそば料理は約40種。(中略)中でも人気なのは「天使のチーズカレーそば」(1300円)。十数種類の野菜と甲州地鶏の鶏ガラスープ、そしてカレーの風味が混ざり合う。見た目はこってりだが、味は意外にあっさりしており、女性客の注文が多い。
(毎日新聞 2010.09.12)

例(5)では、「天使のチーズカレーそば」について、「見た目はこってりだが、味は意外にあっさりしている」ということから、見た目は「こってり」と捉えているが、味はそうではないと捉えられていることがわかる。

阿刀・星野(1993)は、「濃度が十分に濃厚であるようす。また、量、特に厚さが十分にあるようす」と記述しているが、次の例を見ると、単に「濃度高い」や「濃厚である」ということを表すわけではないことがわかる。

味記述の中に、例文を挿入し、()内に示す。ただし、取り上げるのは、挙げられている例文の一部のみである。これ以降、飛田・浅田(2002)を引用する場合すべて、同様である。

³³ とんこつラーメンを見て、食べる前に「こってりしたラーメンだね」とは言えるが、「こってりした味のラーメンだね」とは言わない。

(6)ブラジル料理は、塩をいっぱい使うから、こってりではないけれど日本よりずっと濃い味になるの。 (中日新聞 2002.11.23)

例(6)では、ブラジル料理が、「塩をいっぱい使う」ため、「濃い味になる」が、「こってり」ではないと述べている。また、「濃度が高いお酒」という場合も、濃度が高くても、「こってり」とはいえない。従って、「こってり」は、単に「濃度が高い」ということを表す語ではないと言える。

また、「こってり」は、次の例(7)-(10)のようにさまざまな物事に用いられるが、辞典類にはこれらの用法が記述されていない。

(7) チャイコフスキーの交響曲第5番でも、ギルバートの軽やかな指揮ぶりは変わらないが、重量感を増した金管楽器、こってりした音を塗り広げる弦楽器に押し切られた格好だ。むしろ、アンコールのグリーンカ「ルスランとリュドミラ」序曲で、水際だったアンサンブルを取り戻した楽員の切り替えの速さに驚かされた。

(日本経済新聞 2014.02.24)

(8)日本人はかんきつ系、グリーン系などさわやかな香り、フローラル系のかわいい香りを好む傾向がある。「日本の夏は湿度が高いため、こってりと重い香りより、さわやかな香りを選んだほうが、自分にも周囲にも負担が少ないのではないか」と原田さん。

(日本経済新聞 2012.04.14)

(9) 86年から自らの音楽活動を始め、ソウルやゴスペルのグループで歌い続けてきた。知り合いのミュージシャンたちと「新世界」を結成したのは00年。こってりした大阪弁のしゃべくり、つけまつげとかつらをつけた派手な衣装。独創的なライブパフォーマンスも相まって人気を博してきた。 (毎日新聞 2005.03.17)

(10)もともとは、少年向けに書かれた小説だから、活字の大きさも訳文も読みやすい。とはいえ、おとなが読んでも十分に楽しめる冒険小説の佳作である。昨今のこってりした翻訳小説に食傷している向きには、一服の清涼剤になるだろう。 (朝日新聞 2010.05.16)

さらに、「こってり」の複数の意味の関連性、意味のネットワークは、これまでの研究では明らかにされていない。

これまでに検討した先行研究における意味記述の問題点は次のようにまとめられる。

a. 「濃度が高いさま」「厚みがあるさま」を表すとされているが、そ

の記述では不十分である。

- b. 母語話者にとって、慣習性が低くても理解可能な創造的な意味用法が、従来の辞典では記述されていない。
- c. 複数の意味の関連性、「こってり」の意味のネットワークが明らかにされていない。

以上、先行研究を検討し、問題点を指摘した。次節では、これらの問題点を踏まえ、本稿の分析を進める。

4.3.2 分析

本節では、多義語分析の課題を踏まえ、「こってり」の複数の意味を認定し、記述する。4.3.2.1 節から 4.3.2.4 節では、認定した「こってり」の 4 つの別義について、例文に基づき説明する。

4.3.2.1 別義 1

＜すぐに解消されないものが口の中に残り味覚的に重さを感じられるさま＞

- (11) 純米酒や熟成酒など、コクのあるお酒には、マグロのお刺し身や豚の角煮など、味が濃く油分も多いこってりした料理が合います。 (中日新聞 2012.03.18)
- (12) 豪州では主に牧草を食べて育つ脂肪分のほとんどない赤身肉が一般的。これに対して和牛の肉は日本と同じように穀物中心に与えて「サシ」と呼ばれる脂肪分が多くこってりとした味わいが受けている。 (日本経済新聞 2013.01.07)
- (13) 上白糖はグラニュー糖より溶けやすく、ややコクのある甘さ。ブラウンシュガーや三温糖は上白糖より純度が低いので、素朴な味わいがあり、こってりとした甘さが舌に残ります。本書では、風味の違いでこれらの砂糖を使い分けています。
(『簡単手作りクッキー&ケーキ』村井りんご 西東社 2002)

例(11)の「マグロのお刺し身や豚の角煮」は、「味が濃く油分も多い」料理であり、例(12)の「和牛の肉」は、「脂肪分が多い」ものである。そういった「油分が多い」「脂肪分が多い」ものを食べると、粘りや脂っこさが口の中に残る。例(13)の「ブラウンシュガーや三温糖」については、「甘さが舌に残る」とある。脂っこさや甘さはいずれも、すぐに消えず、口の中に残りやすい。このような脂っこさや甘さなど

は、粘りと同様に、残ると口の中が動きにくいと考えられる。このように、脂っこさなどが残るということは、「動きにくい」という身体的経験と共通するので、「重さを感じさせるもの」だと捉えられる。

4.3.2.2 別義2

くすぐに解消されないものが目に焼き付き視覚的に重さを感じられるさま>

(14)アントニオ・バンデラス 情熱の国スペインの人らしくこってりとした顔をしておいでです。

(www2.gol.com/users/seigakai/2-1/news7.html)

(15)ハンバーグにつやつやしたデミグラスソースがからみ、こってりした見た目だが、しつこくない。ベルギービールを入れるビール煮はすき焼きのような味わいだ。(朝日新聞 2013.05.01)

(16)フランス・ヴェルサイユ宮殿美術館が所蔵するナポレオン時代の絵画、工芸品などを紹介する「ナポレオンとヴェルサイユ展」が神戸市立博物館で開催中だ。大学生の岡沢加奈さん(19)は「華麗な作品を想像して来たが、質素でシンプルな作品が多いのは意外だった」。ヴェルサイユ宮殿の豪華でこってりしたイメージとは裏腹に、清らかでさっぱりとした空気が会場を包んでいる。

(日本経済新聞 2006.01.24)

例(14)の「スペインの人の顔」は、一般的に目鼻立ちのはっきりした、いわゆる彫の深い顔を指す。目鼻立ちのはっきりした顔や彫の深い顔は、日本人が見慣れた顔と異なり、印象に残りやすい。例(15)では、「ハンバーグ」の「味」ではなく、「見た目」を述べられている。「デミグラスソース」ということから、そもそも濃厚なイメージであり、さらに「つやつや」ということから、油分が溢れているさまが窺える。例(16)の「ヴェルサイユ宮殿」の豪華なイメージは、「清らかでさっぱりとした会場の空気」と反するもので、派手で濃厚なイメージだと想定できる。

以上、別義1(味覚)、別義2(視覚)は、辞典に記述されている。一方、「嗅覚」「触覚」「聴覚」に関する用法は、辞典には記述されていないが、次のような例が見られる。

(17)日本人はかんきつ系、グリーン系などさわやかな香り、フローラル系のかわいい香りを好む傾向がある。「日本の夏は湿度が高い

ため、こってりと重い香りより、さわやかな香りを選んだほうが、自分にも周囲にも負担が少ないのではないかと原田さん。

(= (8))

(18)戦後の貧しい時代には、化粧品にも“リッチ感”のある、油分が多くこってりした質感が好まれました。70年代になり、サラッとした化粧品の望む人が増え、時代が変わったと感じました。

(毎日新聞 2003.05.22)

(19) チャイコフスキーの交響曲第5番でも、ギルバートの軽やかな指揮ぶりは変わらないが、重量感を増した金管楽器、こってりした音を塗り広げる弦楽器に押し切られた格好だ。むしろ、アンコールのグリーンカ「ルスランとリュドミラ」序曲で、水際だったアンサンブルを取り戻した楽員の切り替えの速さに驚かされた。

(= (9))

例(17)から、「こってりと重い香り」は、「さわやかな香り」と対立しているとわかる。また、「自分にも周囲にも負担が少ない」ということから、「こってりと重い香り」は、「負担が大きい」と言える。「負担が大きい」香りというのは、「鼻につく香り」だと言える。例(18)での「戦後の貧しい時代に好まれた化粧品」は、「リッチ感のある」「油分が多い」とある。油分が含まれる化粧品には、粘りが感じられる。粘りがあるので、肌につきやすく、簡単に取れない。その点で純粋な液体とは異なる。例(19)の「弦楽器の音」は、「塗り広げる」対象であり、粘りがあるもののように捉えられていることがわかる³⁴。つまり、粘りがある「音」は取り除きにくく、耳に残る。

このような「嗅覚」「触覚」「聴覚」の用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 A <すぐに解消されないものが鼻に残り嗅覚的に重さが感じられるさま>

事例 B <すぐに解消されないものが肌に残り触覚的に重さが感じられるさま>

事例 C <すぐに解消されないものが耳に残り聴覚的に重さが感じられるさま>

以上、「こってり」は、五感に用いられるとき、一般的に「～(と)

³⁴ 「こってり」が「音」に用いられる実例を見ると、「こってりした音を塗り広げる」の他にも「油絵のようなこってりとした音」、「こってりと濃厚な音」といったように、常に喩えていることが意識されるような表現とともに用いられている。

した/している」の形で用いられ、対象の属性を表す。「こってり味」や「こってり感」「こってり系」³⁵といった表現も見られる。

4.3.2.3 別義3

＜粘り気のある対象が簡単に取れないほど積み重なって付着していて重さが感じられるさま＞

(20) 散歩の準備として、これ以上、しみ、しわ、色黒になるのは困るので、日焼け止めクリームをこってり塗る。(毎日新聞 2003.06.19)

(21) 日本海でロシアのタンカー「ナホトカ号」が沈没、積み荷の重油が流出したというのです。重油は福井、石川など日本海側九府県の海岸に漂着して、岩や砂などにこってりとついて汚染しました。
(中日新聞 1997.07.20)

(22) 東京の甘味屋に、みたらし、というものが売られているのだが、それは本当のみたらしとはまるで別の、とてつもないものである。短めの串で、名古屋よりちょっと大きめのだんごが4個さしてある。焼いた形跡がなくて、だんごは白くてふにゃふにゃだ。そして、ジェル状のくそ甘いたれがこってりと塗ってあるのだ。
(毎日新聞 2011.05.12)

例(20)の「日焼け止めクリーム」には、ある程度油分が含まれるので、粘り気があると考えられる。散歩の準備として「日焼け止めクリーム」を多く塗ると、簡単に取れないほど肌に付着する。例(21)の「重油」も、粘り気が多いものである。また、「岩や砂などについて汚染した」ことから、簡単に取れないほど厚く岩や砂に付着したことが窺える。例(22)の「ジェル状のくそ甘いたれ」は、ジェル状で粘着性があり、糖分が含まれているので、粘り気がある。積み重ねて塗ると、簡単に取れない。

本来粘り気が多いものは、流動性が低い。量が多ければ、さらに動きにくくなる。この点で「重さの身体的経験」を基盤としていると言える。

「こってり」の別義3は、「付着」を表す「塗る」「付く」「塗り重ねる」などの動詞と共起して副詞的に用いられる。

³⁵ 「こってり味」は、「こってりした味」が省略されたものだと見なせるが、「こってり感」「こってり系」は、「*こってりした感」「*こってりした系」と言えないことから、一語化していると考えられる。

4.3.2.4 別義 4

＜その場を離れられないほど繰り返して叱られて重さが感じられるさま＞

(23)前から言われていた「史上最弱」のレッテルはこの時、決定的となった。選手たちはこれに猛反発。「『お前たちならセンバツに行ける』と言っていたのに突然、史上最弱とは何だ」。数人を除いて3年生が練習をボイコットした。普段は週1回の買い出し以外は外出禁止。厳しい生活の中での“脱走”だった。夜遅く、恐る恐る宿舎に戻ると、指導陣の説教が待っていた。午前3時までこっそりと絞られた。脱走組の3年生は、翌日から練習への参加が禁止され、グラウンドでひたすら練習を見ているだけとなった。苦痛だった。
(毎日新聞 2008.08.01)

(24)週末の深夜、一宮市の市街地の交差点で信号待ちをしている男性から「青になっても先頭の車がちっとも動かない」と110番通報。駆け付けた署員が問題の車を見ると、30代の男性が気持ちよさそうに寝息をたてていた。起こされた男性は「仕事で疲れていて…」とまだ眠そうな表情。「週末で疲れがたまってるのは分かるけれど、場所を考えて」と署員にこっそり絞られた。
(中日新聞 2001.03.19)

例(23)では、脱走組の3年生が指導陣に説教されたことについて述べられている。「午前3時まで」ということから、説教は、相当な時間をかけて行われたとわかる。つまり、繰り返して叱られ、叱られる人は、その場から逃げたくても逃げられず、その場から離れられないと感じる状態が長時間続いたことになる。例(24)では、交通違反の男性が署員に叱られたことについて述べられている。署員の言葉は「週末で疲れがたまってるのは分かるけれど、場所を考えて」の一言だけで終わったわけではなく、ある程度の時間叱られたことが想像される。

繰り返して叱られることは、言葉が重ねられることであり、言葉が重ねられている間、人はその場を離れられず、動きにくい。この点で「重さの身体的経験」を基盤としている。

「こっそり」の別義4は、「こっそり(と)油を絞られる」という表現をはじめとして、「説教する」「叱る」「責める」といった「説教」を表す動詞の受身形と共起して、様態副詞として用いられる。

以上、別義3と別義4の「こっそり」は、感覚以外の意味に用いられ、辞書にも記述されている。次の例(25)(26)のように、辞書に記述されていない例が見られる。

(25) 最近の小説には、暴力やセックス、異常心理、ホラー、ファンタジーが目立つ。それはそれで面白いが、全般にはかなりこってりと偏ってきた印象が強い。そのためか、逆に「普通」をひきたたせる小説が求められている。(朝日新聞 1999.05.22)

(26) 去年の十月、網走にある北海道立北方民族博物館を再訪した。研究機関でもあるこの博物館は、小規模ながらとてもこってりとした内容をもっている。北海道やサハリンの民族資料ばかりでなく、ロシアや中国、北ヨーロッパ、さらにベーリング海峡をへだてた北米まで、広い範囲の生活用具が陳列されている。

(日本経済新聞 1999.01.12)

例(25)では、最近の小説は、暴力やセックス、異常心理、ホラー、ファンタジーが目立つと述べられている。暴力やセックス、異常心理などから衝撃を受ける。このような衝撃は、頭から離れにくく、頭の中で積み重なっていると考えられる。例(26)では、北海道立博物館には、北海道やサハリンの民族資料ばかりでなく、ロシアや中国、北ヨーロッパ、さらにベーリング海峡をへだてた北米まで、広い範囲の生活用具が陳列されていると述べられている。小規模の博物館であるが、訪れた人には、その展示内容の衝撃が大きく、頭の中から離れにくいので、頭の中で積み重なっていると考えられる。

私たちは、何かを読んだり、見たりするなどさまざまな経験から受ける衝撃が重ねられると、それらの衝撃が頭から離れにくいと考えられる。この点で「重さの身体的経験」を基盤としていると言える。

このような用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 D < 衝撃が頭から離れないほど積み重ねられて重さを感じられるさま >

4.3.3 「こってり」の意味のネットワーク

本節では、まず、4.3.2.1 節から 4.3.2.4 節で認定した「こってり」の4つの別義を再掲し、プロトタイプの意味を認定したうえで、多義的別義の関係とすべての意味のネットワークを提示する。

4.3.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係

以下に、これまで検討した「こってり」の4つの別義を再掲する。

別義 1 <すぐに解消されないものが口の中に残り味覚的に重さが感じられるさま>

- ・ こってりとしたとんこつラーメンが大人気だ。

別義 2 <すぐに解消されないものが目に焼き付き視覚的に重さが感じられるさま>

- ・ 欧米の人は、こってりした顔だね。

事例 A <すぐに解消されないものが鼻に残り嗅覚的に重さが感じられるさま>

- ・ こってりとした香りは、あまり好まれない。

事例 B <すぐに解消されないものが肌に残り触覚的に重さが感じられるさま>

- ・ クリームをいっぱい塗ったら、こってりした感触がする。

事例 C <すぐに解消されないものが耳に残り聴覚的に重さが感じられるさま>

- ・ こってりとした音が出る楽器は何ですか。

別義 3 <粘り気のある対象が簡単に取れないほど積み重なって付着して重さが感じられるさま>

- ・ こってりとジャムとクリームを塗りたくったケーキは、見るからに甘そうだ。

別義 4 <その場を離れられないほど繰り返して叱られて重さが感じられるさま>

- ・ 酔っぱらって家に帰ったら、父親から一晩中 こってり説教された。

事例 D <衝撃が頭から離れないほど積み重ねられて重さが感じられ

るさま>

- ・あのドラマはほんとうにこってりしている。

本稿では、別義1を「こってり」のプロトタイプの意味として認定する。認定の理由は、以下の3点である。

第一に、別義1が味覚的経験として、身体性が高く、認知されやすいということである。その上、「味覚」に関する意味の定着度が最も高い³⁶。

第二に、別義1が母語話者にとって直観的に基本的だと感じられるということである。つまり、「こってり」と聞いたときに母語話者は最初に「味覚」を表す例を思い浮かべる³⁷。

第三に、別義2、別義3、別義4は、別義1を二次的活性化する³⁸ことから、別義1は、他の意味を理解する際の前提となり、ここを起点として多くの多義的別義を拡張させているということである。

本稿は、母語話者の判断と実例の存在を重視し、別義1をプロトタイプの意味と認定する。続いて、多義的別義の相互関係について検討する。

まず、別義2は、別義1から拡張したと考えられる。つまり、「すぐに解消されないものが目に焼き付き視覚的に重さが感じられるさま」と「すぐに解消されないものが口の中に残り付き味覚的に重さが感じられるさま」の間に、「対象が簡単に消失されないほど重さが感じられるさま」という類似性が抽出でき、メタファーに基づいて拡張していると考えられる。この類似性は、スキーマ1として抽出される。分析での事例A、事例B、事例Cの掲載例に多少の不自然さを感じる人もいるようであるが、多くの日本語話者にとって、意味が理解できるようである。事例A、事例B、事例Cが容認されるのは、スキーマ

³⁶ 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では、「こってり」の検索例は、総計139例であり、「味覚」を表す例は、108例である。また、「こってり味」のような慣習度が高い複合語が存在する。

³⁷ 「こってり」のプロトタイプの意味を認定するにあたり、日本語母語話者12名に「こってり」と聞いて、どのような意味が最初に想起されるかというテストを行った。判定者は、22歳から35歳までの男性4名、女性8名、愛知県、宮城県、東京都、岐阜県、三重県出身の文科系大学院に在籍している大学院生である。その結果、12名の日本語話者全員が、「とんこつラーメン」「脂」などの「味」を表す意味を最初に思い浮かべた。

³⁸ 「こってりとした油絵/匂い/ハンドクリーム/音」及び、「こってり塗る」「こってり油を絞られる」「こってりとした内容」というとき、「こってり」本来のくすぐに解消されないものが口の中に残り味覚的に重さが感じられるさま>という意味も思い浮かべる。

1 が活性化されるためである。この事例 A、事例 B、事例 C は非慣習的用法であり、スキーマ 1 の事例として捉えられる。

次に、別義 3 は、別義 1 から拡張したと考えられる。つまり、「粘り気のある対象が簡単に取れないほど積み重なって付着して重さを感じられるさま」と「すぐに解消されないものが口の中に残り付き味覚的に重さを感じられるさま」の間にも、「対象が取れにくく重さを感じられるさま」という類似性があるため、この関係もメタファーに基づく拡張関係である。

最後に、別義 4 は、別義 1 から拡張したと考えられる。つまり、「その場を離れられないほど繰り返して叱られて重さを感じられるさま」と「すぐに解消されないものが口の中に残り重さを感じられるさま」の間には、「対象が動きにくく重さを感じられるさま」という類似性があることから、メタファーに基づいて拡張していると言える。

この別義 1、別義 3、別義 4 の間の類似性は、スキーマ 2 として抽出され、事例 D が容認されるのは、スキーマ 2 が活性化されるためである。この事例 D は非慣習的用法であり、スキーマ 2 の事例として捉えられる。

「こってり」の多義的別義間の相互関係から、すべての意味のネットワークは次のように示すことができる。

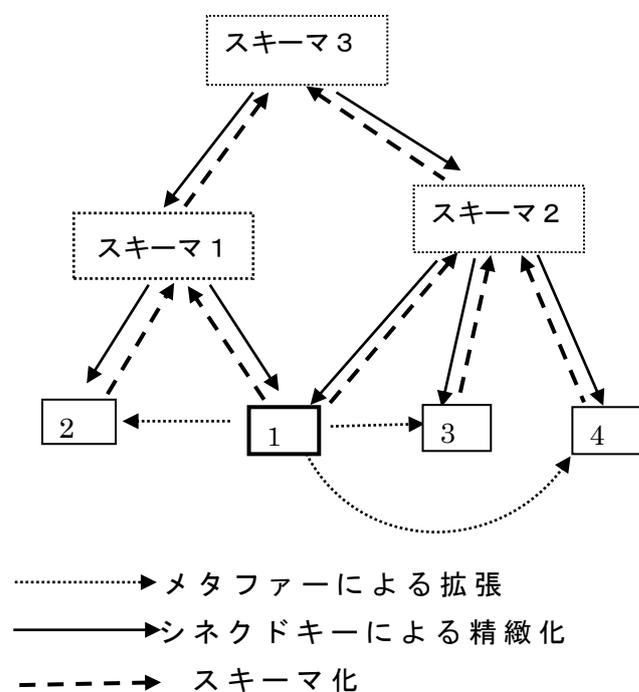


図 4-1 「こってり」の意味ネットワーク

図 4-1 では、太線のボックスで囲まれた別義 1 がプロトタイプ意味であり、最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。まず、別義 1（こってりとした味）と別義 2（こってりとした油絵）の間には、類似性が認められ、1つのカテゴリーに組み込まれたわけであるが、感覚器官の違いがあり、別義 2 は、別義 1 からのメタファーによる拡張例としてカテゴリー化される。しかし、両者の間には<すぐに解消されないものが感覚器官に残り重さが感じられるさま>という共通性があるため、この共通性がスキーマ 1 として抽出される。このスキーマ 1 もカテゴリーの中に階層的に組み込まれる。つまり、別義 1 から別義 2 への拡張は、スキーマ化を伴い、別義 1 と別義 2 は、スキーマ 1 の精緻化された例としても考えられる。このスキーマ 1 は、別義 1、別義 2 ほどには定着度が低いものの、事例 A、事例 B、事例 C が理解・使用されることから、ある程度単位として定着していると考えられる。

次に、別義 1（こってりとした味）と別義 3（こってりと塗る）の間には、類似性が認められつつ、「身体的に感じる重さ」と「物理的に感じる重さ」の違いがあるため、別義 3 は、別義 1 の拡張例であり、この拡張に伴い、スキーマも抽出される。別義 1（こってりした味）と別義 4（こってりと油を絞られる）の間には、類似性が認められながらも、対象には違いがあるため、別義 4 は、別義 1 の拡張例であり、この拡張に伴い、スキーマも抽出される。別義 1 と別義 3 のスキーマ、別義 1 と別義 4 のスキーマは、スキーマ 2 <対象が残り重さが感じられるさま>に統合されている。このスキーマ 2 の定着度は、別義 3 と別義 4 ほど高くないものの、事例 D が理解・使用されることから、ある程度定着していると言える。

最後に、スキーマ 1 とスキーマ 2 から、スキーマ 3 <重さが感じられるさま>が抽出される。このスキーマ 1、スキーマ 2 とスキーマ 3 は、意味として確立していないため、点線のボックスで囲まれている。

以上、多義的別義の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。このような分析がネットワーク・モデルの有効性を示していると言えよう。

4.3.3.2 感覚内の意味転用

「こってり」において、プロトタイプの意味である味覚的経験から、視覚的経験へ転用されている。前節では、別義 1（味覚）と別義 2（視覚）の間には類似性が認められることを述べ、比喩の観点から、メタファーによる拡張であると述べた。しかし、別義 1 と別義 2 には、同時性も認められ、本稿の定義による「共感覚」を基盤とした転用でも

ある。この転用は、「一方向性仮説」に従うものである。

一方、「嗅覚」「触覚」「聴覚」を表す事例 A、事例 B、事例 C は、共感覚を基盤とした転用ではない。あくまでもスキーマ的意味の事例であり、プロトタイプの意味の間には類似性があるのみである。感覚内の意味転用については、第 6 章で詳述する。

4.3.4 まとめ

本節は、「こってり」の意味を分析し、4つの多義的別義を認定・記述した。そして、別義 1 をプロトタイプの意味として認定し、多義的別義の相互関係を示した上で、意味のネットワークを記述した。最後に、「味覚」から「視覚」への感覚内の意味転用は共感覚に基づく転用であることを述べた。

4.4 「あっさり」

本節では、「あっさり」について、多義語分析を行う。4.4.1 節では、「あっさり」の意味記述に関する先行研究を取り上げ、その記述を検討し、問題点を指摘する。4.4.2 節では、「あっさり」の複数の意味を認定する。4.4.3 節では、プロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係及びすべての意味のネットワークを示す。

4.4.1 先行研究の検討

「あっさり」の意味を考察したものは、管見の限り、国語辞典、類語辞典、擬音語擬態語辞典に限られる。それらの辞典の中から、飛田・浅田(2002)、森田(1989)の考察を中心に検討していくことにする。

まず、飛田・浅田(2002)は、次のように記述している。

(Ⅰ) 執着が少なく淡泊である様子を表す。プラスイメージの語。

味(和食は一般にあっさりしている)、柄(もうすこしあっさりした柄はないんですか)、性格(兄はもの事にこだわらないあっさりとした性格だ)、行為(警察の取調べは意外にあっさりしていた)などが、対象に対する執着や刺激が少なく淡泊である様子を表す。一般に濃厚なものより淡泊なものを好む日本文化の特徴が表れている。

(Ⅱ) 物事が簡単に決着がつく様子を表す。ややプラスよりのイメージの語(その小学生は難問をあっさり解いた)。

物事が予想に反して簡単に決着がつくことについて、物足りなさの暗示がある。

この「あっさり」は、「すんなり」に似ているが、「すんなりは、

物事が抵抗なく進行・成就する様子を、話者が意外性の暗示を伴って述べる。(p.4)

意味(I)は、「味」「柄」「性格」「行為」などの対象に対して、いずれも「執着や刺激が少ない」「淡泊」といった表現を用いて記述されている。物理的なものの「執着や刺激が少ない」や「淡泊」といった特徴は比較的捉えやすい。しかし、「性格」「行為」など物理的に捉えられないものも同様に「執着や刺激が少ない」「淡泊」と捉えられるのはなぜなのか、それについては明らかにされていない。また、「淡泊」と「あっさり」は、類義関係にあると考えられるが、その違いについては不明瞭であり、この記述は十分であるとは言えない。

意味(II)は、ややプラスよりのイメージの語であるとされているが、「プラスよりのイメージ」という説明と「物足りなさの暗示」という説明には矛盾があると言える。そして、「あっさり」は「すんなり」に似ているとし、その違いとして「すんなり」は、「意外性の暗示を伴う」と指摘している。「意外性の暗示」というのは、「あっさり」の「予想に反する」と同じであり、両者の違いは明確ではない。しかし、両者の置き換えができない場合もある。例えば、次の例(27)では、「あっさり」は「すんなり」に置き換えにくい。

(27) 六十年後、名古屋の夏は三度も暑くなるー。名古屋大大学院の飯塚悟准教授(都市環境工学)らの研究チームが二〇七〇年代の八月の平均最高気温を予測したところ、今年の記録的猛暑をあっさりと超えた。(中日新聞 2014.01.05)

つまり、例(27)の「今年の記録的猛暑をあっさり超えた」には、意外性が含まれていると思われるが、「すんなり」に置き換えにくいということから、「意外性の暗示」は、両語の違いとは言えず、「あっさり」の意味をさらに精緻に分析する必要がある。

次に、森田(1989)の記述を見る。

精神や感覚に強くいつまでも留まっていなくて、じきに解消してしまうさま。そのような状態にある主体や性質に対して用いる他、行動の進め方の様子にも転義的に用いる。(p.60)

森田(1989)は、「あっさり」を以上のように定義したうえでさらなる分析を行っている³⁹。

³⁹ 森田(1989)は、「あっさり」に「すぎる」が付く場合「あっさりすぎる/あっさりしすぎ

分析 1

- ① 「あっさりした+名詞」もしくは「あっさりしている」の形でそのものの状態がしつこくなく淡泊であるさま。「あっさりした～/あっさりしている」とサ変動詞化し、「た/ている」によって状態表現となっている。形容される事物としては、

あっさりした { 味、味付け、料理
色、色合い、模様、柄、取り合わせ
性格、気性、好み、人、人間

「物にこだわらないで、あっさりしたものだ」「いつまでもくよくよせず、あっさりした態度」「思い切りがよくて実にあっさりしている」のような味覚、色彩感覚や物に執着しない性格などに用いられる。「あっさり」は本来の程度と比べてかなり密度を落としたことによって生まれる美的感覚。

「あっさりした～」は、味覚・視覚・性格などから、さらに「あっさりした応待」のような人間の行為の在り方にも用いられる。これがさらに次の②の用法を生む。

- ② 「あっさり(と) ...する」の形で動詞に係りその事柄にこだわっていつまでも決断や行為を滞らせるようなことをせず、いとも簡単にさっさと事を行うさま。自己の行動にも、他者のことにも用いる。また、簡単にさっさとことが片付いてしまうさま。

あっさり(と) ...断られた/引き受けた/片付ける/やってのける/諦める/決まる/負ける/勝つ (pp.60-61)

飛田・浅田(2002)と同様に、森田(1989)も「あっさり」がどのような物事に用いられるかを述べたうえで、「本来の程度と比べてかなり密度を落としたことによって生まれる美的感覚」と指摘している。しかし、「本来の程度」がどのようなものかは不明である。また、以下の例(28)(29)では、「本来の程度」と比べているとは感じられず、「程度」というのは何の程度であるのか、さらに検討する必要がある。

- (28) 「えごようかん」は通常のようなかんの寒天の代わりにえごを使ったもの。従来のようかんより舌触りがやわらかく、甘さは控えめであっさりとしているのが特徴だという。

る」の二つの形式が見られるとし、その意味の分析もしているが、あくまでも「すぎる」が付いた場合の意味であり、本稿では取り上げない。

(日本経済新聞 2014.03.15)

(29)10日朝7時、宿泊先の大阪のホテルが用意したメニューはフキのきゃら煮、サンマのしょうが煮、白菜とベーコンの煮浸し、サニーレタス、(中略)オレンジとにぎやか。脂っこいものは避け、あっさりとした和食が中心。夕食はバイキングのため、朝食は栄養バランスに配慮し品数を多くしているという。

(朝日新聞 2010.12.11)

例(28)は、「従来のようかんの甘さ」と比べているが、その「従来のようかんの甘さ」は、「えごようかん」の「本来の甘さの程度」とは言えない。この例では、「ようかん」というカテゴリーの中の他の成員と比べていると解釈できる。例(29)の「和食」の「本来の程度」というのも、そもそも「和食」自体が「あっさりしている」と思われ、「和食の本来の程度」と比べているのではなく、「料理」というカテゴリーの中の「洋食」「中華料理」などと比べていると考えられる。

以上のことから、私たちは、自然に何らかの基準との比較のなかで「あっさり」を捉えているということが確認できる。ただし、どのような基準と比較しているのかは明らかではない。

そして、森田(1989)は、「あっさりした～」は、味覚・視覚・性格などから、さらに「あっさりした応待」のような人間の行為の在り方にも用いられると述べ、これがさらに②の用法を生むとし、意味の関連性についても触れてはいるが、その関連性の動機づけや意味のネットワークは明らかにされていない。

また、国語辞典における「あっさり」の記述は、ほとんどが「味」「色」「形態や様式」に限られている。『類語辞典』(2002)では、「味」「色」の他、「匂い」も表すとされているが、以下の例(30)(31)のように「触覚」「聴覚」に関する用法は、どの辞典にも言及がない。

(30)三月に香港で開催される国際的な生地見本市「インターストップ・アジア・エッセンシャル」の春夏ものの展示会に参加する。展示会向けに制作した麻や絹に和紙を組み合わせてあっさりした質感の生地や、シルクに竹や大豆などの繊維を掛け合わせた生地など約百十点を展示し、現地の業者に売り込む。

(日本経済新聞 2009.02.10)

(31)(くみたて「LabKL-サンカ」補聴器レビュー)一番の特徴は音の立ち上がりの早さ、アタックの強さ。音の余韻は控えめなので、スパッと出てスッと消える、あっさりした小気味の良い音を出す。この出音のおかげか、楽器ひとつひとつが聴き分けやすい。

また、「あっさり」の複数の意味の関連性、意味のネットワークは、これまでの研究では明らかにされていない。

以上の先行研究の問題点を次にまとめる。

- a. 「味」「色、柄」などの五感的経験だけではなく、「人の性格」「人の行為」についても「しつこくなく淡泊である」と記述されているが、「しつこくない」ことや「淡泊である」ことが、各領域において、具体的にどのようなことなのかは明らかではない。
- b. 飛田・浅田(2002)の「予想に反して」と森田(1989)の「本来の程度と比べて」といった記述から、「あっさり」は、何らかの基準と比較がなされて用いられると考えられるが、その基準が何であるかは明確ではない。
- c. 母語話者にとって、慣習性が低くても理解可能な用法が、従来の辞典では記述されていない。
- d. 複数の意味の関連性、すべての意味のネットワークが明らかにされていない。

以上、先行研究の検討を通して、問題点を指摘した。次節では、これらの問題点を踏まえ、本稿の分析を進める。

4.4.2 分析

本節では、多義語分析の課題を踏まえ、「あっさり」の複数の意味を認定し、記述する。4.4.2.1 節から 4.4.2.5 節では、「あっさり」に認定した5つの別義を、例文に基づき説明していく。

4.4.2.1 別義 1

＜同一カテゴリーの典型例⁴⁰と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま＞

(32)10 日朝 7 時、宿泊先の大阪のホテルが用意したメニューはフキのきやら煮、サンマのしょうが煮、白菜とベーコンの煮浸し、サニ

⁴⁰典型例の定義は、第3章の3.2.2節を参照されたい。本稿では、典型例は、文脈によって高められた典型例と、文脈がなくとも典型例として思い浮かぶものがあると考え。例えば、「中華料理」というと、文脈がなくとも「酢豚」や「麻婆豆腐」など「脂っこいもの」を思い浮かべる。「和食」というと、「そば」や「うどん」など「あっさりとしたもの」を浮かべる。一方、「若者は、天ぷらなど脂っこい日本料理が好きだ」という例においては、脂っこい「てんぷら」が日本料理の典型例として活性化される。

ーレタス、(中略) オレンジとにぎやか。脂っこいものは避け、あっさりとした和食が中心。夕食はバイキングのため、朝食は栄養バランスに配慮し品数を多くしているという。 (= (29))

(33) (前略) くるみと中国茶のアイスクリーム カリッと香ばしいくるみのキャラメリゼがアクセント。紅茶のアイスに近いけれど、もっとあっさりした大人の味。わたしのアイスレパートリーの中でもイチオシです。(信太康代『綺麗な女のかわいいお菓子』講談社 2002)

(34) 長崎や福岡などからブリの若魚のツバスが入荷している。今後もお買い得な相場が続きそうだ。脂が乗った冬場のブリと違い、あっさりと食べられて夏場向き。(中日新聞 2010.08.07)

例(32)では、ホテルの朝食について「和食が中心」であると述べられている。料理というカテゴリーの中では、和食に対立するものとして中華、洋食などを思い浮かべる。つまり、料理というカテゴリーの典型例が洋食や中華である。洋食や中華は、脂っこい料理が多いため、それらと比べて、和食は脂っこさなどが抑えられている。例(33)では、「大人の味」は、甘さが抑えられた味である。アイスクリームの典型例は、子どもが好むような甘い味である。それと比べ、紅茶のアイスクリームは「大人の味」であり、あっさりしているが、ここで話題になっている中国茶のアイスクリームは、その紅茶味よりも、より甘さが控えられた味であり、よりあっさりしていると解釈できる。例(34)では、「ブリの味」について述べられている。「ブリの味」というカテゴリーの中にも様々な味があるが、この例では、典型例として「冬場のブリの味」が挙げられている。脂が乗った冬場のブリの味と比べて、「長崎や福岡などから入荷されたブリの若魚のツバス」は、脂が乗っておらず、抑えられている。

例(32)の「中華料理や洋食」は、文脈がない場合であっても、一般的に「料理」の典型例であると考えられる。それに対して、例(33)の「アイスクリーム」と例(34)の「ブリ」では、文脈がない場合、一般的に「甘いアイスクリーム」と「冬場の脂が乗ったブリ」は必ずしも同一カテゴリーの成員の典型例とは言えない。しかし、この2例においては、比較の基盤として、際立ちが高められているため、典型例であると捉えられている。

4.4.2.2 別義2

<同一カテゴリーの典型例と比べて外見に重さが抑えられていると
感じられるさま>

(35)家に仏壇を置いて先祖の霊をまつる習慣は、徳川時代になって庶民の間に広がり始めた。将軍のお膝元の江戸では、職人が企業家精神を発揮したことが仏壇の普及にひと役買った。武家や裕福な商家では、大工に豪華な仏間を施工してもらった例も珍しくなかった。そうしたところに設ける高価な仏壇でなく、町人など庶民も手が届きやすいものを、元禄期に木製家具などを作る職人たちが考えだした。クワやケヤキを使い、装飾が少なくあっさりしたデザインの仏壇を、本業の合間に製作した。

(日本経済新聞 2011.02.09)

(36) 近所の動物病院は、新築移転を機に待合室を分けて、それぞれお犬様とお猫様専用とした。先日、予防注射に出かけると、お犬様室の扉が開いており、これ幸いと中をうかがってみた。ハンガー のようなものが置いてあって、フリフリのドレスがたくさんかかっている。犬服のファッション雑誌まで出る時代だから、動物病院でついでにドレスを買う人もいるのだろう。片やお猫様室にはノミ駆除薬のポスターが張ってあるくらいで、あっさりしたものだ。

(毎日新聞 2006.09.03)

例(35)では、「家に置いた仏壇」について述べられている。仏壇にも様々なものがあるが、例文中に「大工に豪華な仏間を施工してもらった例も珍しくなかった」とあることから、武家や裕福な商家にとっては、仏壇と言えば「豪華な仏壇」が想起されやすいと解釈できる。一方、町民など庶民にとって仏壇から想起されるのは、「豪華な仏壇」ではない。「豪華な仏壇」と比べ「装飾が少ないデザインの仏壇」である。つまり、その外見の装飾が抑えられている仏壇である。例(36)では、「動物病院の待合室」の様子について述べられている。動物病院の待合室にも様々あるが、ここで取り上げられているのは、「フリフリのドレスがたくさんかかっている」お犬様室と、「ノミ駆除薬のポスターが張ってあるくらい」のお猫様室である。お犬様室については、「フリフリのドレスがたくさんかかっている」ということから、装飾が多く、おしゃれであると解釈できる。それに対して、「お猫様室」は、「ノミ駆除薬のポスターが張ってあるくらい」で装飾が抑えられている。

例(33)の「仏壇」と例(34)の「動物病院の待合室」は文脈がなければ、「豪華な仏壇」「フリフリのドレスもかかる部屋」は同一カテゴリーの成員の典型例として捉えられない。しかし、この例文中では、文脈によって典型例として際立ちが高められ、それが比較の対象となっていると考えられる。

以上、別義1（味覚）、別義2（視覚）は、現行の辞典にも記述されている。一方、「嗅覚」「触覚」「聴覚」に関する用法は、辞典には記述されていないが、次のような例が見られる。

(37)健康と美容面から発酵食品が静かなブームになる中、どんな料理にも使える調味料として、こうじの人気の高まっている。(中略) こうじの製造業者は全国各地にあるが、機械化された大量生産が多く、すべて手作業で行う業者は少ないという。河村幸信店長(42)は「機械では独特のあっさりした香りが表現できない」と話す。

(中日新聞 2012.01.23)

(38)三月に香港で開催される国際的な生地見本市「インターストップ・アジア・エッセンシャル」の春夏ものの展示会に参加する。展示会向けに制作した麻や絹に和紙を組み合わせてあっさりした質感の生地や、シルクに竹や大豆などの繊維を掛け合わせた生地など約百十点を展示し、現地の業者に売り込む。 (= (30))

(39) (くみたて「LabKL-サンカ」補聴器レビュー) 一番の特徴は音の立ち上がりの早さ、アタックの強さ。音の余韻は控えめなので、スパッと出てスッと消える、あっさりした小気味の良い音を出す。この出音のおかげか、楽器ひとつひとつが聴き分けやすい。

(= (31))

例(37)では、「こうじの香り」について述べられているが、「機械化された大量生産が多い」「機械では独特の香りが表現できない」といったことから、機械で生産したこうじの刺激が強い香りが典型例である。それと比べて手作業のこうじの香りは、自然でシンプルな香りであるので、刺激などが抑えられている。例(38)では、「生地の質感」について述べられている。生地というカテゴリーには様々あるが、異なる生地によって質感が強いものと弱いものがある。例えば、「麻や絹」といった天然素材はあまり質感が感じられず、皮やウールなど厚手の素材は質感が強く感じられる。質感が強く感じられるものは、典型例であると言え、それと比べて天然素材の「麻や絹」の生地は、質感が抑えられている。例(39)では、「補聴器の音」について述べられている。「小気味のいい音」に対立する音とは、雑音などで刺激を与える耳に不快な音である。補聴器の音は雑音などの刺激の程度が強いものが典型例である。「スパッと出てスッと消える」ということから、響きや雑音などがないと考えられ、典型例と比べて刺激が抑えられていると言える。

以上、「機械で生産したこうじの香り」、「皮やウールの質感」、「雑

音が強い音」は、必ずしも同一カテゴリーの成員の典型例ではないが、この3例においては、典型例として際立ちが高められ、比較の基準となっている。

「嗅覚」「触覚」「聴覚」に関する用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 A < 同一カテゴリーの典型例と比べて匂いに重さが抑えられていると感じられるさま >

事例 B < 同一カテゴリーの典型例と比べて触感に重さが抑えられていると感じられるさま >

事例 C < 同一カテゴリーの典型例と比べて音に重さが抑えられていると感じられるさま >

「あっさり」が五感に用いられるとき、圧倒的に「～(と)した/している」の形で用いられて「対象の属性」を表すことが多く、連体修飾語、述語いずれにも用いられる。また、「食べられる」「飾る」などの動詞と共起して結果副詞として用いられることもある。

4.4.2.3 別義3

< 同一カテゴリーの典型例と比べて人の言動に重さが抑えられていると感じられるさま >

(40) 今年3月末、陽介さんは東京駅の新幹線ホームにいた。恋人の香奈さんを見送るためだった。念願の女子アナウンサーになることが決まり、4月から遠く離れた地方のテレビ局で働く。「頑張ってるね」。「うん、頑張るね」。熱い抱擁もない、あっさりとした別れ。
(毎日新聞 2012.07.24)

(41) 過日、大型ショッピングセンターで買いものをしていたら、夫が、指輪がないと言う。一大事が起きたと気色ばむ私に反し、夫は、「こんなに広い場所では捜しようがない」と、あっさりあきらめてしまった。「ダメもとでもいいから」と促し、あちこちを捜したが見つからず、後味が悪いまま家に戻った。
(毎日新聞 2013.12.24)

例(40)では、恋人を見送る場面について述べられている。恋人を見送る場面には様々な場合があるが、別れたくない、離れがたいといった場面がまず想起されるだろう。それがこの場面の典型例である。だが、この例では、「熱い抱擁もない」ということから、典型的な場面と比べて、離れ難さ、抱擁など重さを感じさせるものが抑えられてい

る。例(41)では、「指輪を紛失した」後の夫婦の反応について述べられている。大事なものがなくなった後の反応には、様々な反応があるが、妻のほうは、「一大事が起きたと気色ばむ」とあり、それがよくある反応だと言える。一方、夫の「捜しようがない」「諦めてしまった」といった反応は、妻と比べて過度の反応など重さを感じさせるものが抑えられている。

以下の例(42)では、実際に「言動」はなされていない。同じ言動が何度も繰り返されれば次第にその人の習慣になり、その場合には、「人の性格」となる。

- (42) 倉又監督が悩むのはそこだ。強い気持ちをどうやって植え付けるのか。そうでなくても「最近の子はあっさりしている。抜かれると『しょうがないや』とやめてしまう」という傾向がある中で…。
- (中日新聞 2010.11.06)

例(42)を見ると、「抜かれると『しょうがないや』とやめてしまう」という傾向が「あっさり」と捉えられている。「あっさりした言動」を何度も繰り返せば、その人の「性格」とみなされやすい。「スポーツ選手の性格」にも様々な性格があるが、闘志があり、競争する気持ちが強い性格が、典型例である。そういった性格と比べ、最近の子は、強い気持ちがなくて諦めやすい傾向がある。つまり、勝利や成功に対する執着が弱い。

以上、「恋人を見送るときの言動」「指輪を紛失したときの言動」「スポーツ選手の性格」において、一般的に「別れたくない」「一大事が起きたと気色ばむ」「強い気持ちを持つ」というものが、思い浮かびやすい。つまり、それが典型例である。

「あっさり」の別義2は、「～(と)した/している」の形で、「人の性質」を表し、連体修飾語、述語のどちらにも用いられる。また、「断る」「言う」「答える」「許す」など「人間の言動」を表す動詞と共起して副詞的に用いられる。

4.4.2.4 別義4

<同一カテゴリーの典型例と比べて内容に重さが抑えられていると
感じられるさま>

- (43) 普通、“猫の本”は、いかに猫が可愛いか、いかに猫を愛しているかを過剰に語った、べたべたしたものが多いのだが、この絵本は違う。実にあっさりしている。
- (毎日新聞 1996.10.28)

- (44) 人を食ったみたいに簡素な借用書だってありうるのかもしれない。全寮制の高校時代、同部屋の友に少々借りた時はそうだった。ノートの切れ端に「500円、確かに」。でも、初めて会う人に「無利子、無担保、返済期限なし」で5000万円を借りておいて、こんなにあっさりとした記載ですむなんて市井の常識ではありえない。(中日新聞 2013.12.03)
- (45) あの日、私は社会部で夕刊デスクをしていました。尼崎の福知山線で列車が横転してけが人が出ている。一報は、確かこんなあっさりした内容でした。(中日新聞 2005.11.15)

例(43)では、「猫の本」について述べられている。「猫の本」にも様々なものがあるが、「猫の可愛さを過剰に語り、べたべたしたもの」が多いということから、可愛さについて語る量やその表現の仕方が過剰なものが典型例であるが、この絵本は、それと比べてその量や表現が抑えられている。例(44)では、「借用書」について述べられている。「簡素な借用書だってありうるのかもしれない」とあるように、様々な借用書があるが、「はじめて会う人」に多額の金銭を借りるときの借用書は、一般的に内容を慎重に検討し、形式的にもきちんと整えられたものが想起されやすい。それが典型例である。それに比べ、「無利子、無担保、返済期限なし」のみが記載された借用書は、正式な書類に要求される形式や内容が整っていない。例(45)では、「列車の事故」の報道について述べられている。様々な事故の報道の中でも、事故の悲惨さを語るものが典型例であるが、「けが人が出ている」という一報を述べるだけで、典型例と比べて悲惨さについての語りが抑えられている。

例(43)の「猫の本」といえば、文脈がない場合は、必ずしもべたべたしたものが同一カテゴリーの成員の典型例ではないが、この例において、典型例として、際立ちが高められている。例(44)例(45)の「初めて会う人との金銭借用書」「事故の報道」といえば、一般的に詳細な記載をしたり、事故の悲惨さを強調したりすると思われる。つまり、それが典型例であり、比較の対象となっている。

「あっさり」の別義3は、「～(と)した/している」の形で、「物事の内容」を表し、連体修飾語、述語のどちらにも用いられる。

4.4.2.5 別義5

<同一カテゴリーの典型例と比べて物事の実現に重さが抑えられていると感じられるさま>

- (46)「つながった世界」においては、様々な技術がお互いに影響し合い、様々な古い常識をあっという間に変えていく。1～2年前にあり得ないと思っていた変化が、あっさり実現してしまったりする時代なのだ。 (日経MJ 2013.06.21)
- (47)六十年後、名古屋の夏は三度も暑くなる。名古屋大大学院の飯塚悟准教授(都市環境工学)らの研究チームが二〇七〇年代の八月の平均最高気温を予測したところ、昨年の記録的猛暑をあっさりと超えた。 (= (27))
- (48)インフレ目標を導入すべきか、導入するならば目標値を何%にするかについてはさまざまな考え方があり、これまで長く論争が繰り広げられてきた。それだけに、意外なほどあっさりと2%に決まったという感がある。 (毎日新聞 2013.12.23)

例(46)では、「つながった世界における変化」について述べられている。「常識の変化」について、変化のスピードや大きさなどによって様々なタイプがあるが、一般的には簡単には変わらないと思われる。つまり、簡単には変わらず長く同じ状態に停滞するような変化が典型例である。だが、「あっという間に変えていく」といえば、その典型例と比べて停滞が抑えられて変化が簡単に実現されるということである。例(47)では、「最高気温の更新」について述べられている。「記録的猛暑」の記録は、簡単に更新されないものであると思われる。このような更新の実現に困難の程度が高いものが典型例である。それと比べて、困難さが抑えられて記録が簡単に破られたということである。例(48)では、「目標値の決定」について述べられている。「これまで長く議論が繰り広げられてきた」ことから、決定には長い時間が必要であり、すぐに決定されないことが予想されている。簡単には決定できず長く同じ状態に停滞する議論が典型例である。「それだけに、意外なほど」ということから、予想に反して簡単に決まったと感じられている。

以上、例(46)の「常識の変化」、例(47)の「最高気温の更新」は、文脈がない場合であっても一般的に長い時間が必要であり、スムーズに進まないのが典型例であると考えられるが、例(48)の「目標の決定」は、文脈の中で「長い議論が続きなかなか決定されない」というあり方の際立ちが高められ、比較の対象となっている。

「あっさり」の別義5は、物事の実現や成否を表す「成功する」「実現する」「負ける」などの動詞と共に副詞的に用いられる。

4.4.3 「あっさり」の意味のネットワーク

本節では、4.4.2.1 節から 4.4.2.5 節で認定した「あっさり」の5つの別義を再掲し、プロトタイプの意味を認定したうえで、多義的別義の相互関係とすべての意味のネットワークを提示する。

4.4.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係

以下に、これまでに検討した5つの別義を再掲する。

別義 1 <同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・夕食は、なるべくあっさりしたものにする。

別義 2 <同一カテゴリーの典型例と比べて外見に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・今年のファッションは、あっさりとした装飾が少ないデザインが主流だ。

事例 A <同一カテゴリーの典型例と比べて匂いに重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・あっさりとした香りが広がっている。

事例 B <同一カテゴリーの典型例と比べて触感に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・この服は、あっさりとした肌触りがする。

事例 C <同一カテゴリーの典型例と比べて音に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・このイヤホンの音は、あっさりしているね。

別義 3 <同一カテゴリーの典型例と比べて人の言動に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・私の親は本来、非常にあっさりした性格の人間だ。

- ・いつも「はい」「いいえ」のようなあっさりした返事だった。

別義 4 <同一カテゴリーの典型例と比べて内容に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・長時間かけて練った企画は、意外にあっさりしたものだ。

別義 5 <同一カテゴリーの典型例と比べて物事の実現に重さが抑えられていると感じられるさま>

- ・今年の学園祭は、あっさりと終了した。

本稿では、別義 1 を「あっさり」のプロトタイプの意味として認定する。認定の理由は、以下の 3 点である。

第一に、別義 1 が味覚的経験として、身体性が高く、認知されやすいということである。その上、「あっさり味」のような定着度が高い複合語が存在すること、及び相対的に使用例が多いことから、「味覚」を表す意味の定着度が最も高い⁴¹。

第二に、別義 1 が母語話者にとって直観的に基本的であると感じられるということである。つまり、「あっさり」と聞いたときに母語話者は最初に味覚を表す例を思い浮かべる⁴²。

第三に、別義 1 は、味以外の意味を理解する際の前提となり、ここを起点として、多くの多義的別義を拡張させているということである⁴³。

⁴¹『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では、「あっさり」の検索例は、総計 1463 件である。筆者の判断によると、別義 4 と別義 5 といった五感以外の用例を除いた 365 例の内、「味覚」に用いられているのは 291 例、「視覚」に用いられているのは 32 例、「嗅覚」に用いられているのは 4 例であり、「触覚」「聴覚」に用いられている例はない。

⁴²「あっさり」のプロトタイプの意味を認定するにあたり、日本語母語話者 12 名に「「あっさり」と聞いて、どのような意味が最初に想起されるか」というテストを行った。判定者は、22 歳から 35 歳までの男性 4 名、女性 8 名、愛知県、宮城県、東京都、岐阜県、三重県出身の文系系大学院に在籍している大学院生である。その結果、8 名の日本語話者が「あっさりとした醤油ラーメン」「あっさりした食べ物」などのように「味」に用いられる意味を最初に思い浮かべた。3 名が「あの人、あっさりとした人だね」というように、「性格」に用いられる意味を思い浮かべた。1 名が「あっさり返事した」というように、「物事の実現」に用いられる意味を最初に浮かべた。

⁴³多義的別義の相互関係については、後述する。

本稿は、母語話者の判断と実例の存在を重視し、別義1をプロトタイプの意味と認定する。続いて、多義的別義の相互関係について検討する。

まず、別義2は、別義1から拡張したと考えられる。つまり<同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>と<同一カテゴリーの典型例と比べて外見に重さが抑えられていると感じられるさま>の間に、<同一カテゴリーの典型例と比べて五感で捉えられる対象に重さが抑えられていると感じられるさま>という類似性が抽出でき、メタファーに基づいて拡張していると考えられる。この類似性がスキーマ1として抽出される。分析での事例A、事例B、事例Cに多少の不自然さを感じる人もいるようであるが、多くの日本語話者にとって、意味が理解できる。事例A、事例B、事例Cが容認されるのは、スキーマ1が活性化されるためである。この事例A、事例B、事例Cは、非慣習的用法であり、スキーマ1の事例として位置づけられる。

次に、別義3は、別義1から拡張したと考えられる。つまり<同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>と<同一カテゴリーの典型例と比べて人の言動に重さが抑えられていると感じられるさま>の間に、<同一カテゴリーの典型例と比べて対象に重さが抑えられていると感じられるさま>という類似性が抽出でき、メタファーに基づいて拡張していると考えられる。

さらに、別義4は、別義1から拡張したと考えられる。つまり、<同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>と<同一カテゴリーの典型例と比べて内容に重さが抑えられていると感じられるさま>の間に、<同一カテゴリーの典型例と比べて対象に重さが抑えられている>という類似性があるため、この関係もメタファーに基づく関係である。

最後に、別義5も、別義1から拡張したと考えられる。つまり、<同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>と<同一カテゴリーの典型例と比べて物事の実現に重さが抑えられていると感じられるさま>の間に、<同一カテゴリーの典型例と比べて対象に重さが抑えられている>という類似性があるため、メタファーに基づいて拡張していると言える。

「あっさり」の多義的別義の相互関係により、「あっさり」のすべての意味のネットワークは次のように示すことができる。

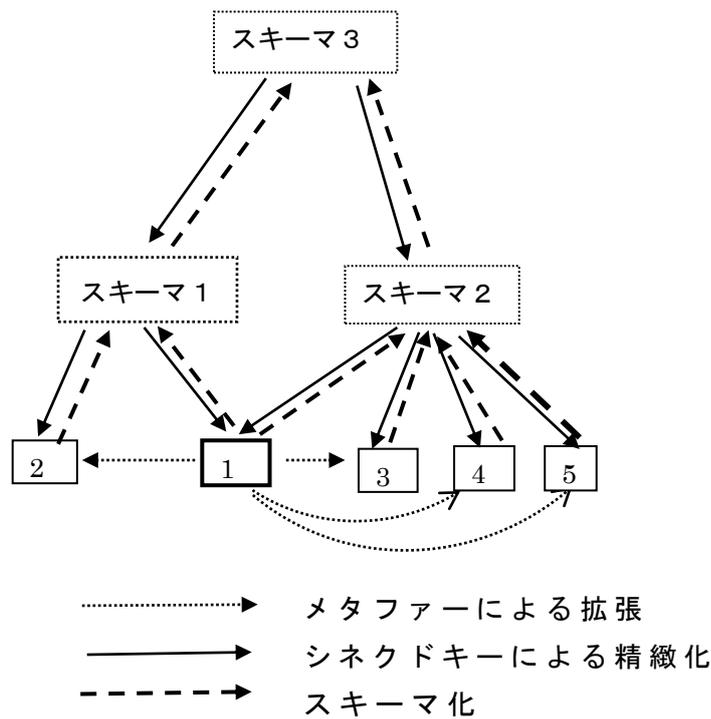


図 4-2 「あっさり」の意味のネットワーク

図 4-2 では、太線のボックスで囲まれた別義 1 がプロトタイプ意味であり、最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。まず、別義 1 (あっさりとした味) と別義 2 (あっさりとしたデザイン) の間には、類似性が認められ、1 つの categorie に組み込まれたわけであるが、感覚器官の違いがあり、別義 2 は、別義 1 からの拡張例として categorie 化される。しかし、両者の間には、<同一 categorie の典型例と比べて五感で捉えられる対象に重さが抑えられていると感じられるさま>という共通性があるため、この共通性がスキーマ 1 として抽出される。このスキーマ 1 も categorie の中に階層的に組み込まれる。つまり、別義 1 から別義 2 への拡張は、スキーマ化を伴い、別義 1 と別義 2 は、スキーマ 1 の精緻化された例としても考えられる。このスキーマ 1 は、別義 1、別義 2 ほどには定着度が高くないものの、ある程度単位として定着していると考えられる。

次に、別義 1 (あっさりとした味) と別義 3 (あっさりとした人)、別義 4 (あっさりした内容)、別義 5 (あっさり超える) の間には、類似性が認められつつ、対象の違いがあるため、別義 3、別義 4、別義 5 は、別義 1 の拡張例であり、それぞれの拡張に伴い、スキーマが抽出されるが、スキーマ 2 <同一 categorie の典型例と比べて対象に重さが抑えられていると感じられるさま>として統合されている。別

義 1 と別義 3、別義 4、別義 5 は、スキーマ 2 の精緻化された例としても考えられ、シネクドキーにより関係づけられる。

最後に、スキーマ 1 とスキーマ 2 から、スキーマ 3 <同一カテゴリーの典型例と比べて対象に重さが抑えられていると感じられるさま>が抽出される。スキーマ 1、スキーマ 2 とスキーマ 3 は、意味として確立していないため、点線のボックスで囲まれている。

以上、多義的別義の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。このような分析がネットワーク・モデルの有効性を示していると言えよう。

4.4.3.2 感覚内の意味転用

「あっさり」において、プロトタイプの意味である味覚的経験から、視覚的経験へ転用される。前節では、別義 1 と別義 2 の間には類似性が認められることを述べ、比喻の観点から、メタファーによる拡張であると述べた。しかし、別義 1 と別義 2 には、同時性も認められ、本稿の定義による「共感覚」を基盤とした転用でもある。また、この転用は「一方向性仮説」に従うものである。

一方、「嗅覚」「触覚」「聴覚」を表す事例 A、事例 B、事例 C は、共感覚を基盤とした転用ではない。あくまでもスキーマ的意味の事例であり、プロトタイプの意味との間には類似性があるのみである。感覚内の意味転用については、第 6 章で詳述する。

4.4.4 まとめ

本節は、「あっさり」の意味を分析し、5つの多義的別義を認定・記述した。そして、別義 1 をプロトタイプの意味として認定し、多義的別義の相互関係を示した上で、意味のネットワークを記述した。最後に、「味覚」から「視覚」への感覚内の意味転用は、共感覚に基づく転用であることを述べた。

4.5 本章のまとめ

本章では、「こってり」「あっさり」について、先行研究の記述を検討し、多義語分析を行った。そして、「こってり」に 4 つ、「あっさり」に 5 つの別義とプロトタイプの意味を認定し、多義的別義の相互関係を明らかにした。

本節では、それらをまとめて示した上で、考察を加える。

まず、次の表 1 に「あっさり」と「こってり」の複数の意味を示す。

あっさり	こってり
<p>1 <同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夕食は、なるべく脂肪分が少なく<u>あっさり</u>したものにする。 <p>2 <同一カテゴリーの典型例と比べて外見に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年のファッションは、<u>あっさり</u>とした装飾が少ないデザインが主流だ。 <p>A <同一カテゴリーの典型例と比べて匂いに重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>あっさり</u>とした香りが広がっている。 <p>B <同一カテゴリーの典型例と比べて触感に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・この服は、<u>あっさり</u>とした肌触りがする。 <p>C <同一カテゴリーの典型例と比べて音に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・このイヤホンの音は、<u>あっさり</u>しているね。 	<p>1 <すぐに解消されないものが口の中に残り味覚的に重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>こってり</u>した料理が胃にもたれやすい。 <p>2 <すぐに解消されないものが目に焼き付き視覚的に重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・欧米の人は、<u>こってり</u>した顔だね。 <p>A <すぐに解消されないものが鼻に残り嗅覚的に重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>こってり</u>とした香りは、あまり好まれない。 <p>B <すぐに解消されないものが肌に残り触覚的に重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリームをいっぱい塗ると、<u>こってり</u>した感触がする。 <p>C <すぐに解消されないものが耳に残り聴覚的に重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>こってり</u>とした音が出る楽器は何ですか。
<p>3 <同一カテゴリーの典型例と比べて人の言動に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・私の親は本来、非常に<u>あっさり</u>した性格の人間だ。 	<p>3 <粘り気のある対象が簡単に取れないほど積み重なって付着して重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>こってり</u>とジャムとクリームを塗りたくったケーキ。見るからに甘そうだ。
<p>4 <同一カテゴリーの典型例と比べて内容に重さが抑えられていると感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・長時間かけて練った企画は、意 	<p>4 <その場を離れられないほど繰り返して叱られて重さが感じられるさま></p> <ul style="list-style-type: none"> ・酔っぱらって家に帰ったら、親

外に <u>あっさり</u> したものだ。	から一晩中 <u>こってり</u> 説教された
5 <同一カテゴリーの典型例と比べて物事の実現に重さが抑えられていると感じられるさま> ・今年の学園祭りは、 <u>あっさり</u> と終了した。	D <衝撃が頭から離れないほど積み重ねられて重さが感じられるさま> ・あのドラマは、ほんとうに <u>こってり</u> している。

表 4-1 「あっさり」「こってり」の複数の意味

表 4-1 からわかるように、「あっさり」と「こってり」は、対応する別義と対応しない別義がある。ここでは、五感内の意味的対応と、五感以外の意味的対応に分けて検討する。

① 五感内の意味的対応（「こってり」の別義 1 と「あっさり」の別義 1）

「味覚」において、両語は、<脂っこさなどが口の中に残るか否か>という点で、反義的である。両語とも、味を表す意味がプロトタイプの意味である。

「視覚」において、両語は、<派手さなどが目に焼き付くか否か>という点で、反義的である。両語とも慣習的用法である。

「嗅覚」において、両語は、<匂いの濃厚さなどが鼻に残るか否か>という点で、反義的である。両語とも非慣習的な用法である。

「触覚」において、両語は、<触感の刺激などが肌に残るか否か>という点で、反義的である。両語とも非慣習的な用法である。

「聴覚」において、両語は、<音の響きなどが耳に残るか否か>という点で、反義的である。両語とも非慣習的な用法である。

以上のことから、五感で感じられる対象に用いられるとき、いずれも<感覚器官に重さを感じさせるものが残るか否か>という点で反義的であると言える。

② 五感以外の意味的対応

両語とも「物事の内容」を表せるが、反義的とは言えない。

その他、「あっさり」は「人の言動や性格」、「物事の実現」を表すが、「こってり」は表さない。一方、「こってり」は、「他人の言動に対する叱り方」を表すが、「あっさり」は表さない。これらの意味において、両者は、対応しない⁴⁴。

⁴⁴ Apresjan(1974)では、意味の似たオノマトペ動詞間で一般動詞の“regular polysemy”現象が見られないとしている。“regular polysemy”とは、意味が共通している動詞の間

以上、「こってり」と「あっさり」の対応関係を確認した。つまり、五感的経験において、反義関係が成り立ち、この反義関係は、両語の使用の基盤となっている経験の対立によるものである。

次に、4.3.1節と4.4.1節で指摘した先行研究の問題点について、本稿の分析を通して、それがどのように解決されたかを示す。

「こってり」について、どのような物事を「こってり」で表すかを記述するにとどまらず、その基盤にある私たちの日常の経験を明らかにした。つまり、「こってり」は、重さの経験と関わり、「ものが動きにくい」という身体的経験に基づき、対象がすぐに解消されず、「口の中に残る」「目に焼き付く」「鼻に残る」「耳に残る」「肌に残る」「簡単にとれない」「その場から離れられない」「頭から離れない」と捉えられることを表した語だということである。

「あっさり」については、「こってり」の身体的経験と逆であり、「口の中に残らない」「目に焼き付かない」「鼻に残らない」「耳に残らない」「肌に残らない」「執着する」「頭に残らない」「簡単に終わる」といった経験と結びづくが、残りやすいものがまったく残らないわけではなく、その程度が抑えられていることを表す語である。さらに、「あっさり」は、何らかの比較対象が喚起され、その基準と比べていることが表される。その比較基準を「同一カテゴリーの典型例」とした。その「典型例」には、文脈によって高められたものと文脈がなくとも「典型例」として捉えられるものがある。

本章では、「こってり」と「あっさり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「こってり」に4つ、「あっさり」に5つの多義的別義を認め、両語とも五感内の味覚的経験を表す意味をプロトタイプ的意味として認定した。そして、多義的別義の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。また、五感的経験において、両語とも共感覚比喩に基づいて、「味覚」から「視覚」に転用していることを述べた。

で動詞の多義性に一貫した規則性があることを指す。「あっさり」と「こってり」は、基本的に反義的であるが、拡張義すべてに対応があるわけではない。

第5章「しっとり」「さっぱり」「すっきり」

5.1 はじめに

本章は、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」3つの語について、その意味を分析・記述する。

- (1)10日、サボン ジャパンが、「サボン バスオイル」を各店100本限定で発売。保湿効果があり、肌になじみやすくしっとりさせてくれるというミリスチン酸イソプロピルを配合。お風呂にキャップ一杯分を入れることで、入浴後の肌にべたつかずさっぱりとした潤いを与えてくれるという。(朝日新聞 2009.12.08)
- (2)日本人がビールに求める味は三種類に分かれます。一つは苦みとコクの豊かな味。二つ目は香りを抑えたくせのないすっきりした味。三つ目は後味に苦みの残らないさっぱりした味。三つともファンがいます。(中日新聞 1999.09.21)
- (3)すっきりしたすがしい香りの青ジソの葉、もっちりしてやわらかい求肥、梅肉のかすかな酸っぱさが混じったしっとりした白あん。これらが一体となって豊潤な甘さを漂わせる。(日経プラスワン 2009.06.13)

上掲の例を見ると、例(1)において、「しっとり」と「さっぱり」は、両語とも五感的経験の「触覚」(肌の感触)を表しており、このような「しっとり」と「さっぱり」は、美容製品や化粧品の使用感について表す際に、常に対比的に用いられる。例(2)において、「すっきり」と「さっぱり」は、両語とも五感的経験の「味覚」を表しており、「さわやかな味」を表すという点で類似している。例(3)において、「すっきり」は、五感的経験の「嗅覚」を表しており、「しっとり」は「食感」を表している。このように、「しっとり」、「さっぱり」、「すっきり」は、複数の感覚領域にまたがるオノマトペ表現である。従って、3つの語を多義語として捉え、複数の意味及び意味の関連性を考察する。以下、5.2節では「しっとり」について、5.3節では「さっぱり」について、5.4節では「すっきり」について、それぞれ考察を行う。最後に、5.5節では本章のまとめを行う。

5.2 「しっとり」

本節では、「しっとり」の多義語分析を行う。5.2.1節では、「しっとり」の意味記述に関する先行研究を取り上げ、その記述を検討し、

問題点を指摘する。5.2.2 節では、「しっとり」の複数の意味を認定する。5.2.3 節では、プロトタイプの意味を認定し、複数の意味の相互関係及びすべての意味のネットワークを示す。

5.2.1 先行研究の検討

「しっとり」の意味を分析・記述したものは、管見の限り、国語辞典、擬音語擬態語辞典に限られる。本節では、擬音語擬態語辞典である飛田・浅田(2002)を中心に、小野(2007)、山口(2002)に触れながら検討する。

まず、飛田・浅田(2002)は、次のように記述している。

- (Ⅰ)湿気や水分がしみこんで内部が少し濡れている様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。濡れていることが対象にとって好ましいかどうかによって、イメージが決まる。(押し入れの下段のふとんがしっとりしている。/春雨にしっとりと濡れた木々の緑が新鮮だ。)
- (Ⅱ)(Ⅰ)から進んで、湿気や水分が適度にゆきわたっている様子を表す。ややプラスイメージの語。物の表面や内部に水分が適度にゆきわたっている様子を表し、快感の暗示を伴う。湿気の多い日本の気候を肯定的に捉えた語で、日本文化のひとつの特徴を表している。(この乳液をつけると翌朝肌がしっとりとなる。/しっとりしたスポンジケーキがおいしい。)
- (Ⅲ)潤いがあるって落ち着いて見える様子を表す。プラスイメージの語。景色や女性の容姿など主に外見に潤いがあるって落ち着いて見える様子を表し、美の暗示がある。湿潤な物に美を見出す日本文化の特徴を表した語。(金沢はしっとり(と)した日本情緒漂う町だ。/結婚したらしっとりと落ち着いてきたね。)

(pp.190-191)

飛田・浅田(2002)は、「湿気や水分」が意味(Ⅰ)の「しみこんで内部がすこし濡れている様子」から、意味(Ⅱ)の「適度に行き渡っている様子」へ進んだとしている。意味(Ⅰ)は中立的なイメージとされ、意味(Ⅱ)はややプラスイメージとされていることから、意味が(Ⅰ)から(Ⅱ)へ進むのに伴って評価性が変化するということになる。しかし、「しっとり」の実例を観察すると、意味(Ⅱ)を表す場合に限らず、好ましく捉えられている場合が多い。マイナスに捉える場合は「じっとり」が用いられていることが多く、オノマトペの「清濁の音象徴差」によると考えられるが、「しっとり」がプラス評価を伴う動機づけは

明らかではない。

意味(Ⅲ)は、「潤いがあって落ち着いて見える様子」だと記述されているが、「潤い」には、水分があるという物理的な「潤い」と実際には水分がないという抽象的な「潤い」がある。しかし、「水分がある潤い」と「水分がない潤い」、そして、「潤いがある様子」と「落ち着いて見える様子」の間に、どのようなつながりがあるのかは明らかでない。

また、「しっとり」には、「触覚」の他に、例(4)(5)のような「視覚」「聴覚」に関する用法、そして、例(6)(7)のような新奇的な用法がある。しかし、これらの用法は、実例が存在するが、辞典類には記述されていない。

(4)三脚やスクリーンなど撮影機材はほとんど父から引き継ぎ、デジカメではなくフィルムにこだわる。しっとりした色合いが出るからだという。(中日新聞 2010.11.19)

(5)FM802はこのほど、大阪城ホールに約1万人を集めて春恒例のライブ「REQUEST AGE (リクエストージ)」を開催した。11回目。観客は、時に激しく時にしっとりした音とリズムに酔いしれた。(毎日新聞 2013.05.11)

(6)そのひとの手紙を、私は三度、読んだことがある。しっとりとした文章の、つまり、恋文というものであった。(『ミステリー日本地図』三浦浩 新潮社 1989)

(7)あの乱れに乱れた過去は清算し、中年にさしかかってきたせいもあるが、落ち着いたしっとりした生活を送るようになる。(『ナポレオンとジョゼフィーヌ』ジャック・ジャンサン著;滝川好庸訳 中央公論社 1987)

さらに、これらの意味の関連性と意味のネットワークについて、これまでの記述では明らかではない。

次に、「しっとり」が人間に用いられる意味として、小野(2007)では、「女性の、静かな中にも潤いやほのかな色っぽさが漂っているさま」、山口(2003)では、「女性の上品でしとやかな様子」といった記述がなされている。確かに数多くの実例において、女性に用いられているが、次の例では、男性に用いられている。

(8)ファッションは時代を映し出す鏡であり、時代が求める男性像は常に変化していく。今回のコレクションでは、しっとりとした大人の色気を感じさせるような装いを提案するブランドが目付いた。

例(8)では、男性のファッションについて述べられており、「しっとりした大人の色気を感じさせるような装い」は、男性の装いを描写している。この例から、「女性」のみに用いられるわけではないことがわかる。

以上の先行研究における意味記述の問題点は次のようにまとめられる。

- a. 「水分がある物理的な潤い」と「実際には水分がない抽象的な潤い」の間、さらに「潤いがある様子」と「落ち着きがある様子」の間にはつながりがあると考えられるが、そのつながりは明確ではない。
- b. 「しっとり」が清音であることの他に、プラス評価を表す動機付けが明らかではない。
- c. 女性を対象とする場合に限って用いられるわけではないが、女性を対象として用いられやすい理由は明示されていない。
- d. 慣習性の程度は低くても母語話者にとって理解可能な用法が、記述されていない。
- e. 複数の意味の関連性と意味のネットワークが明らかではない。

5.2.2 分析

本節では、多義語分析の課題を踏まえ、「しっとり」の複数の意味を認定し、記述する。5.2.2.1 節では、本稿の分析の前提を確認しておく。5.2.2.2 節から 5.2.2.6 節では、認定した「しっとり」の5つの別義について、例文に基づき説明していく。

5.2.2.1 分析の前に

分析に入る前に、「水分がある」「潤いや落ち着きがある」というのが、私たちにとってどのような経験と結びついているのかを確認する。

まず、物に水分が含まれると、一般的に物理的に重いと感じられるが、「重い金の塊」はプラスに捉えられるのに対して、「重い荷物」はマイナスに捉えられるだろう。同様に、抽象的な事物についても、「罪が重い」や「病気が重い」などマイナスに捉えられる場合及び、「重い直球」「重みのある言葉」などプラスに捉えられる場合がある。物に水分が含まれ、物理的に重いことは、どのようにプラス評価に結びつき、どのようにマイナス評価に結びつくのだろうか。この「重い」に関する経験については、新地(1997)が言及している。

新地(1997)は、「同じ方向であっても、相反する意味を持つというこ

とはありうる。また、それぞれの方向づけについて、別々の動機づけをすることも可能である」とし、「上下スキーマと重力の経験」について、次のように説明している。

「上」は重力から解放されている状況であり、「下」は重力によって圧迫され、重力に逆らえない状況である。このことから、「良いことは上、悪いことは下」というメタファーが生じると考えられる。さらに、重力に逆らうのは力のいることである。このことから、「力があるのは上、力がないのは下」というメタファーが生じると考えられる。また、重力から解放されているのは良いことでもあるが、宙に浮いているということによって不安定でもあると考えることもできる。

(pp.100-101)

この説明にあるように、「宙に浮いていると不安定である」と捉えられるのであれば、「重力によって圧迫されていると安定している」と捉えることもできる。このことから、「重さ」はプラスにもマイナスにも捉えられることがわかる。プラスに捉えるときに、安定感、落ち着きがあると考えられる。

以上のことから、「水分がある」ことは、「重さ」に結びつき、プラスに安定感や落ち着きがあると捉えられる。

また、「水分がある」ことは、「円滑な動き」にも結び付く。例えば、われわれは、「体に水分が十分にあるときには、体がうまく機能する。体に水分を欠くときには、体のバランスが崩れる」という経験も持っている。人間にとって、水分は必要不可欠なものである。それは体の内部に限ったことではない。肌にも水分が十分に含まれるときには、乾燥していないので、柔らかくて肌触りがいい。肌に水分がないときには、乾燥するので、手触りがよくない。一般的に、老人の肌は乾いたイメージであるのに対して、子どもの肌は柔らかいイメージであるのは、このように水分が十分に含まれているか否かが関わると思われる。植物の葉も水分が多いとつやがあり、土も水分が含まれると柔らかいと感じられ、「潤いがある」と捉えられる。

このように、「水分がある」ということは、「落ち着きがある」「潤いがある」ことと深く関わっている。

以上は、いずれも物理的に「水分が含まれる」「潤いがある」場合である。だが、色、音などの水分が実際に含まれていないものについても、私たちは「潤いや落ち着きがある」と捉えることがある。これはなぜだろうか。

一般的に強烈な色を見たり、激しい音を聞いたりすると、心が落ち

着かないと感じる。逆に、穏やかな色や音を見たり聞いたりすると落ち着く。同様に、「雨の湿った匂い」「したたるような新緑の香り」を嗅ぐと、心までも落ち着く。

さらに、人間の場合は、肌、髪、目、唇なども、水分が多いと、柔らかくてつやがあるので、好ましいと捉えられる。また、見た目だけではなく、しぐさや話し方にも柔らかくてつやがあるという印象を抱かせるものがある。それは、品のいい、魅力的なイメージをもたらし、その雰囲気は潤いや落ち着きを感じさせる。雰囲気には、人の雰囲気その他、空間の雰囲気もある。例えば、穏やかな光があふれる部屋、小雨が降り続く朝、そういった空間の中にと、心が落ち着き、癒される。

以上から、様々な対象に「潤いや落ち着きがある」と感じられることは、いずれも心が癒され安定した穏やかな気持ちになるという同じ感情を呼び覚まされることを基盤にしているのだと言える。次節以降は、このような身体的経験に基づき分析を進める。

5.2.2.2 別義 1

＜対象に水分があると触感で感じられ好ましく捉えられるさま＞

(9) 肌にハリと弾力を保たせるアンチエイジングクリーム。「翌朝まで肌が乾かずしっとり日中の乾燥もなくなり、値段だけの効果はあると納得」。(BCCWJ 雑誌『an.an』マガジンハウス 2002)

(10) こちらの冬は雪や曇りが降ったかと思うと、急に明るくなったり、又ぐおーんと重たい雲が垂れこめたりと空の仕事が忙しいけれど、空気はしっとりと水分を含み柔らかい。さすが美肌県 1 位の島根！ (毎日新聞 2013.11.26)

(11) 和食と合うフランスパン。(中略) 最大の特徴は水分の多さだ。普通のフランスパンの 1・3 倍も水を加える。職人泣かせの緩い生地になるが、焼くと皮はパリパリ、中はしっとり。(毎日新聞 2014.04.28)

例(9)の「しっとり」は「肌が乾かず」という状態を表し、例(10)の「しっとり」は「空気」が「水分を含み柔らかい」という状態を表している。例(11)の「しっとり」は「フランスパン」のパリパリの皮と異なるパンの中の状態を表し、その最大の特徴が「水分の多さ」であると述べられている。つまり、話題の対象に水分が含まれた「クリームの使用感」「空気の肌触り」「パンの食感」を「しっとり」で表している。これらの「しっとり」は、「触覚」によって捉えられている。

人の嗜好によって異なるが、水分があれば、肌が潤って肌触りがいいと感じる。乾燥した空気より、「水分を含む」空気が、肌にやさしい。また、パンの食感は、乾いたパンより、「水分が含まれる」パンの方が柔らかい。

従って、これらの「しっとり」は、水分が含まれる対象を触覚的に捉え、いずれも好ましい状態を表していると考えられる。

5.2.2.3 別義 2

＜色に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま＞

(12)この年は早くに気温の低い日があり、紅葉は格別に鮮やかなのだと聞いた。半分は散ったのだろうか。水面も岩の上も隠れるほどの敷き紅葉。道にも赤じゅうたんを敷いたようだ。細かい雨にぬれて、しっとりとした色つやは、心まで潤うようだった。

(朝日新聞 1999.08.07)

(13)早春の静かな朝の風景を3枚の組み写真で見せている。しっとりとした色合いで仕上げたプリントは良い。放射状に広がった畑のグリーンが、画面上部の霧にかすむ遠景へ、視線を誘う効果があり、早春の寒い朝がよく描写されている。(朝日新聞 2011.06.25)

(14)展示は日本の風景を描いた「能登にて」(45×90センチ)や花、静物などをモチーフにした近作20点。山口さんは「中西さんの絵に描かれた色彩は、すべて紙の中に染み込んだ色で、しっとりとした深みがある。試行錯誤を重ね生み出した混合技法による作品をぜひ見て下さい」と語った。(毎日新聞 2006.03.01)

例(12)の「しっとり」は「細かい雨にぬれている紅葉の色つや」、例(13)の「しっとり」は「早春の静かな朝の風景の写真の色合い」、例(14)の「しっとり」は「絵の色彩の深み」を表している。「細かい雨にぬれた紅葉のつや」は「心まで潤うよう」とあり、「早春の寒い朝」を描写するのは「畑のグリーン」「霧にかすむ遠景」であり、「深みのある色」は「すべて紙の中に染み込んだ」とあり、いずれも「水分」を感じさせる。それらを見ると、色に潤いがあると感じられ、心が癒される。

5.2.2.4 別義 3

＜音声に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま＞

(15)FM802はこのほど、大阪城ホールに約1万人を集めて春恒例の

ライブ「REQUESTAGE（リクエストージ）」を開催した。
11回目。観客は、時に激しく時にしっとりした音とリズムに酔
いしれた。（＝（5））

- (16) ラフマニノフは、リフシッツの抑制されたソロとそれに寄り添ったオーケストラによる、弱音部の静けさが特徴的。きらびやかというよりは、しっとりとした美しさで聴かせる演奏だったが、3楽章のクライマックスではそれまでの抑制を一気に解き放ったような、豪快な盛り上がりで全曲を閉じた。（毎日新聞 2008.07.05）
- (17) 耳もとで、声が聞こえる。やさしい、男の声。心に染み入るような、しっとりした声。いつも、余裕を失わない。（BCCWJ）

例(15)の「しっとり」は、「音とリズム」を表しており、「激しい音とリズム」と対立する「激しくない、穏やかな音とリズム」であると考えられる。例(16)の「しっとり」は、「演奏」を表しており、「弱音部の静けさが特徴的」、「きらびやかというより」といった描写から、静かで落ち着いたある演奏を表すことがわかる。例(17)の「しっとり」は、「男の声」を表しており、「やさしい」「心に染み入る」とあるように、やさしくて穏やかな男の声を表している。「染み入る」という表現からも、音声が水分のように吸収されて心まで届くものとして捉えられていることがわかる。それが「潤いがある」と感じられる。

以上、別義1（触覚）、別義2（視覚）と別義3（聴覚）は、現行の辞典に記述されている。一方、「嗅覚」「味覚」に関する用法は、辞典には記述されていないが、次のような例が見られる。

- (18) 高山市西之一色町の観光施設「飛騨開運乃森」でコアジサイが満開になり、淡い青色の小さな花がしっとりとした芳香を放っている。（中日新聞 1999.08.18）
- (19) 「乾パンに代わる非常食」をうたう商品も出てきた。（中略）パン生地を缶に入れて焼き上げることで殺菌し、脱酸素剤で酸素を抜く。カビの発生も抑え、長期保存が可能になった。かめばしっとりした味わいがある。（朝日新聞 2004.01.20）

例(18)は「香り」、例(19)は「味わい」を「しっとり」で表している。例(18)「コアジサイ」というと、梅雨時に花を咲かせるので、花が満開になるとき、「コアジサイ」の香りも雨の中で漂うと想定でき、潤いを感じられる。例(19)では、「乾パンに代わる非常食」について述べられているが、普通の非常食の乾パンは、水分がなくてかたいが、この非常食は、乾パンとは違って、普通の水分があるパンのように柔ら

かいものだと読み取れる。そのため、その味わいには水分があって潤っているように捉えられる。

このような「嗅覚」「味覚」に関する用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 A <匂いに潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

事例 B <味に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

「しっとり」が五感に用いられるとき、「しっとり（と）した/している」という形あるいは「しっとり」のみで用いられ、連体修飾語、述語として「物の状態や性質」を表す場合が多いが、「濡れる」「湿る」「潤う」など「水分」に関わる動詞と共起し、「物の状態や性質」を表すこともある。

5.2.2.5 別義 4

<人間の全体像に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

(20) 声やしぐさに独特の色気をみせ、和服が似合うしっとり型の日本美人だった大原麗子さん（享年 62）は、“かわいい女”の代名詞がぴったりくる女優だった。（中日新聞 2009.08.08）

(21) どこか大人びた雰囲気をデビュー時から漂わせている岩本公水（くみ）。よく言えば、しっとりした落ち着きや抑制のきいた知性を感じ、意地悪くとらえれば、弾むような明るさや挑戦的な冒険心が見えない。だが、岩本も 27 歳、今年で 9 年目を迎える中堅どころに入った。つまり、イメージと現実の足並みがそろってきたと言える。新曲「絹の雨」は、そんな岩本の「素」を表現したような聴き手を安心させる落ち着いた曲である。

（毎日新聞 2003.04.23）

この 2 つの例の「しっとり」は、いずれも女性の全体像が醸し出す雰囲気を表している。例(20)では、「声やしぐさの独特の色気」、「和服が似合う」とあり、大原麗さんは、声、しぐさ、見た目、姿などに、色気があって、魅力的な「かわいい女」であると言える。これらは、複合的にこの人の雰囲気を醸し出し、潤いと落ち着きを感じさせる。例(21)では、岩本公水が 27 歳の若さでありながら、「弾むような明るさや挑戦的な冒険心が見えない」「大人びた雰囲気」「抑制のきいた知性」が感じられるとある。「しっとりした落ち着き」は、その岩本公

水が漂わせる人の心を癒し、落ち着かせるような雰囲気を表している。

「しっとり」は、人に用いられるとき、一般的に上掲の2つの例のように、経験のある、潤いと落ち着きのある女性を指す。しかし、穏やかで魅力的な男性を描写することも可能である。

(22)ファッションは時代を映し出す鏡であり、時代が求める男性像は常に変化していく。今回のコレクションでは、しっとりとした大人の色気を感じさせるような装いを提案するブランドが目付いた。
(= (8))

例(22)では、「時代が求める男性像が常に変化していく」ということから、男性像が変化していく中で、「しっとりとした大人の色気」が求められるようになったことがわかる。「しっとり」が表す「潤い」や「癒し」は、一般的に「やさしい」「柔らかい」イメージが浮かぶ。これらの要素は、従来男性の魅力としてはあまり重視されておらず、女性の魅力としては好ましいと感じられやすい。従って、「しっとり」が「人間の全体像」を表すとき、女性に用いられることが多いのだと考えられる。

5.2.2.6 別義5

<物理的空間に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

(23) 山口旅館。木造二階建てで明治初年の創業。むかしながらの湯治場の雰囲気を残しながら、近代的な施設もそなえている。しっとりとした風情のある名旅館だ。

(BCCWJ 芦原伸(著)『全国効能別温泉ガイド』)

(24) 月明かりの下、市民に伝統芸能を楽しんでもらおうと、名古屋市主催の十五夜コンサートが二十二日夜、同市熱田区熱田西町の白鳥庭園で行われた。(中略) 薪の火が揺れる中、最初に演じられたのは、和泉宗家の狂言。続いて、琴、尺八などによる邦楽演奏があり、会場はしっとりした雰囲気に包まれていた。

(中日新聞 1994.09.23)

例(23)(24)の「しっとり」は、物理的空間の雰囲気を表している。例(23)では、「旅館のむかしながらの湯治場の雰囲気」が、歴史を感じさせる。現在まで続けて営業していることから、変動せず安定していると言える。このような「明治初年の創業」の旅館にいと、心が癒

され落ち着くため、その空間に潤い及び落ち着きがあると感じられる。例(24)では、伝統芸能のコンサートの会場の雰囲気について述べられている。「月明かりの十五夜」「薪の火が揺れる中」といったことから、きらびやかな照明などのあるコンサートではないとわかる。また、「狂言」「琴、尺八などによる邦楽演奏」といった伝統芸能は、いずれも長い歴史を感じる。そのような会場にいと、心が癒され落ち着くため、その空間に潤い及び落ち着きがあると感じられる。

以上見てきたように、別義4、別義5は、「視覚」「聴覚」などに関わるが、別義2、別義3のように、特定の単一の感覚で捉えられるのではなく、複合的に捉えられるものだと考えられる。

「しっとり」の別義4、別義5は、「しっとり」のみ、あるいは、「しっとり(と)した/している」という形で「状態や性質」を表す。また、「咲く」「歌い上げる」「彩る」などの動詞と共起し、結果副詞としても用いられる。

別義4と別義5は、五感以外の意味として、辞典にも記述されているが、次の例(25)(26)のような辞典に記述されていない例が見られる。

(25)あの乱れに乱れた過去は清算し、中年にさしかかってきたせいもあるが、落ち着いたしっとりした生活を送るようになる。(=(7))

(26)これらの文章は、春への思いや風景などに郷愁や寂しさなどをしっとりと重ねて書いたもので、それぞれいい味を出しました。

(毎日新聞 2006.05.24)

例(25)では、「乱れた過去を清算した」とあり、中年になってからの生活は、乱れておらず、安定した、ゆとりのあるものだということになる。このような生活には、潤いがあり、心が落ち着く。例(26)では、「春への思いや風景などに郷愁や寂しさなどを」といったことから、「文章」が静けさや落ち着きを感じさせるものであることがわかる。2つの例において、「生活」や「文章」の潤い及び落ち着きのある雰囲気が「しっとり」で表されている。

例(25)(26)における「しっとり」の用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 C<人の営みによって作られたものに潤い及び落ち着きがあると
感じられ好ましく捉えられるさま>

5.2.3 「しっとり」の意味のネットワーク

本節では、5.2.2.2節から5.2.2.6節で認定した「しっとり」の5つ

の別義を再掲し、プロトタイプの意味を認定したうえで、多義的別義の相互関係及び、すべての意味のネットワークを提示する。

5.2.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係

以下に、これまで検討した5つの別義を再掲する。

別義 1<対象に水分があると触感で感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・冬になると、肌が乾燥するので、化粧水は水分の多いしっとりタイプがお勧めだ。

別義 2<色に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・日本画のしっとりと落ち着いた色に魅せられた。

別義 3<音声に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・乾燥した音より、音質は少ししっとりしているほうが好きだ。

事例 A<匂いに潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・薄暗い森の小道に入ると、しっとりとした香りに包まれた。

事例 B<味に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・しっとりとした味わいのパンがおいしい。

別義 4<人間の全体像に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・あのお嬢様が今日は着物を着てしっとりしている。

別義 5<物理的空間に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・能楽堂はしっとりした雰囲気醸し出していた。

事例 C<人の営みによって作られたものに潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

・彼女は、10年間の練習をして、しっとりした演技を見せた。

本稿では、別義1を「しっとり」のプロトタイプの意味として認定する。認定の理由は、以下の3点である。

第一に、別義1は触覚的経験として、身体性が高く、認知されやすいということである。その上、「触覚」を表す意味の定着度が最も高い⁴⁵。

第二に、別義1が母語話者にとって直観的に基本的だと感じられるということである。つまり、「しっとり」と聞いたときに、母語話者は直観的に触覚に関わる例を最初に思い浮かべる⁴⁶。

第三に、「しっとりした色/音声/匂い/味」、「しっとりした女性/空間/生活」を理解するとき、別義1の「水分がある」という本来の意味が二次的に活性化される。つまり、別義1を起点として多くの多義的別義を拡張させているということである。

本稿は、母語話者の判断と実例の存在を重視し、別義1をプロトタイプの意味と認定する。続いて、多義的別義の相互関係について検討していく。

別義2から別義5は、別義1から拡張したと考えられる。分析からわかるように、別義2から別義5はいずれも別義1の「水分がある」という意味に支えられており、別義1の「二次的活性化」が実現される。別義1と、別義2、別義3、別義4、別義5それぞれの間には、<対象に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>という類似性を抽出でき、メタファーによって拡張していると考えられる。この類似性がスキーマとして抽出される。分析での事例A、事例B、事例Cに、多少の不自然さを感じる人もいるようであるが、多くの日本

⁴⁵ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』では、「しっとり」の検索例は、総計642件であり、五感以外の意味を表す245件を除き、360件が「触覚」（触感281件、食感179件）、20件が純粋に「視覚」、36件が純粋に「聴覚」に用いられている。「嗅覚」「味覚」（食べ物に用いられる例をすべて「食感」に分類した）の例はない。

⁴⁶ 「しっとり」のプロトタイプの意味を認定するにあたり、日本語母語話者12名に「しっとり」と聞いて、どのような意味が最初に想起されるか」というテストを行った。判定者は、22歳から35歳までの男性4名、女性8名、愛知県、宮城県、東京都、岐阜県、三重県出身の文科系大学院に在籍している大学院生である。その結果、12名の日本語話者全員が「しっとりしたロールケーキ」「しっとりした化粧水」など「食感」「肌触り」に関わる例を最初に思い浮かべた。

語話者にとって、理解可能である。事例 A、事例 B、事例 C の「しっとり」が用いられた例が容認されるのは、このスキーマが活性化されるためである。事例 A、事例 B、事例 C は非慣習的用法であり、スキーマの事例として位置づけられる。

「しっとり」の多義的別義の相互関係により、「しっとり」のすべての意味のネットワークは次のように示すことができる。

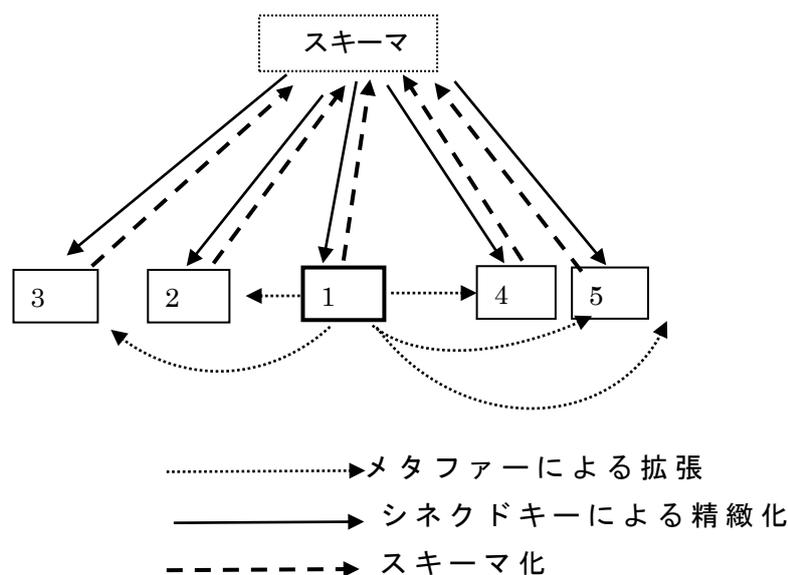


図 5-1 「しっとり」の意味のネットワーク

図 5-1 では、太線のボックスで囲まれた別義 1 がプロトタイプ意味であり、最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。前述のように、別義 1（しっとりとした感触）と別義 2（しっとりとした色）、別義 3（しっとりとした音声）、別義 4（しっとりとした女性）、別義 5（しっとりとした街）の間には、類似性が認められ、1つのカテゴリーに組み込まれたわけである。ただし、対象の違いがあり、別義 2、別義 3、別義 4、別義 5 は、別義 1 からの拡張例としてカテゴリー化される。それらの間には、＜対象に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま＞という共通性がスキーマとして抽出される。このスキーマもカテゴリーの中に階層的に組み込まれる。ここで、別義 1、別義 2、別義 3、別義 4、別義 5 は、スキーマの精緻化された例としても考えらる。このスキーマは、別義 1、別義 2、別義 3、別義 4、別義 5 ほどに定着度が高くないものの、事例 A、事例 B、事例 C が理解・使用されることから、ある程度単位として定着していると考えられる。

以上、多義的別義の相互関係を示し、すべての意味のネットワーク

を明示した。このような分析がネットワーク・モデルの有効性を示していると言えよう。

5.2.3.2 感覚内の意味転用

「しっとり」において、プロトタイプの意味である触覚的経験から、視覚、聴覚的経験へ転用されている。前節では、別義1と別義2、別義1と別義3の間には類似性が認められることを述べ、比喩の観点から、メタファーによる拡張であると述べた。しかし、別義1と別義2、別義1と別義3には同時性も認められ、本稿の定義による「共感覚」を基盤とした転用でもある。これらの転用は、「一方向性仮説」に従うものである。一方、「嗅覚」「味覚」に関する事例A、事例Bは共感覚を基盤とした転用ではない。あくまでもスキーマ的意味の事例であり、プロトタイプの意味との間には類似性があるのみである。感覚内の転用については、第6章で詳述する。

5.2.4 まとめ

本節は、「しっとり」の意味を分析し、5つの多義的別義を認定・記述した。そして、別義1をプロトタイプの意味として認定し、多義的別義の関係を示した上で、意味のネットワークを記述した。最後に、「触覚」から「視覚」「聴覚」への感覚内の転用は共感覚に基づく転用であることを述べた。

5.3 「さっぱり」

本節では、「さっぱり」について、多義語分析を行う。5.3.1節では、「さっぱり」の意味記述に関する先行研究を取り上げ、その記述を検討し、問題点を指摘する。5.3.2節では、「さっぱり」の複数の意味を認定する。5.3.3節では、プロトタイプの意味の認定、複数の意味の相互関係及び、すべての意味のネットワークを示す。

5.3.1 先行研究の検討

「さっぱり」の意味を考察したものは、管見の限り、国語辞典、擬音語擬態語辞典、日本語学習者辞典に限られる。本節は、それらの中から、飛田・浅田(2002)、森田(1989)における記述を中心に検討する。

まず、飛田・浅田(2002)は、「さっぱり」について、次のように記述している。

- (I) 執着がなく爽快感である様子を表す。プラスイメージの語。
視覚・触覚の点でまとわりつくものがなく清涼な場合(一風

呂浴びてさっぱりしたい/さっぱりとした浴衣を着て散歩する)、味が淡白で冷涼である場合(酢の物はさっぱりしていて夏のおかずにいい)、性格や気分執着がなく淡白である様子(たまっていた洗濯物を片付けたらさっぱりした/担任の先生はさっぱりした気性の人だ)。清涼感・快感の暗示がある。

(Ⅱ) 否定の程度が非常にはなはだしいことを誇張する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語(医者にもらった薬を飲んだがさっぱり効かない/冷夏でビールの売り上げさっぱりだった)。

肯定の可能性がまったくないことを表し、話者がその理由を理解していない暗示がある。この「さっぱり」は「ぜんぜん」に似ているが、「ぜんぜん」は理由については言及しない。

さっぱりわからない。(不思議でしょうがない)

ぜんぜんわからない。(まったくわからない)

(pp.173-174)

飛田・浅田(2002)は、「さっぱり」を、「執着がなく爽快である様子を表す」と記述し、「視覚・触覚」については、「一風呂浴びてさっぱりしたい」という例が挙げられている。しかし、一般的な経験では、風呂に入ったりシャワーを浴びたりすると、体がさっぱりすることで気持ちもさっぱりすると思われ、この例の「さっぱりしたい」は、「体の感覚」だけでなく、「気持ち」も表していると解釈できる。ただし、次の2例のように、「体の感覚」のみを表したり、「気持ち」のみを表したりすることもある。

(27) シャワーを浴びて体はさっぱりしたが、気分はまだわるかった。

(BCCWJ『ブルー・ムービー』ジョゼフ・ハンセン(著)/大久保寛(訳)早川書房 1986)

(28) せっかく身体をすすいだのに、また汗じみた下着とTシャツを着たが、気分はいくらかさっぱりした。

(BCCWJ『蹴りたい背中』綿矢りさ 河出書房新社 2003)

例(27)では「体はさっぱりしたが、気分はまだわるかった」とある。例(28)では、「汗じみた下着やTシャツを着た」とあるので、すすいだ身体には再び汗が付いたことが窺えるが、気分的には「さっぱり」と述べられている。この2例から、「さっぱり」が「体の感覚」と「気分」のどちらかのみを表す場合があることがわかる。

「さっぱり」が単に「感覚」を表すか、「気持ち」を表すか、ある

いは両方とも表すかについては飛田・浅田(2002)を含め、現行の意味記述では明確にされていない。

次に、森田(1989)の「さっぱり」に関する記述は、次のように2つに分けられている。

(I)乱雑さや余計なものが除かれてすっきり整った状態に対する気分を表し、プラス評価の語である。(p.61)

(II)あるべき事柄・事態がきれいに消滅するさま。努力や期待をしても、その対象となるものが存在・生起しないさま。マイナス評価の語。(p.494)

さらに、(II)について、2つに分けて分析している。

肯定形に係る場合と、否定形または否定的な語にかかる場合とがある。

- ①「きれいさっぱり(と)忘れてしまった」「さっぱり諦めた」
 - ②「さっぱり思い出せない」「ドイツ語でしゃべられちゃさっぱりわからない」「いくら待っても魚はさっぱり食いつかない」
- (p.494)

①は脳中にある事柄が消滅すること。従って、こだわるところがない、さわやかである状態にも用いられる。②は逆に、当人の側にない事柄が、当人側に全く表れ出ようとしなないさま。人や動物が現れない場合その事物・状態の出現・生起しない状態である。これが抽象的な状態に拡大使用されると、「商売はさっぱりだめだ」、「彼の成績はさっぱりだめだ」と、望んでいるにも関わらず、期待するような事態が到来しない状況を表す。「いくら読んでもさっぱり面白くない」(pp.494-495)

意味(I)は、「乱雑さや余計なものが除かれてすっきり整った状態に対する気分を表し、プラス評価の語である」とされている。このような記述は複数の辞典においてもなされているが、「すっきり」という類義語を用いて記述されており、両語の違いが不明瞭である。しかし、次の例(29)は、「すっきり」を「さっぱり」に置き換えると、容認度が下がる。

(29)新都心の玄関口であるのを配慮、すぐ隣の新宿モード学園やペDESTリアン・デッキと色調などを統一、すっきりした景観をつく

り出した。

(毎日新聞 1990.10.29)

例(29)において、「すっきり」を「さっぱり」に置き換えにくいことから、「さっぱり」と「すっきり」には、違いがあることがわかる。森田(1989)では、その違いが明確にされていない。

また、意味(Ⅱ)の①の対象は、「あるべき事柄・事態」と「脳中にある事柄」とされているが、次の例は、そうではない。

(30) 雪がとけてきれいさっぱりなくなった

例(30)の「雪」は、「あるべき」とも「脳中にある」とも言えない。従って、この記述は、適切とは言えない。また、意味(Ⅱ)の②では、具体物から抽象的な状態に拡大使用されるとあるが、その動機づけは述べられていない。そして意味(Ⅰ)では、「プラス評価の語」とされているが、意味(Ⅱ)の否定的な意味との関連性は明示されていない。

最後に、飛田・浅田(2002)及び複数の国語辞典では、「視覚」「味覚」を表す意味に限って記述されているが、次の例(31)(32)のように、「聴覚」「嗅覚」に関する用法もある。これらの意味は、辞典類では記述されていない。

(31)今度はアコースティックギターを練習したが、さっぱりした音色にリッチさや色気は感じられず、徐々に弾き語りから遠ざかっていった。
(朝日新聞 2002.09.26)

(32)クチナシに似た白い花を咲かせる「サンユウカ」は、ほのかな甘さだ。さっぱりした香りを放つのは、ラベンダーピナータやローズマリー。
(朝日新聞 1998.09.29)

さらに、「さっぱり」の複数の意味の関連性とすべての意味のネットワークも明らかにされていない。

以上の先行研究における意味記述の問題点は次のようにまとめられる。

- a. 「さっぱり」の意味記述には、類義語の「すっきり」「淡泊」「さわやか」などが用いられており、意味が不明瞭である。
- b. 「五感で捉える対象の状態」を表すか、「心理状態」を表すかは曖昧であり、その点について明確ではない。
- c. 複数の意味の関連性とすべての意味のネットワークが明らかにされ

- ていない。
- d.慣習性が低くても母語話者にとって理解可能な意味用法が記述されていない。

5.3.2 分析

本節では、多義語分析の課題を踏まえ、「さっぱり」の複数の意味を認定し、記述する。5.3.2.1 節では、本稿の分析の前提を確認しておく。5.3.2.2 節から 5.3.2.9 節では、「さっぱり」に、8つの別義を認定し、例文に基づき説明していく。

5.3.2.1 分析の前に

本節では、先行研究の記述を踏まえ、「さっぱり」の意味を記述するにあたり、次の現象を確認しておく。

まず、「さっぱり」は、「さっぱり+スル」という擬態語動詞として、次のように用いられ、「状態の変化」を表す。

- (33) a.髪を切ってさっぱりしたね。
b.汗をかいたから、シャワーを浴びてさっぱりした。

例(33)のaでは「のびた髪がなくなる」という「状態の変化」、bでは「汗が取り除かれる」という状態の変化」を表している。しかし、次の例(34)(35)では、「くどさ」や「過剰な飾り」は元々存在せず、なくなるというプロセスではなく、連体修飾の形で「性質」を表している。

- (34) J A 愛知みなみのメロン農家田中健博さんに切ったメロンを見せてもらった。中は白く、中心に種がびっしり詰まっている。断面から果汁が浮き出て、みずみずしい。食べると口の中に甘さが広がる。しかし、くどさはなくさっぱりした後味だ。

(中日新聞 2014.05.31)

- (35)豊岡市長賞には豊岡高校1年、橋本允聖さんの「熱中症対策 B a g」が選ばれた。(中略)「いろいろと飾らないさっぱりしたデザインがすがすがしい」との評を受けた。(朝日新聞 2012.09.22)

これは、「実際には状態の変化が起こらなかったが、変化の結果として認知される」という「痕跡的認知」⁴⁷であると考えられる。従って、これらの例にも変化のプロセスがあると捉え、それを前提として

⁴⁷ 注14を参照されたい。

分析していく。ただし、「変化」は、「スル」という動詞が表し、「さっぱり」は状態を表す語として記述する。

次に、本稿でも、「余分なものがない」という意味要素に注目するが、「余分」と感じられるかどうかは、そもそも人によって異なり、個人差があると思われる。「余分」というのは、対象が持っている性質ではなく、人が対象に対して持っている主観的な評価である。つまり、ある人にとってある場面では好ましいものであっても、ある人にとってある場面では「余分」と感じられる可能性がある。その判断が一致するか否かは、対象によって異なる。「ゴミ」のような物は、多くの人にとって「余分」と感じられ、その判断は共有されやすいものである。一方で、「味」や「音楽」などの場合は、好みの差が大きく、共有されにくい。

本稿は、このような前提を踏まえ分析していく。

5.3.2.2 別義 1

＜対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま＞

(36) 落ちにくいメイクはもとより、汚れた皮脂や古い角質を浮き上がらせて、除去。べとつき感もなく、さっぱりとした洗い上がり。

(BCCWJ『a n ・ a n』マガジンハウス 2002)

(37) 汗ばんだ体をさっぱりするためには、もう1カ所、地元で人気のスポット「スパ」に立ち寄ろう。(毎日新聞 2002.06.20)

例(36)(37)の「さっぱり」は、「肌の感触」「体の感触」を表している。例(36)では、「メイクや皮脂などが付いている肌の感触」と比べて、余分と感じられる「落ちにくいメイク」、「汚れた皮脂」、「古い角質」がない「肌の感触」を「さっぱり」で表している。例(37)では、「汗ばんだ体の感触」と比べて、余分と感じられる「汗」がない「体の感触」を「さっぱり」で表している。

この2つの例における「さっぱり」は、余分と感じられるものがなく、肌や体の感触がよいことを表し、「さっぱり+スル」は爽快感を伴う。

5.3.2.3 別義 2

＜味に余分なものがないと感じられるさま＞

(38) 知多半島南部で生産される高級温室ミカン「みはまっこ」の姉妹商品で、程よい酸味を持つ「さわみっこ」の出荷が二日、美浜町

北方の美浜みかん共選場で始まった。(中略)甘みが強く実の赤みが濃い「みはまっこ」に対して、さっぱりした味と黄や緑色の実が特徴。主に名古屋方面へ二百五十九トンを出荷する。

(中日新聞 2012.07.03)

(39)田原市産の農産物を使った昨年末の料理コンテストで、最優秀賞を受賞した「ブロッコリーレアチーズケーキ」が二十八日から田原市高木町の洋菓子店「バロック」で販売される。商品名はレアチーズとブロッコリーの名を取った「レアッコリー」。青臭さやチーズ風味を抑え、さっぱりしたご当地スイーツに仕上がった。

(中日新聞 2012.01.28)

例(38)(39)の「さっぱり」は、それぞれ「ミカンの味」、「ケーキの味」を表している。例(38)では、「甘みが強くて実の赤みが濃いみはまっこ」の味と比べて、「さわみっこ」の方は、「黄や緑色の実」と述べられ、余分と感じられる過剰な甘みがない味が「さっぱり」で表されている。例(39)では、ブロッコリーの青臭い味、チーズの濃厚な味が含まれる「ケーキの味」と比べて、「ブロッコリーレアチーズケーキ」の味には、余分と感じられる過剰な青臭さやチーズの風味がないことが「さっぱり」で表されている。

このように、「さっぱり」は「味の性質」を表すものとして用いられるが、余分と感じられるものがなくなるというプロセスの痕跡的認知によるものであると考えられる。

5.3.2.4 別義3

＜対象に余分なものがないと視覚で感じられるさま＞

(40)長靴、軍手姿のじゃおクラブのメンバー十数人が大カマを振るうと雑草だらけだった庭が、みるみるうちにさっぱりしていった。

(中日新聞 1999.12.04)

(41)髪を切る間は鏡を見られなかったが、家で初めて鏡を見て、「さっぱりした姿に達成感があった」。前向きな気持ちが生まれた。

(中日新聞 2005.08.09)

例(40)(41)の「さっぱり」は、それぞれ目の前の「庭の状態」、「髪が切られた姿」を表している。例(40)では、「雑草だらけだった状態」と比べて、余分と感じられるものだった雑草が取り除かれた状態を「さっぱり」で表しており、例(41)では、「髪が伸びている状態」と比べて、髪を切って、余分と感じられるものがなくなった状態を「さっぱり」

で表している。

雑草が取り除かれた後の状態と髪を切った後の状態を見ると、一般的に爽快感を伴い、好ましい状態であると捉えられるが、次の例を見ると、「さっぱり」が必ずしも好ましい状態を表すとは言えない。

(42) 彼女の部屋は、女の子の部屋にありそうなぬいぐるみなんかがなくてさっぱりした部屋だ。なんだかがっかりした。

例(42)では、ぬいぐるみなどがなくとも、好ましくないとは言えないが、ぬいぐるみなどがあれば、一般的に女の子の部屋として認められ、好ましい状態だと考えられていることがわかる。例(42)の「さっぱり」に爽快感などプラス評価は伴わないと考えられる。

5.3.2.5 別義 4

<匂いに余分なものがないと感じられるさま>

(43) 香の歴史が示す通り、日本人も香りには敏感で繊細な民族だが、欧米とは違って、シンプルでさっぱりした、自然の香りが好まれてきた。
(毎日新聞 1993.01.12)

(44) ツバキ油は、ツバキの実をすりつぶして蒸し、圧力をかけ搾って抽出する。オリーブ油よりもなめらかで香りもさっぱりしており、食用やハンドクリーム代わりにも利用される。
(毎日新聞 2013.11.20)

例(43)(44)では、「香り」について述べられている。例(43)では、「欧米の香り」と比べて、日本人に好まれる香りは、余分と感じられる強い刺激がない「シンプル」「自然」な香りであることが述べられ、それを「さっぱり」で表している。例(44)では、「オリーブ油」と比べて、余分と感じられる油っこさがない「ツバキ油」の香りを「さっぱり」で表している。

以上、別義 1 から別義 4 は、五感で捉える対象の状態に焦点をあてている。また、例文からわかるように、多くの場合、余分と感じられるものがなくなることによる爽快感を伴っている。

従って、「さっぱり」が別義 1 から別義 4 に用いられるとき、「さっぱりする」という擬態語動詞として用いられ、余分なものなくなるプロセスを表すが、一般的に「～している/した」の形で対象の状態を表す。また、「さっぱり食べられる」「さっぱり洗い上がる」といったように副詞的にも用いられる。

別義1（触覚）、別義2（味覚）、別義3（視覚）、別義4（嗅覚）は、現行の辞典に記述されている。一方、「聴覚」に関する用法は、辞典には記述されていないが、次のような例が見られる。

(45) 重低音レベル（音圧）を最大 10dB 無段階調節が可能という遊び心のあるヘッドフォン！サッパリとした音から熱い迫力のある音まで、曲や気分に合わせて楽しめちゃうのが嬉しい。

（<http://www.oto-note.com/select/s01.html>）

例(45)では、「ヘッドフォンの音」について述べられている。「熱い迫力のある音」と比べて、「迫力がない音」を「さっぱり」で表している。人の好みには個人差があり、「熱い迫力のある音」は、それを好まない人にとっては「迫力」が余分と感じられるものである。例(45)のような「聴覚」に関する用法は、非慣習的であり、別義としては確立していないため、事例として記述する。

事例 A<音に余分なものがないと感じられるさま>

5.3.2.6 別義5

<不快感がなく気持ち⁴⁸が爽快であると感じられるさま>

(46)汗をかいて、体がベタベタして不快だったが、シャワーを浴びてさっぱりした気持ちになった。

(47)境内の山門やお堂、自動車祈とう所、各部屋もきれいになり、職員らは気分さっぱりとした表情だった。（中日新聞 2007.12.14）

例(46)(47)は、「気持ち」を表している。例(46)の「さっぱり」は、シャワーを浴びた後の気持ちを表している。「体がべたべたしているときの気持ち」と比べて、汗がもたらす不快感がなくなり、爽快になったと考えられる。例(47)の「さっぱり」は、きれいに掃除した後の気持ちを表している。「汚い境内の各場所を見たときの気持ち」と比べて、ほこりやごみなどがもたらす不快感がなくなり、爽快な気持ちになる。さらに、「気分さっぱりとした表情」からわかるように、「心

⁴⁸ 姉齒(1987)では、「気持ち」と「気分」の意味を詳細に分析し、「気持ち」について、<人間の外部の客観的事物によって引き起こされる><具体的分析的な内容をもつ><感覚的なものから精神的なものに至るまでの><心の状態>と記述している。「さっぱり」の例において、「気分」が用いられる場合があるが、本稿は、姉齒(1987)の記述を参考にし、「気持ち」を用いる。

理状態の変化」が「表情」によって表出されている。

このように、例(46)(47)は、気持ちを表すが、そのような気持ちの変化は、「触覚」「視覚」で捉える対象の状態変化によってもたらされたものである。同様に、次の例(48)(49)(50)のように、「嗅覚」「味覚」「聴覚」で捉えられる対象の状態変化によって気持ちの変化がもたらされることもある。

(48)グレープフルーツのいいにおいを嗅いで、気持ちがさっぱりした。

(49)夏の暑い日に、風鈴の涼しげな音を聞いて気持ちもさっぱりした。

(50)酸味は気分をさっぱりさせる味だ。

以上の例から、別義5は、気持ちが爽快であるさまに焦点が当てられていると言える。一般的に、私たちは、きれいな状態を見ると気持ちがよくなることを日常的に経験している。同様に、お風呂に入るかシャワーを浴びるかしたり、いい味や香りに触れたりすると気持ちがよくなる。上記の例は、いずれも「感覚で捉えられる性質や状態」を表すと考えられるが、一方で、「その感覚によって引き起こされる心理状態の変化」を表すとも考えられる。このように、異なる要素の中での焦点の移動は、日常言語によく見られるメトニミー表現の意味の成立の基盤である。つまり、「感覚」と「心理」のどちらに焦点をあてるかによって、「感覚で捉える状態」あるいは「心理状態」どちらかの意味が成り立つことになる。

ただし、不快感には、五感で感じられるものではない例もある。

(51)亀谷さんは、普通車と自動二輪の免許を返した。あと一年余り有効期限があるが、「七十を過ぎてから視力が落ち、できるだけバスを利用するようにしていた。けれど、免許証があると車を運転しようかと迷ってしまう。取り消してもらってさっぱりしました」と話した。
(朝日新聞 1998.04.02)

(52)離婚の手続きがすべて終わってさっぱりした。

例(51)では、亀谷さんが「七十を過ぎてから視力が落ち、できるだけバスを利用するようにしていた」と言っていることから、運転に適さない状態を自覚していたことがわかる。そして、「免許があると、車を運転しようかと迷ってしまう」ということから、亀谷さんにとって、免許は自制している運転をしたくなるという迷いを生じさせ、不快感をもたらすものである。それと比べて、取り消されて運転できなくなり、そういった不快感もなくなり気持ちが爽快になったことを

「さっぱり」で表している。例(52)では、離婚届、財産分与、子どもの養育の問題、引っ越しなどの離婚の手続きが不快感をもたらすものである。それと比べて、それらがすべて終了したときの気持ちが爽快であるさまを「さっぱり」で表していると考えられる。

「さっぱり」の別義5は、「さっぱりする」という擬態語動詞として用いられる。

5.3.2.7 別義6

＜人の性格に余分なものがないと感じられるさま＞

(53)母が言うには、もともとは細かいことは気にせず、さっぱりした性格だったようなのですが、最近は何かにつけて理屈っぽく面倒くさい性格になってしまったのだそうです。

(朝日新聞 2011.11.05)

(54)「時に優しく、時に厳しく、ズバツとものを言ってくれました」。高知大の卒業生から届いた感謝の手紙を大切に持つ「アリラン」の下元美子さん。「怒る時には怒るよ」とさっぱりした人柄で、常連客からは「お母さん」と呼ばれる。(朝日新聞 2005.10.17)

例(53)(54)では、「さっぱり」で人の性格や人柄を表している。例(53)の「細かいことは気にしない」性格は、「細かいことを気にする」性格と比べ、「理屈っぽさ」「面倒くささ」といった余分と感じられる性質がない性格であり、「さっぱり」で表されている。例(54)では、「ズバツとものを言ってくれる」「怒る時には怒るよ」ということから、下元美子さんは素直で、「飾り気の多い性格」と比べて、余分と感じられる飾り気などが無い性格であり、「さっぱり」で表されている。

「さっぱり」の別義6は、「～(と)している/した」の形で連体修飾語、述語として用いられ、「人の性質」を表す。

5.3.2.8 別義7

＜存在していた対象が完全にないと捉えられるさま＞

(55)横寺町の足穂の旧居跡には残念ながら何の表示もありません。足穂が通った飯塚酒店もとうに店を閉じています。以前はその建物だけかろうじて残っていたのですが、先日訪れてみると、きれいさっぱり消えていました。(朝日新聞 2014.04.23)

(56)もう21年も前のことです、大雑把なことは覚えています、細かいことは綺麗さっぱり忘れてしまっています。

例(55)(56)では、元々存在していた対象が、ある程度残っていることが期待されており、例(55)では、横寺町の旧居が跡形もなく完全になくなった状態を「きれいさっぱり」で表している。例(56)では、「大雑把なことは覚えている」といっても、細かいことは完全に忘れた状態を「きれいさっぱり」で表している。例(55)(56)を見ると、いずれも「なくなった状態」であるが、その状態が必ずしも否定されるわけではなく、否定的な評価を伴うとは限らない。

「さっぱり」の別義7は、通常「きれい」に後続して「きれいさっぱり」という形で「消える」「忘れる」「なくなる」といった「消失」を表す動詞と共起し、副詞として用いられる。

5.3.2.9 別義8

＜対象の量が期待にまったく達していないと捉えられるさま＞

(57)市農業振興課では「最低でも百件は応募があるだろう」と見込んでいたが、応募はさっぱり。(中日新聞 2003.12.12)

(58)三月に入ってなべ物材料はさっぱり売れなくなった。市場には、刺し身や焼き魚に適した魚が並ぶ。(中日新聞 1999.03.07)

(59)事前対策については、専門家から具体的に指示してもらわないと、どうしたらいいのか、さっぱり分らないというのが現状だ。(中日新聞 1999.12.08)

(60)前から原作を読んでではみたかったですけど、どんな話かさっぱりだったのでは手を出してませんでしたけど……(BCCWJ Yahoo!ブログ 2008)

例(57)-(60)では、話題の対象に対して、期待する量がある。例(57)では、「応募の件数」つまり「応募の量」に対して、「最低でも百件」という「最低の見込み」にも達していない状態が「応募はさっぱり」と述べられている。この「応募はさっぱり」は、「応募はさっぱりこなかった」という否定の省略であると考えられる。例(58)では、三月に入ったら、なべ物材料は売れにくいだが、至少くは売れるだろうという多少の期待があるからこそ、市場に並べられている。その期待に達しなかった状態が「さっぱり売れなくなった」と述べられている。例(57)(58)の「さっぱり」は、明らかに数値化できる「応募の件数」や「なべものの材料の販売量」といった「量」に用いられているが、例(59)(60)では、数値化できない量に対して用いられている。例(59)

の「事前対策」に対し、少しはわかるだろうという期待に反して、分かることがないこと、例(60)の「本の内容」に対し、分かることがないことを表す。

「さっぱり」の別義8は、「さっぱり～ない」と「さっぱりだ」の形で完全否定を表し、副詞として用いられる。「さっぱり…ない」や「さっぱりだ」は、いずれも「期待したことがまったく実現しない」ことを表すため、マイナス評価を伴うと考えられる。

5.3.3 「さっぱり」の意味のネットワーク

本節では、まず、5.3.2.2 節から 5.3.2.9 節で認定した「さっぱり」の8つの別義を再掲し、プロトタイプの意味を認定したうえで、多義的別義の相互関係とすべての意味のネットワークを提示する。

5.3.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係

以下に、「さっぱり」の8つの別義を再掲する。

別義1 <対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>

・暑い日は、汗をかきやすいので、シャワーを浴びてさっぱりする。

別義2 <味に余分なものがないと感じられるさま>

・油っこいものを食べた後、オレンジを食べてさっぱりする。

別義3 <対象に余分なものがないと視覚で感じられるさま>

・たまっていたごみを片付けて部屋がさっぱりした。

別義4 <匂いに余分なものがないと感じられるさま>

・フルーツのさっぱりとした香りが漂っている。

事例 A <音に余分なものがないと感じられるさま>

・涼しげなさっぱりした音が届いている。

別義5 <不快感がなく気持ちが爽快であると感じられるさま>

- ・暑さにたまりかねて長い髪を切ったら、気持ちがさっぱりした。

別義 6 <人の性格に余分なものがないと感じられるさま>

- ・あの人は、物事にこだわらない、さっぱりした性格です。

別義 7 <存在していた対象が完全にないと捉えられるさま>

- ・雪がとけてきれいさっぱりなくなりました。

別義 8 <対象の量が期待にまったく達していないと捉えられるさま>

- ・今月の売り上げは、さっぱりだ。

別義 1 を「さっぱり」⁴⁹のプロトタイプの意味として認定する。認定の理由は、以下の通りである。

前節の分析からわかるように、「さっぱり」は、「五感で捉える状態」と「心理的状态」を同時に表せるが、「五感で捉える状態」を焦点に当てる。また、五感で捉える状態の中で、「聴覚」より、「触覚」「味覚」「視覚」「嗅覚」で捉える場合は、慣習性が高いことがわかる。しかし、その中で、「触覚」と「味覚」の未分化現象が見られ、「触覚」を表す例には、皮膚で触れる触感と口の中の食感が含まれる。本稿は、「味覚」を単に「飲食物の味」とし、「触感」と「食感」を含む「触覚」をプロトタイプの意味と認定する。

続いて、多義的別義の相互関係について検討していく。

まず、別義 2 から別義 4 は、別義 1 から拡張したと考えられる。別義 1 と別義 2、別義 3、別義 4 それぞれの間に、<対象に余分なものがなく五感で感じられるさま>という類似性があり、メタファーに基づいて拡張している。この類似性はスキーマとして抽出される。また、分析での事例 A の掲載例に多少の不自然さを感じる人もいるようであるが、多くの日本語話者にとって、意味が理解できるようである。事例 A が容認されるのは、スキーマが活性化されるためである。従って、この事例 A は、非慣習的な用法であり、スキーマの事例として位置づ

⁴⁹「さっぱり」の語源について、『日本国語大辞典』では、語源は未詳だが、語形・語義の両面において「さはやか」の「さは」と同根ではないかと考えられるとしている。そして、「さは」の強調語形として促音を挿入し、「は」が半濁音化した「さっぱ」となり、「り」が添加した形と考えられるとしている。(JapanKnowledge Lib『日本国語大辞典』による)

けられる。

次に、別義5は、別義1から拡張したと考えられる。別義1の<対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>と、別義5の<不快感がなく気持ち爽快であると感じられるさま>は同時に起こるので、メトニミーに基づいて拡張したと考えられる。

次に、別義6は、別義1から拡張したと考えられる。<対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>と抽象領域の<人の性格に余分なものがないと感じられるさま>の間には、<対象に余分なものがないと感じられるさま>という類似性が抽出できるので、メタファーに基づいて拡張したと考えられる。

次に、別義7は、別義1から拡張したと考えられる。<対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>と、<存在していた対象がないと捉えられるさま>の間には、<存在していたものがないと捉えられるさま>という類似性が抽出でき、メタファーに基づいて拡張したと考えられる。

最後に、別義8は、別義7から拡張したと考えられる。<存在していた対象が完全にないと捉えられるさま>と、<対象の量が期待にまったく達していないと捉えられるさま>の間は、<対象がないと捉えられるさま>という類似性が抽出でき、メタファーに基づいて拡張したと考えられる。

別義1と別義6、別義1と別義7、さらに、別義7と別義8の間に、それぞれ類似性があり、スキーマが抽出されるが、ここでは、統合したスキーマとして抽出する。

「さっぱり」の意味の相互関係から、「さっぱり」のすべての意味のネットワークは次のように示すことができる。

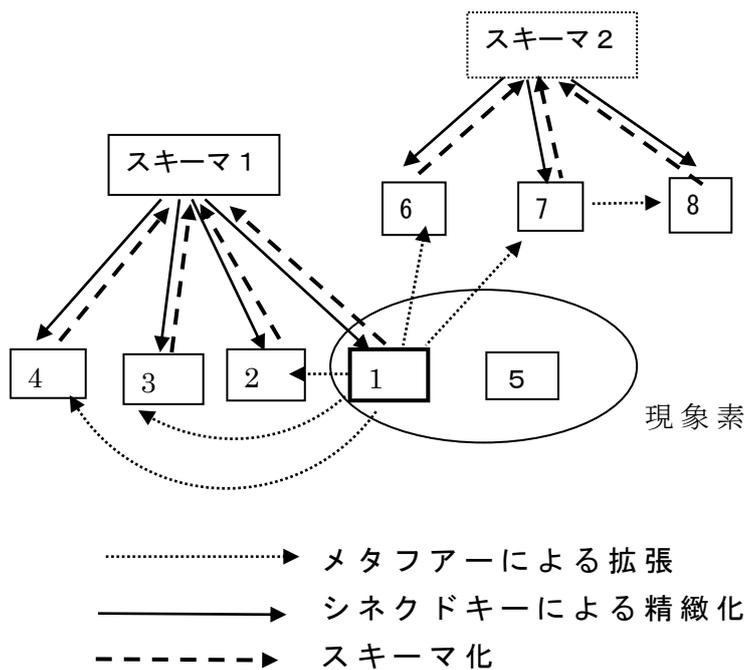


図 5-2 「さっぱり」の意味のネットワーク

図 5-2 では、太線のボックスで囲まれた別義 1 がプロトタイプの意味であり、最も定着度が高いことを示している。

別義 1 と別義 2、別義 3、別義 4 の間には、類似性が認められつつ、感覚器官の違いがあり、別義 2、別義 3、別義 4 は、別義 1 の拡張例であると考えられる。＜対象に余分なものがないと五感で感じられるさま＞という共通性があるため、スキーマ 1 が抽出される。このスキーマ 1 もカテゴリーの中に階層的に組み込まれる。つまり、別義 1 から別義 4 への拡張は、スキーマ化を伴い、別義 1 から別義 4 は、スキーマ 1 の精緻化された例として考えられる。このスキーマ 1 は、別義 1、別義 2、別義 3、別義 4 ほどには定着度が高くないものの、事例 A が理解・使用されることから、ある程度単位として定着していると考えられる。

別義 1 の＜対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま＞と別義 5 の＜不快感がなくて気持ち爽快であると感じられるさま＞は、同時に発生するため、メトニミーに基づく関係が成立していることになる。「触覚」と「気持ち」を含む現象素を楕円で囲んで示した。

別義 1 と別義 6 の間には、類似性が認められつつ、「感覚」と「人の性格」の違いも存在しており、別義 6 は、別義 1 の拡張例であると考えられる。一方、両者からは＜対象に余分なものがないと感じられるさま＞という共通性がある。また、別義 1 と別義 7 の間には、類似

性が認められつつ、「余分なもの」と「すべてのもの」の違いも存在しており、別義7は、別義1の拡張例であると考えられる。一方、両者からは、＜存在していたものがないと捉えられるさま＞という共通性がある。

別義7と別義8の間には、類似性が認められつつ、対象の違いも存在しており、別義8は、別義7の拡張例であると考えられる。

別義1から別義6、別義7へ、さらに、別義7から別義8への拡張は、それぞれスキーマ化を伴うが、スキーマ2＜存在していた対象がないと捉えられるさま＞として統合されている。スキーマ2は意味として確立しておらず、点線で囲まれている。

以上、多義的別義の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。このような分析がネットワーク・モデルの有効性を示していると言えよう。

5.3.3.2 感覚内の意味転用

前節の分析では、別義1をプロトタイプの意味であると認定された⁵⁰。つまり、触覚的経験から、味覚、視覚、嗅覚的経験へ転用されている。前節では、別義1と別義2、別義1と別義3、別義1と別義4には類似性に基づいて、比喩の観点から、メタファーによって拡張したことを述べたが、別義1と別義2、別義1と別義3、別義1と別義4には、本稿の定義による「共感覚」を基盤とした転用でもある。この転用は、「一方向性仮説」に従うものである。

一方、「聴覚」に関する事例Aは共感覚を基盤とした転用ではない。あくまでもスキーマ的意味の事例であり、プロトタイプの意味との間には類似性があるのみである。感覚内の意味転用については、第6章で詳述する。

5.3.4 まとめ

本節は、「さっぱり」の意味を分析し、8つの多義的別義を認定・記述した。そして、別義1をプロトタイプの意味として認定し、多義的別義の相互関係を示した上で、意味のネットワークを記述した。最後に、「触覚」から、「味覚」「視覚」「嗅覚」への感覚内の転用は共感覚に基づく転用であることを述べた。

⁵⁰瀬戸(2003)では、「さっぱりした味」が、一方向性仮説に従う「触覚→味覚」の転用例として挙げられている(pp.70-71)。このことから、瀬戸(2003)も、「触覚」から他の感覚へ転用されると考えていることがわかる。

5.4 「すっきり」

本節では、「すっきり」について、多義語分析を行う。5.4.1 節では、「すっきり」の意味記述に関する先行研究を取り上げ、その記述を検討し、問題点を指摘する。5.4.2 節では、「すっきり」の複数の意味を認定する。5.4.3 節では、プロトタイプの意味を認定し、複数の意味の相互関係、及びすべての意味のネットワークを示す。

5.4.1 先行研究の検討

「すっきり」の意味を記述したものは、管見の限り、擬音語擬態語辞典、及び国語辞典などに限られる。その中から、擬音語擬態語辞典の飛田・浅田(2002)の記述を中心に、国語辞典などの記述に触れながら検討していく。

まず、飛田・浅田(2002)は、次のように記述している。

むだな物や余計な物がなくて爽快である様子を表す。プラスイメージの語。

肉体的に爽快である場合（熱いシャワーを浴びると頭がすっきりする）、味が単純で爽快である場合（すっきりしたおいしさのビールです）、余計な物が付いておらず、整備されている場合（収納壁にガラクタをしまえば部屋はすっきり）、整備されていて美しい場合（胸元をぴしっと締めてすっきりつむぎを着こなす）、打ち消しを伴って完全に解決されない場合（交渉はすっきりしない結末となった）、覆っていた雲がなく爽快である場合（ゆうべの雨も上がりすっきりと晴れ上がった）。

清涼感・清潔・空白・簡素・整備・解決の暗示がある。

(pp.228-229)

飛田・浅田(2002)は、「すっきり」を「むだな物や余計な物がなくて爽快である様子を表す」と記述し、その下位分類では、「肉体的に爽快である場合」とし、次の例を挙げている。

(61)熱いシャワーを浴びると頭がすっきりする。(飛田・浅田 2002:228)

それに対して、『大辞林』（第三版）では、「頭がすっきりする」という例とともに、「わずらわしいことがなくて、気持ちのよいさま」と説明されている。無論、頭がすっきりすれば、それと同時に気持ちもすっきりするものだが、同じ「頭がすっきりする」を例として、一方では「肉体的な爽快さ」、一方では「気持ちのよいさま」との記述

がなされており、果たして「すっきりする」が「肉体的状態」を表すのか、「心理的状态」を表すのかが明確ではない。さらに、「頭」を含め、身体部位である「胃・顔・心・体・口」を対象とする場合についての考察が不十分だといえる。

複数の国語辞典において、「すっきり」の記述に「さっぱり」が用いられており、「さっぱり」の意味と区別できない点で問題がある。しかも、次の例から、互いに置き換えた場合、常に容認されるわけではないことがわかる。

- (62) 新都心の玄関口であるのを配慮、すぐ隣の新宿モード学園やペDESTリアン・デッキと色調などを統一、すっきり（?さっぱり）した景観をつくり出した。 (= (29))

例(62)で、「さっぱり」と「すっきり」が互いに置き換えられないことから、「さっぱり」と「すっきり」には、違いがあると考えられる。しかし、これまでの研究では、これらの違いを明らかにしていない。

さらに、多数の辞典類の記述を見ると、いずれも「味覚」「視覚」を表す用法を取り上げているが、次の例のような「触覚」「嗅覚」「聴覚」に関する用法は、記述されていない。しかし、実例が存在する。

- (63) 毛穴の目立ちを予防して、すっきりとした潤いのある肌^肌に導く。
(www.sokamocka.com/html/item/001/006/item5361.html)

- (64) 見ごろを迎えたオカムラサキや町オリジナル品種の「美郷雪華」などが、紫や白の小さな花を一面に咲かせ、園内をすっきりとしたすがすがしい^{香り}で包み込んでいる。(毎日新聞 2014.06.29)

- (65) ステレオ音場が伸びやかではなく、^音がすっきりしていないほうが、渋くてガッツがあって良い、などと感じるかたもおられることであろう。

(BCCWJ 石原俊『いい音が聴きたい』岩波書店 2002)

さらに、「すっきり」の複数の意味の関連性、意味のネットワークが明らかにされていない。

以上の先行研究の問題点を次にまとめる。

- a. 「五感」や「肉体的感覚」を表すのか、「心理状態」を表すのかが明確ではない。
- b. 「さっぱり」と同じような記述及び「さっぱり」が用いられている記述が見られ、両語の違いが明確ではない。

- c.慣習性は低くても、母語話者にとって理解可能な用法が記述されていない。
- d.複数の意味の関連性と意味のネットワークが明らかではない。

以上、先行研究を検討し、問題点を指摘した。次節では、これらの問題点を踏まえ、本稿の分析を進める。

5.4.2 分析

本節では、多義語分析の課題を踏まえ、「すっきり」の複数の意味を認定し、記述する。5.4.2.1 節では、本稿の分析の前提を確認しておく。5.4.2.2 節から 5.4.2.6 節までは、「すっきり」に5つの別義を認定し、例文に基づき説明していく。

5.4.2.1 分析の前に

分析に入る前に、以下の現象を確認しておく。「すっきり」は、「さっぱり」と同様に、「すっきり+スル」という擬態語動詞として用いられ、次の例に見られるように、「状態の変化」を表す。

- (66)a.書類を整理したら、部屋がすっきりしたね。
- b.つまっていた鼻が通ってすっきりした。
- c.不満がなくなってすっきりした。

(66)の3つの例はそれぞれ「乱雑さ」「鼻水のつまり」「不満」がなくなる状態変化を表している。しかし、次の(67)(68)では、「くせ」や「複雑さ」は、元々存在せず、なくなるというプロセスがなく、「痕跡的認知」であると考えられる。このような例も変化のプロセスがあるものと捉える。ただし、「変化」は、「スル」という動詞が表し、「すっきり」は状態を表す語として記述する。

(67) コーヒーは注文を受けてからドリップで落とす。豆はガテマラなど4種類のブレンド。くせがなく、すっきりとした後味が印象的だ。
(毎日新聞 2014.06.03)

(68)ユピテルはドライブレコーダー搭載のポータブルカーナビ「Y P B 7 5 0 D R」を発売した。本体背面にドライブレコーダー用のカメラが一体化されたすっきりしたデザインとなっている。
(毎日新聞 2014.08.18)

また、「さっぱり」と同様に、「すっきり」においても、「余分なも

のがない」という意味要素に注目する。5.3.2.1 節で確認したように、「余分」というのは、対象が持っている性質ではなく、人が対象に対して持っている主観的な評価である。

このようなことを前提とし、例文に基づいて説明していく。

5.4.2.2 別義 1

＜心理的に感じる余分なものがなく気分⁵¹が整って爽快であると感じられるさま＞

(69)最初はごちゃごちゃしていて、考える暇がなかった。迷った部分もあったが3連休がいい休養になって、気持ちの整理がついた。決まってすっきりした。(中日新聞 2001.11.27)

(70)東日本大震災から三年がたった。いつ、どこで起きるか分からない地震。暮らしの中でどう備えるのか。体験から考えてみた。(中略)電車は動かず、当日と翌日は会社に泊まった。着替えはできなかったが、宿直勤務用にタオルや歯磨きセットを用意していたので、洗面には困らなかった。顔を洗い、歯を磨くだけでも気分はすっきりする。(中日新聞 2014.03.15)

例(69)(70)では、心理状態としての気分について述べられている。例(69)では、「ごちゃごちゃした状態」に比べ、「気持ちの整理がついた」とあるように、決心がつき、余分と感じられる迷いがなくなり、気分が整って爽快になった状態を「すっきり」で表している。例(70)では、地震で帰宅できず、疲れや不安で塞いだ心理状態であったのが、「顔を洗い、歯を磨く」ことにより、気分が整って爽快になった状態を「すっきり」で表している。

また、次のような例においても、「すっきり」は、「気分」を表すが、「爽快な気分」は、五感により引き起こされたものである。

(71)台風4号が接近した関係で、シートは予定より早めに外されました。久しぶりに部屋に差し込む太陽の光、入り込んでくる自然の風、そして何よりも、周辺の風景を遮る物なしに見ることができて、気分的にととてもすっきりしました。(毎日新聞 2003.06.23)

(72)いい香りをかいですっきりしたと感じればストレス解消になる訳

⁵¹ 姉齒(1987)では、「気分」を＜環境の影響を強く受ける＞＜快・不快・喜怒哀楽に関する＞＜漠然としていて分析困難な＞＜心理状態＞と記述している。「すっきり」の例文において、「気持ち」が用いられる場合があるが、本稿はこの記述を参考にし、「気分」を用いる。

です。

(朝日新聞 1993.04.02)

例(71)(72)では、それぞれ「視覚」「嗅覚」で感じられることにより引き起こされた気分について述べられている。例(71)では、余分と感じられる「周辺の風景を遮る物」がなくなり、周辺の風景を見ることができたことにより、周辺の風景が遮られているときの気分と比べて、気分が整って爽快になる状態を「すっきり」で表している。例(72)は、いい香りを嗅ぐことによって、余分と感じられるストレスが解消され、気分が爽快になった状態を「すっきり」で表している。このように、例(71)(72)の「すっきり」は、「気分」を表すが、そのような気分の変化は、「視覚」「嗅覚」によってもたらされたものである。次の(73)(74)(75)も同様に、「味覚」「触覚」「聴覚」によって気持ちの変化を表している。

(73)油っこい料理をたくさん食べた後、オレンジジュースを飲んで、気分がすっきりした。

(74)スポーツで汗をかいて、シャワーを浴びると、気分がすっきりする。

(75)寺の鐘を叩くと、心が落ち着いて気分もすっきりした。

「すっきり」の別義1は、「すっきりする」という擬態語動詞として用いられ、余分なものがなくなり、気分が爽快になることを表す。

5.4.2.3 別義2

<余分なものがなく生理的な状態が整っていると感じられるさま>

(76)ニチバンの鼻づまりをすっきりさせるシール「鼻すっきりパッチ」ツボの刺激とハーブの香りで鼻の通気をすっきりさせる。リラックス効果のあるラベンダー、さわやかな香りのユーカリ、清涼感のあるメントールをシールに配合した。

(日本経済新聞 2005.11.11)

(77)出したいのに、出ない。おなかが重くてすっきりしない。便秘に悩んでいる人はとても多い。便秘自体は病気ではないけれど、心身の健康のバロメーターにもなる。(中日新聞 2006.03.03)

例(76)(77)では、それぞれ「鼻」「おなか」の生理的な状態について述べられている。それらの身体部位には本来の正常な状態があるが、「鼻づまり」「お腹が重い」といった状態は、身体部位が正常に機能でき

ない状態である。例(76)では、鼻の正常な呼吸に妨げとなっていた「鼻水」がなくなり、鼻の通気が快調になった状態を「すっきり」で表している。例(77)では、排便ができず、正常な腸の働きに妨げとなっていた「便」がなくなり、お腹が軽くなったように感じられ、快調になった状態を「すっきり」で表している。このように、「鼻水」「便」といった余分なものがなくなることには爽快感が伴う。

「すっきり」の別義2は、「すっきりする」という擬態語動詞として用いられ、余分なものがなくなるプロセスを表す。

5.4.2.4 別義3

＜余分なものがなく視覚で捉える状態が整っていると感じられるさま＞

(78)道路を横断していた電線を地中化し、景観をすっきりさせた。

(毎日新聞 1996.03.14)

(79)携帯電話や名刺入れ。かばんの中で散らばりやすい物をすっきり収納できるインナーバッグ「デルサット」を、一宮市栄のメーカー・ハピネオが発売した。

(中日新聞 2013.12.11)

例(78)(79)では、物理的空間の状態について述べられている。例(78)では、電線が道路を横断していた乱雑な元の状態と比べて、「道路を横断していた電線を地中化する」ことにより、「電線」という余分なものがなくなり、景観が整った状態を「すっきり」で表している。例(79)では、「かばんの中で散らばりやすいもの」を収納できるインナーバッグについて述べられている。ものが散らばった状態と比べて、「散らばりやすいもの」をインナーバッグに収納すれば、必要なものを取り出しやすくなる。この乱雑な状態がなくなって整った状態を「すっきり」で表している。

5.4.2.5 別義4

＜余分なものがなく味覚で捉える状態が整っていると感じられるさま＞

(80)オエノングループの福德長酒類は、爽やかな香りの焼酎「博多の華すっきり麦」を28日に発売する。発酵の際に生じる雑味を取り除き、すっきりした味わいの麦焼酎に仕上げたという。

(毎日新聞 2013.11.27)

(81)ユニークなビールを出す沖縄ダイニング「りよく 銀座」を訪ね

た。女性に人気で、店の売りの一つがシークワサー、マンゴー、ゴーヤーで割ったフレーバー・ビール（各560円）である。黄、赤、緑とカラフルで南国っぽいおそろおそろゴーヤーを注文した。「青汁」を想像したが、リンゴ果汁で苦みを抑え、すっきりした飲み口である。（毎日新聞 2014.06.07）

例(80)(81)では、「お酒の味」「ビールの味」について述べられている。例(80)では、お酒の発酵の際に生じる「雑味」がなく、お酒の味が滑らかになって整った状態を「すっきり」を用いて表している。例(81)では、「ゴーヤー味のフレーバー・ビール」の「苦み」が、「おそろおそろ」という表現から、あまり好ましくなく、味において余分なものとして捉えられており、苦みを抑えた「すっきりした」味は、整った味である。

以上の分析から、別義1が「気分」に焦点をあてているのに対して、別義2、別義3、別義4は、「対象の状態」に焦点をあてていることがわかる。「すっきり」の別義3と別義4は、「すっきりする」という擬態語動詞として用いられ、余分なものがなくなるプロセスを表すが、「～した/している」の形で状態を表す。

「すっきり」は、「さっぱり」と同様に、「感覚で捉えられる性質や状態」と「その感覚で引き起こされる心理状態の変化」を表す。つまり、「感覚」と「心理」のどちらに焦点をあてるかによって、「感覚で捉える状態」あるいは「心理状態」のどちらかの意味が成り立つことになる。

別義3、別義4は、現行の辞典に記述されている。一方、「触覚」「嗅覚」「聴覚」に関する用法は、辞典に記述していないが、次のような例が見られる。

(82)オイルクレンジングでメイクや毛穴汚れを落とし、肌をすっきりさせる。

(http://www.cosme.net/product/product_id/10085272/top)

(83)バラとリンゴは甘くてフルーティな香り、ハーブは空気を清浄にするすっきりとした香り...どちらもストレスをやわらげて気持ちを落ち着かせてくれる。

(BCCWJ 赤岩 智美(著) 『花時間』角川書店 2002)

(84)あまりギリギリまで大きくした状態だとマスターリング時の音作りのコントロール幅が小さくなり、良い結果が得られない事があります。(中略)ですが、多くの場合、その低音域はバツサリとカットしてしまつた方がモコモコ感が減り、すっきりした音作りが

可能になります。

(<http://www.loudaudio.jp/gm.html>)

上掲の3例では、「肌の状態」「香り」「音」について述べられている。例(82)では、「メイク」や「毛穴汚れ」を落とし、余分なものがなく肌の状態が整ったことを「すっきり」で表している。例(83)では、「ハーブの香り」が、空気を清浄することができるということから、空気の中に汚れや変な匂いなど余分なものがなくなり、空気の状態が整ったことを「すっきり」で表している。例(84)では、「音」に対する好みは人によって異なるが、この例では、「低音域によって引き起こされたモコモコ感」が余分なものとして捉えられており、そういったものがなくなって、音の状態が整ったことを「すっきり」で表している。

このような「触覚」「嗅覚」「聴覚」に関する用法は、非慣習的であり、別義として確立していないため、事例として記述する。

事例 A<余分なものがなく触覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

事例 B<余分なものがなく嗅覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

事例 C<余分なものがなく聴覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

5.4.2.6 別義5

<余分なものがなく物事の全体が整った状態であると感じられるさま>

(85) 米連邦準備制度理事会 (F R B) が、量的緩和第3弾 (Q E 3) からの出口を模索する動きもみられ始めているが、欧州の債務危機はなお、すっきりとした収束は見通せない状況にある。欧米各国の中銀が金融危機以降に実施した「量的緩和」状態は当面、継続する可能性が高い。(毎日新聞 2013.06.25)

(86) 国土交通省が、電車内でのベビーカー利用の統一ルール制定に乗り出した。これによって、ベビーカーの利用者と他の乗客との「摩擦」を解消するのだという。確かに、国がルールを決め、すっきりさせようという考えも分からないではない。しかし、お互いの配慮で解決できないほど深刻な問題なのか。

(中日新聞 2013.05.23)

例(85)(86)では、いずれも「事態の結着」について述べられている。例(85)では、「欧州の債務危機」について、債務を解消し、それに関する不備や問題などがなく、危機が収束した状態を「すっきり」で表している。例(86)では、ルールがないことやルールにあいまいな部分があることは、問題の解決に余分なものであると考えられ、利用のルールを統一させて、余分となっているあいまいな部分をなくすことがわかる。この余分となっているあいまい部分をなくすことにより、摩擦が解消されて事態が整ったさまが「すっきり」で表されている。

「すっきり」の別義5は、「すっきり(と)している/した」の形で用いられる場合が多いが、「説明する」「まとめる」など内容に関わる動詞と共起して副詞的にも用いられる。

5.4.3 「すっきり」の意味のネットワーク

本節では、5.4.2.2節から5.4.2.6節で認定した「すっきり」の5つの別義を再掲し、プロトタイプの意味を認定したうえで、多義的別義の関係とすべての意味のネットワークを提示する。

5.4.3.1 プロトタイプの意味と多義的別義間の相互関係

以下に、これまで検討した5つの別義を再掲する。

別義 1 <心理的に感じる余分なものがなく気分が整って爽快であると
感じられるさま>

・ストレスがたまっていたので泣いたら、ほんとうにすっきりした。

別義 2 <余分なものがなく生理的状态が整っていると感じられるさ
ま>

・ヨガをやって、体も頭もすっきりした。

別義 3 <余分なものがなく視覚で捉える状態が整っていると感
じられるさま>

・模様がえしたら、部屋がすっきりした。

別義 4 <余分なものがなく味覚で捉える状態が整っていると感
じられるさま>

- ・ すっきりした味の日本酒が好きです。

事例 A <余分なものがなく触覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ この洗顔料を使うと、すっきりとした洗い上がりです。

事例 B <余分なものがなく嗅覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ ユズのすっきりとした香りが漂っている。

事例 C <余分なものがなく聴覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ 響きを少なくするとすっきりとした音ができますよ。

別義 5 <余分なものがなく物事の全体が整った状態であると感じられるさま>

- ・ すっきりした説明でわかりやすい。

本稿は、別義 1 を「すっきり」のプロトタイプ的意味として認定する。認定の理由は、以下の 3 点である。

第一に、別義 1 の定着度が相対的に高いということである⁵²。

第二に、別義 1 が母語話者にとって直観的に基本的だと感じられるということである。つまり、「すっきり」と聞いたときに母語話者は別義 1 のような「気分」に関わる例を最初に思い浮かべる⁵³。

⁵² 『現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』における「すっきり」の検索例は、総計で 1368 件であり、判断しにくい例 45 件を除いた 1323 例の内、純粋に「気分」に用いられた例は 469 件であり、「視覚」425 件、「味覚」110 件、「嗅覚」3 件、「聴覚」0 件である。

⁵³ 「すっきり」のプロトタイプ的意味を認定するにあたり、日本語母語話者 12 名に「すっきり」と聞いて、どのような意味が最初に想起されるかというテストを行った。判定者は、22 歳から 35 歳までの男性 4 名、女性 8 名、愛知県、宮城県、東京都、岐阜県、三重県出身の文科系大学院に在籍している大学院生である。その結果、6 名の日本語話者が「お風呂に入ってすっきりした」「原因がわかってすっきりした」というように、「気分」を最初に思い浮かべた。4 名が「トイレに行ってすっきりした」「頭がすっきりした」というように「生理的感覚」を最初に浮かべた。2 名が「すっきり整理整頓」

第三に、別義 1 は、他の意味を理解する際の前提となり、ここを起点として多くの多義的別義を拡張させているということである⁵⁴。

本稿は、母語話者の判断と実例の存在を重視し、別義 1 をプロトタイプの意味と認定する。以下、多義的別義の相互関係について検討していく。

まず、別義 2 と別義 3、別義 4 は、別義 1 から拡張したと考えられる。〈心理的に感じる余分なものがなく気分が整って爽快であると感じられるさま〉は、〈余分なものがなく状態が整っていると感じられるさま〉と同時に起こるので、メトニミーに基づいて拡張したと考えられる。

五感の内、別義 3 と別義 4 の間には、類似性が認められ、メタファーに基づいて拡張している。この類似性はスキーマとして抽出される。分析での事例 A、事例 B、事例 C の掲載例に多少の不自然さを感じる人もいるようであるが、多くの日本語話者にとって、意味が理解できるようである。事例 A、事例 B、事例 C が容認されるのは、このスキーマが活性化されるためである。この事例 A、事例 B、事例 C は、非慣習的用法であり、スキーマの事例として位置づけられる。

次に、別義 5 は、別義 3 から拡張したと考えられる⁵⁵。〈余分なものがなく物事の全体が整った状態であると感じられるさま〉及び〈余分なものがなく視覚で捉える状態が整っていると感じられるさま〉の間には、〈余分なものがなく状態が整っていると感じられるさま〉という類似性が認められ、メタファーに基づいて拡張していると考えられる。別義 3 と別義 5 からもスキーマとして抽出されるが、ここでは、別義 3 と別義 4 から抽出されるスキーマと統合されている。

「すっきり」の意味の相互関係から、「すっきり」のすべての意味のネットワークは次のように示すことができる。

というように「物理的状态」を最初に思い浮かべた。

⁵⁴ 意味の相互関係については、後述する。

⁵⁵ 注 52 からわかるように、五感の内、「視覚」に用いられる実例が相対的に多く、また、注 53 の母語話者に対するテストにより、五感の内、「視覚」のみは母語話者が最初に想起する意味として挙げられた。

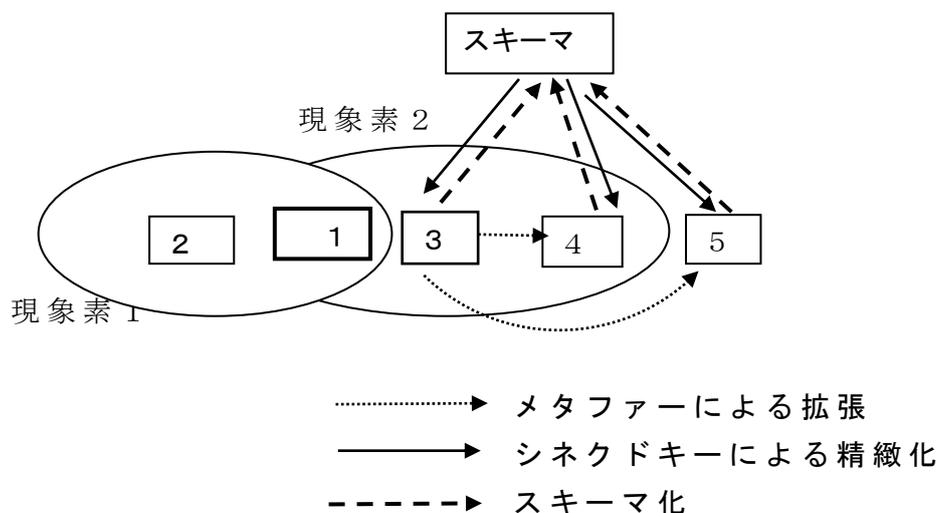


図 5-3 「すっきり」の意味のネットワーク

図 5-3 では、太線のボックスで囲まれた別義 1 がプロトタイプの意味であり、最も容易に喚起され、定着度が最も高いことを示している。まず、現象素 1 は、別義 1 と別義 2 を含むものである。つまり、余分なものがなく生理的状态が整うと同時に心理的に気分も整って爽快であると感じられる。また、現象素 2 は、別義 1 と別義 3、別義 4 を含むものである。つまり、余分なものがなく整った感覚で捉える状態が整うと同時に心理的に気分も整って爽快であると感じられるということである。

次に、別義 3 と別義 4、別義 3 と別義 5 の間には、類似性が認められつつ、対象の違いがあり、別義 4、別義 5 は、別義 3 の拡張例としてカテゴリー化される。しかし、別義 3 と別義 4、別義 5 の間には、**<余分なものがなく状態が整っていると感じられるさま>**という共通性があるため、この共通性がスキーマとして抽出される。このスキーマがカテゴリーの中に階層的に組み込まれる。つまり、別義 3 から別義 4、別義 5 への拡張は、スキーマ化を伴い、別義 3、別義 4、別義 5 は、スキーマの精緻化された例としても考えられる。このスキーマは、別義 3、別義 4、別義 5 ほどに高くないものの、事例 A、事例 B、事例 C が理解・使用されることから、ある程度単位として定着していると考えられ、点線のボックスで囲まれている。

5.4.3.2 感覚内の意味転用

「すっきり」において、視覚的経験から、味覚的経験へ転用されて

いる。前節では、別義3（視覚）と別義4（味覚）には、類似性が認められることを述べ、比喩の観点から、メタファーによって拡張したことが述べた。しかし、別義3（視覚）と別義4（味覚）には、同時性が認められ、本稿の定義による「共感覚」を基盤とした転用でもある。この転用は、「一方向性仮説」に従わないものである。

一方、「触覚」「嗅覚」「聴覚」に関する事例A、事例B、事例Cは共感覚を基盤とした転用ではない。あくまでもスキーマ的意味の事例であり、「視覚」を表す意味との間には類似性があるのみである。感覚内の意味転用については、第6章で詳述する。

5.4.4 まとめ

本節は、「すっきり」の意味を分析し、5つの多義的別義を認定・記述した。そして、別義1をプロトタイプの意味として認定し、多義的別義の関係を示した上で、意味のネットワークを記述した。最後に、「視覚」から「味覚」への感覚内の転用は共感覚に基づく「転用」であることを述べた。

5.5 本章のまとめ

本章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」について、先行研究の記述を検討し、多義語分析を行った。それぞれの別義とプロトタイプの意味を認定し、意味の相互関係を明らかにした。本節では、それらをまとめて示し、考察を加える。

次に、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の複数の意味を示す。

「しっとり」

別義1 <対象に水分があると触感で感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・冬になると肌が乾燥するので、化粧水は水分の多いしっとりタイプがおすすめだ。

別義2 <色に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・日本画のしっとりとした色に魅せられた。

別義3 <音声に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・乾燥した音より、音質は少ししっとりしているほうが好きだ。

事例 A <匂いに潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・薄暗い森の小道に入ると、しっとりとした優しい香りに包まれた。

事例 B <味に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・しっとりとした味わいのパンがおいしい。

別義 4 <人間の全体像に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・あのお嬢様が今日は着物を着てしっとりしている。

別義 5 <物理的空間に潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・能楽堂はしっとりした雰囲気醸し出していた。

事例 C <人の営みによって作られたものに潤い及び落ち着きがあると感じられ好ましく捉えられるさま>

- ・彼は 10 年間の練習をして、しっとりした演技を見せた。

「さっぱり」

別義 1 <対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>

- ・シャワーを浴びてさっぱりする。

別義 2 <味に余分なものがないと感じられるさま>

- ・油っこいものを食べた後、オレンジを食べてさっぱりする。

別義 3 <対象に余分なものがないと視覚で感じられるさま>

- ・たまっていたゴミを片付けて部屋がさっぱりした。

別義 4 <匂いに余分なものがないと感じられるさま>

- ・フルーツのさっぱりした香りが漂っている。

事例 A <音に余分なものがないと感じられるさま>

- ・涼しげなさっぱりした音が届いている。

別義 5 <不快感がなく気持ちが爽快であると感じられるさま>

- ・長い髪を切ったら、気持ちがさっぱりした。

別義 6 <人の性格に余分なものがないと感じられるさま>

- ・あの人は、何でも正直に言うさっぱりした性格です。

別義 7 <存在していた対象が完全にないと捉えられるさま>

- ・雪がきれいさっぱりなくなった。

別義 8 <対象の量が期待にまったく達していないと捉えられるさま>

- ・今月の売り上げは、さっぱりだ。

「すっきり」

別義 1 <心理的に感じる余分なものがなく気分が整って爽快であると
感じられるさま>

- ・謎が解けてすっきりした。

別義 2 <余分なものがなく生理的状态が整っていると
感じられるさま>

- ・ヨガをやって、体も頭もすっきりした。

別義 3 <余分なものがなく視覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ 模様がえしたら、部屋がすっきりした。

別義 4 <余分なものがなく味覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ すっきりした味の日本酒が人気だ。

事例 A <余分なものがなく触覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ この洗顔料を使うと、すっきりとした洗い上がりです。

事例 B <余分なものがなく嗅覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ ユズのすっきりとした香りが好きだ。

事例 C <余分なものがなく聴覚で捉える状態が整っていると感じられるさま>

- ・ 響きを少なくするとすっきりとした音ができますよ。

別義 5 <余分なものがなく物事の全体が整った状態であると感じられるさま>

- ・ すっきりした説明でわかりやすい。

以上、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」は、3語とも五感的体験を表すことができる。

「しっとり」「さっぱり」「すっきり」は、3語とも「視覚」を表す意味が慣習的であり、「しっとり」は、「色」「光沢」などの「物の見た目」に多く用いられるのに対して、「さっぱり」と「すっきり」は、「視界」などの「物理的状态」などに多く用いられる。また、3語とも人の見た目や姿を表すが、「さっぱり」「すっきり」は、目の前の人

に対する印象を表すのに対して、「しっとり」は、単に視覚で捉える人の姿のみではなく、複合的に人の姿から雰囲気までを表す。

また、「しっとり」と「さっぱり」は、「触覚」を表す意味が定着しており、「食感」「肌触り」「手触り」などに広く使われている。その中で、美容用品の使用感において、つまり「肌触り」を表すとき、「しっとり」と「さっぱり」が常に対比的に使われる。それに対して、「すっきり」は、「肌触り」にあまり用いられない。3語はすべて「しっとり/さっぱり/すっきりした味わい」のように、「食感」を表すことができる。従って、「味覚」において、3語とも用いられるようであるが、「飲食物の味」であるか、「食感」であるかは断言しにくい。

そして、3語とも「嗅覚」に関する用法は、非慣習的であり、「聴覚」において、「しっとり」は、音や声も表すのに対して、「さっぱり」と「すっきり」は、非慣習的用法である。

以上、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の対応を見た。

次に、5.2.1節、5.3.1節及び5.4.1節で指摘した先行研究の問題点について、本章の分析を通して、それがどのように解決されたかを示す。

「しっとり」について、「水分がある物理的な潤い」と「実際には水分がない抽象的な潤い」のつながりは、私たちの経験を基盤にしていることを述べた。つまり、物理的な潤いがある場合は、心まで潤うということである。実際には水分がなくとも、心が癒されるという同じ感情を呼び覚ます対象に対して、潤いを感じるのである。

また、「潤いがある様子」と「落ち着きがある様子」のつながりも、私たちの経験が基盤にある。物理的な「潤いがある」というのは、「水分がある」ということである。「水分がある」場合は、われわれは、一般的に「重さ」を感じる。「重さ」をプラスに安定感や落ち着きがあると捉えられる。抽象的な「潤いがある」場合は、心が癒され、落ち着いた気持ちになると考えられる。

以上のことから、「しっとり」が清音であることの他に、「潤いや落ち着きがある」という意味が含まれており、プラス評価を伴うことを明らかにした。「潤いがある」と「落ち着きがある」ことは、いずれも好ましい状態であるためである。

「さっぱり」と「すっきり」について、「五感で感じられる対象の状態」と「心理状態」、「生理的状态」と「心理状態」の関係も、私たちの経験を基盤にしている。つまり、「五感で感じられる対象の状態」や「生理的状态」がよくなると同時に、「心理状態」がよくなると考えられるので、どちらに焦点をあてるかによって、「感覚で捉える状

態」あるいは「心理状態」のどちらかの意味が成り立つのである。

本章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」にそれぞれ5つ、8つ、5つの多義的別義を認め、それぞれの「触覚的経験」、「触覚的経験」、「心理状態」をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。また、感覚内の転用において、別義として確立した転用は共感覚を基盤とした転用であることを確認した。

第6章 オノマトペの意味拡張

6.1 はじめに

本章は、第4章と第5章の意味分析を踏まえ、オノマトペの意味拡張について検討する。第4章と第5章の考察から明らかになったように、オノマトペの意味拡張は、メタファー、メトニミーといった比喩を基盤として成立している。また、オノマトペの意味拡張は、共感覚と密接に関わるため、共感覚の観点からは、感覚内の転用と、それ以外の領域への拡張に分けて、その基盤を考える必要がある。そこで、本章の6.2節では、感覚以外の拡張を検討する。6.3節では、感覚内の意味転用を、慣習的な感覚用法と非慣習的な感覚用法に分けて検討する。さらに、6.4節では、共感覚比喩を再考する。6.5節では、本章のまとめを行う。

6.2 感覚以外の意味拡張

オノマトペは、五感に根ざしたものであるが、意味拡張によって、抽象的領域に用いられるようになる。第4章、第5章では、その拡張を考察したが、ここで改めて拡張の基盤を確認する。

6.2.1 メタファーによる拡張

本稿の考察対象において、いずれもメタファーによる拡張が見られる。例えば、第4章の意味分析からわかるように、「こってり」と「あっさり」は、両方とも「味」を表す意味がプロトタイプの意味⁵⁶である。このプロトタイプの意味から、メタファーにより意味が拡張し、次の例のような意味を確立させている。

- (1) 散歩の準備として、これ以上しみ、しわ、色黒になるのは困るので、
日焼け止めクリームをこってり塗る。 (毎日新聞 2003.06.19)
- (2) 幼い時からの読書家で、あっさりした性格と簡素なファッション、
料理は大胆。植木屋のおじさんみたいなぼさぼさ頭が可愛くて、
けっこうモテる。 (朝日新聞 1993.02.28)

例(1)の「こってり」は、「日焼け止めクリーム」というような油分

⁵⁶ 「こってり」のプロトタイプの意味は<すぐに解消されないものが口の中に残り、味覚的に重さを感じられるさま>である。「あっさり」のプロトタイプの意味は<同一カテゴリーの典型例と比べて味に重さが抑えられていると感じられるさま>である。

が含まれるものを塗るときに、その重さが感じられることを表している。重さが感じられるのは、「日焼け止めクリーム」が肌から離れにくいことによる。「こってり」のプロトタイプの意味である<すぐに解消されないものが口の中に残り味覚的に重さが感じられるさま>との間に、<対象が取れにくく重さが感じられるさま>という類似性が認められ、類似性に基づいたメタファーによる拡張であると考えられる。例(2)の「あっさり」は、「人の性格」に用いられ、物事に淡々としているさまを表す。淡々としているというのは、性格に執着などの重さが感じられるものが抑えられており、「あっさり」のプロトタイプの意味である<味に重さが抑えられていると感じられるさま>との間に、<対象に重さが抑えられていると感じられるさま>という類似性が認められ、類似性に基づいたメタファーによる拡張であると考えられる。

以上、抽象的領域といった感覚以外の意味拡張において、類似性に基づいたメタファーによる拡張を確認した。本稿の考察対象に限らず、オノマトペの意味拡張には、感覚的領域から、感覚以外の領域へメタファーによる拡張が数多く見られる。

6.2.2 メトニミーによる拡張

本稿の考察対象においては、感覚以外の領域へメトニミーによる拡張も見られる。例えば、第5章の意味分析からわかるように、「さっぱり」と「すっきり」は、プロトタイプの意味⁵⁷から、メトニミーにより意味が拡張し、次の例のような意味を確立させている。

(3) 一風呂浴びて旅の疲れをとり、さっぱりした気持ちで囲炉裏の横座に戻りました（横を上座とするのが囲炉裏のある家の作法）。

（BCCWJ『北越雪譜物語』 鈴木牧之 著新潟日報事業社 2004）

(4) もともと粥は胃に優しいが、更にマグネシウムが加わったおかげか、食べるほどに胃がすっきりする感じ。沢山食べられる体に優しい温泉粥だ。（BCCWJ『サライ』 渡辺淳司 著 小学館 2002）

例(3)の「さっぱり」は、「一風呂浴びて旅の疲れをとった」ことによって引き起こされた「気持ち」を表している。「さっぱり」は、本来「さっぱりした肌ざわり」や「さっぱりした食感」といったように<対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>を表すが、「気

⁵⁷ 「さっぱり」のプロトタイプの意味は、<対象に余分なものがないと触覚で感じられるさま>である。「すっきり」のプロトタイプの意味は、<心理的に感じる余分なものがなく気分が爽快であると感じられるさま>である。

持ち」に用いられるのは、プロトタイプの意味から拡張していると考えられる。つまり、「一風呂浴びる」ことによって「体がさっぱりする」と同時に「気持ちもさっぱりする」という同時性に基づいたメトニミーによる拡張である。例(4)の「すっきり」は、「温泉粥を食べた」ことによって引き起こされた「胃の感じ」を表している。「すっきり」は、本来＜心理的に感じる余分なものがなく気分が爽快であると感じられるさま＞を表すが、このプロトタイプの意味から拡張し、「胃の状態」を表している。つまり、「胃がすっきりする」と同時に「気分もすっきりする」という同時性に基づいたメトニミーによる拡張である。

以上、抽象的領域といった感覚以外の意味拡張において、同時性に基づいたメトニミーによる拡張を確認した。本稿の考察対象に限らず、オノマトペの意味拡張には、感覚的領域から、感覚以外の領域へメトニミーによる拡張も少なくない。

このように、オノマトペの意味拡張には、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーといった比喩による意味拡張を確認した。次節では、感覚内の転用を見る。

6.3 感覚内の転用

オノマトペは、五感に根ざしたものであるが、すべての感覚用法が慣習的に別義として確立しているわけではない。本節では、慣習的な用法と非慣習的な用法に分け、それぞれの拡張の基盤を共感覚の観点から再検討する。

6.3.1 慣習的な感覚用法

別義として確立している慣習的な感覚用法は、類似性に基づいてメタファーによる拡張でありながら、同時経験に基づくメトニミーによる拡張でもある。

- (5) ハンバーグにつやつやしたデミグラスソースがからみ、こってりした見た目だが、しつこくない。ベルギービールを入れるビール煮はすき焼きのような味わいだ。 (朝日新聞 2013.05.01)
- (6) 展示は日本の風景を描いた「能登にて」(45×90センチ)や花、静物などをモチーフにした近作 20点。山口さんは「中西さんの絵に描かれた色彩は、すべて紙の中に染み込んだ色で、しっとりとした深みがある。試行錯誤を重ね生み出した混合技法による作品をぜひ見て下さい」と語った。 (毎日新聞 2006.03.01)

例(5)の「こってり」は、「ハンバーグの見た目」を表し、本来味覚的経験を表す「こってり」が、視覚的経験に用いられている。「こってりした味」と「こってりした見た目」には、＜すぐに解消されないものが感覚器官に残り重さが感じられるさま＞という類似性が認められ、メタファーによる拡張であると言えるが、あるものを食べるときにそのものの見た目を同時に感覚刺激として受けるのは、我々の経験としてごく自然なことでもある。この例においても、「ハンバーグの味」と「ハンバーグの見た目」の両方が同時に感じられる。つまり、「味覚」から「視覚」への転用は、同時経験に基づくメトニミーによる拡張でもあり、共感覚を基盤とした転用だと言える。同様に、例(6)の「しっとり」は、「色彩」を表し、本来触覚的経験を表す「しっとり」が視覚的経験に用いられている。「しっとりした肌触り」と「しっとりした色彩」には、＜対象に潤いがあると感じられ好ましく捉えられるさま＞という類似性が認められ、メタファーによる拡張であると言えるが、また、あるものを触るときにそのものの見た目も同時に感覚刺激として受ける。ここでは、水分を含むものに触れたときの触覚的経験と、そのものの見た目から水分が含まれていることを感じ、視覚的経験が同時に成立するということである。このような経験も、我々にとってごく自然なことであろう。つまり、「触覚」と「視覚」には、同時経験に基づくメトニミーによる拡張であり、共感覚を基盤とした転用だと言える。

以上、見てきた慣習的な感覚用法は、メタファーに基づいて成立していると同時に、同時経験に基づいて成立するものでもある。このような同時経験は、われわれのごく自然的な体験であり、共感覚による転用を生じさせる。さらに、このような実例が豊富に存在する慣習的な用法は、別義として確立しており、この同時経験に基づく共感覚は、共感覚比喩の強固な基盤であると言える。

6.3.2 非慣習的な感覚用法

辞典類にも記述されておらず、実例も限られる非慣習的な感覚用法には、次のような例が存在する。

(7) 戦後の貧しい時代には、化粧品にも“リッチ感”のある、油分が多くこってりした質感が好まれました。70年代になり、サラッとした化粧品の望む人が増え、時代が変わったと感じました。

(毎日新聞 2003.05.22)

(8) 自宅のそばに大きな公園がある。この季節、遊歩道を行くと、コナラやクヌギの新緑が心地よい風を送ってくれる。森林浴を、と先

日も出掛けた。普段、コンクリートだらけの場所に住んでいると土や緑のしっとりとした香りが急に恋しくなることがある。

(毎日新聞 1997.05.13)

例(7)の「こってり」は、油分が多い化粧品を使用した後の「感触」を表している。「こってり」が触覚的経験に用いられるのは非慣習的ではあるが、例(7)のような実例が存在する。ただし、一般的にあるものを触るときにそのものの味も感じられるという経験は成り立ちにくいと考えられ、同時経験による共感覚を基盤とした転用ではないと言える。例(7)のような例が言えるのは、「こってりした味」や「こってりした見た目」などの慣習的な用法に基づいてスキーマが抽出され、そのスキーマ的意味によって使用・理解されているためである。

例(8)の「しっとり」は、「土や緑の香り」を表し、本来触覚的経験を表す「しっとり」が嗅覚的経験に用いられている。「しっとりした土や緑」を触ると同時に、「しっとりした香り」が感じられるという経験が我々にはあるようであるが、例(8)のような例に限った経験であり、「しっとりしたもの」を触ると同時に「しっとりした匂い」が感じられることは、一般的に我々の経験として考えにくいのではないだろうか。例えば、「しっとりした肌」を触ったからといって、「しっとりした香り」が感じられるわけではない。つまり、そのような同時経験自体があまりないために、「しっとり」が嗅覚的経験を表す実例が限られているのだと考えられる。例(8)のような非慣習的な用法は、共感覚という転用の基盤は成り立ち得ても、一般的にはその同時経験が成り立ちにくいいため、「しっとり」の「触覚」から「嗅覚」への共感覚に基づく転用が慣習的な用法として定着していないのだと考えられる。例(8)のような例が言えるのは、「しっとりした肌触り」や「しっとりした色」などの慣習的な用法に基づいてスキーマが抽出され、そのスキーマ的意味によって使用・理解されているためである。

以上から、われわれの感覚器官の機能に制約があり、同時経験が自然に成り立たないことが転用の制約となると考えられる。感覚器官の機能には制約があるが、われわれは一般的な認知能力を持っており、2つあるいは2つ以上の比較対象において、その類似性を見出すことができる。非慣習的な用法は、慣習的な用法のスキーマ化を通し、元感覚との類似性を基盤として使用されていると考えられる。

以上、感覚内の転用について、慣習的な用法と非慣習的な用法それぞれ検討した結果、以下のようにまとめられる。

- ① 慣習的な用法は、メタファーを基盤として支えられてはいるが、その強固な基盤となっているのは共感覚、つまり、複数の感覚で

の同時経験である。本稿の考察対象において、この共感覚に基づく転用は、実例が豊富に存在し、別義が確立している。

- ② 従来共感覚比喻と呼ばれてきたものの中には、共感覚を基盤としていないものもある。本稿の考察対象においては、この共感覚を基盤としていない比喻表現は、非慣習的な用法に見られた。この非慣習的な用法は、実例も限られており、別義として確立していない。それらは、感覚間の直接的な転用ではなく、スキーマ化を通し、元感覚との類似性を基盤として使用されている。
- ③ ①と②により、感覚別の実例の多寡は、一般的に共感覚が成り立つか否かで説明が可能である。さらに、本稿の考察対象においては、共感覚比喻の強固な基盤は、メタファーではなく、共感覚に基づく比喻（メトニミー）だと言えるであろう。
- ④ 共感覚比喻の強固な基盤は、メトニミーであり、つまり、同時経験に基づいているが、この同時経験は、われわれの感覚器官の機能に制約があることにより、成立の可否が左右される。しかし、われわれの一般的に持っている認知能力には、類似性を見出すという柔軟性があるため、非慣習的な使用が生まれる。

6.4 共感覚比喻再考

本節では、これまでの検討を踏まえて、共感覚比喻を再考する。まず、形容詞における共感覚比喻を検討した後、従来の「一方向性仮説」を再考する。そして、武藤(2003)の修正案を検討する。

6.4.1 形容詞における共感覚比喻

共感覚比喻は、オノマトペだけでなく、感覚を表す一般語彙にも見られる。従来、形容詞を対象とした共感覚比喻の考察が盛んに行われてきた。

- (9) 壇上でエアギターを弾く彼女は目を閉じて、梅干しを口に含んだおばあさんのようなしょっぱい顔だ。(朝日新聞 2008.03.29)
- (10) 夏場なので手足が日に焼け、汗ばんだ体からツンとすっぱい匂いが漂ってきます。(BBCWJ『痴漢白書』素人投稿編集 マドンナ社 二見書房 2003)
- (11) 世界は無味乾燥な無色から暖かい色彩をもったものとなる。
(『漱石が聴いたベートーヴェン』瀧井敬子 中央公論新社 2004)
- (12) 午後一時、「絵本太功記」が開幕。素人三味線の湿っぽい音が一段と哀れさを誘うから、地芝居は得だ。(朝日新聞 1997.05.22)
- (13) 平打ちの麺に人参やキャベツなどの具が入っていて、これもごく

薄い味付け。(BCCWJ Yahoo!ブログ Yahoo! 2008)

上記の5例において、例(9)の「しょっぱい顔」(味覚と視覚)、例(10)の「すっぱい匂い」(味覚と嗅覚)、例(11)の「暖かい色彩」(触覚と視覚)、例(12)の「湿っぽい音」(触覚と「聴覚」)、例(13)の「薄い味」(視覚と味覚)は、いずれも同時経験が成り立つため、共感覚を基盤とした共感覚比喩的表現である。例えば、例(9)と例(13)は、それぞれ「味覚」から「視覚」へ、「視覚」から「味覚」への転用であり、つまり、あるものの味覚的経験と視覚的経験は同時に感じられる。このような経験は、われわれにとっては、ごく自然の経験であると考えられる。この2つの例からは、「味覚と嗅覚」の同時経験は、一般的に双方向的であると言える。しかし、下記の例における五感を表す語は、共感覚を基盤としていないが、共感覚比喩的表現である。

- (14) 日常会話で、よく「高い音、低い音」などと間違った呼びかたをされることが多い。(BCCWJ『虫はなぜ鳴く』松浦一文一総合出版 1990)
- (15) 先週から右胸に鈍い痛みと息切れがします。
- (16) 100人ほどを前に、タイ初の女性首相インラック・シナワット(45)は、独特の甘い声で話し始めた。(朝日新聞 2012.11.28)
- (17) 昼夜の寒暖差の大きさが、茶に濃い香りや味を与える。(朝日新聞 2013.10.31)
- (18) 美しい旋律のようなバランスと、品格のある静かな色彩が調和した抽象の油彩画 15点を展示販売。(朝日新聞 2012.10.11)

上記の5例において、例(14)の「高い音」(視覚と聴覚)、例(15)の「鈍い痛み」(視覚と触覚)、例(16)の「甘い声」(味覚と聴覚)、例(17)の「濃い香り」(視覚と嗅覚)、例(18)の「静かな色彩」(聴覚と視覚)は、ある程度慣習的な用法であり、「高い」は「聴覚」を表す別義、「濃い」は「嗅覚」を表す別義が確立している。これらは、「視覚」から「聴覚」へ、「視覚」から「嗅覚」への転用であるが、「あるものを見ると同時にそのものの音や香りも感じられる」という「視覚」と「聴覚」、「視覚」と「嗅覚」の同時経験は一般的にはないと考えられる。これらの例において、メタファーによる転用が、別義成立の基盤となっている。

これまでの検討により、形容詞の共感覚比喩的表現にも、共感覚を基盤とした共感覚比喩と、メタファーを基盤とした共感覚比喩が見られるが、形容詞の共感覚比喩には、必ずしも同時経験という共感覚の

みが感覚間転用の強固な基盤であるということとは言えないようである。

6.4.2 「一方向性仮説」再考

第2章で検討した Williams(1976)による「一方向性仮説」は、触覚を起点とし、味覚、嗅覚、そして、視覚、聴覚の順に意味が転用されるとしている。しかし、本稿は、共感覚を「複数の感覚における同時経験」と捉えているため、共感覚比喻は、双方向の性質を持つと考えられる。次の例を見てみる。

(19) 夏場なので手足が日に焼け、汗ばんだ体からツンとすっぱい匂いが漂ってきます。(同(10))

(20) ハンドルをぐるりと回して、レコードに針をのせる。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番。プツプツとぎれながらも、しっとりした音が流れてきた。(朝日新聞 2007.12.25)

例(19)の「すっぱいにおい」は、「味覚」から「嗅覚」への転用であり、あるものを食べると同時にその匂いも感じられるという同時経験がわれわれには一般的にある。その逆、「嗅覚」から「味覚」への転用は、「一方向性仮説」に従わないが、「香ばしい味」という例からわかるように、あるものの匂いを感じると同時にそのものの味も感じられるという同時経験が成り立つ。このように、「味覚」と「嗅覚」は、双方向で同時経験が成り立つと言える。一方、(20)の「しっとりした音」というような「触覚」から「聴覚」への転用はどうだろうか。「しっとりしたものを触ると同時にそのものが発するしっとりした音を感じる」ということは考えにくい、「かたいものを触ると、かたい音がする」、「さらさらしたものを触るとさらさらした音がする」というように、「触覚」と「聴覚」の同時経験は、場合によっては成立する。しかし、その逆、「聴覚→触覚」の場合は、ある音を聞くと同時にそのものの触感も感じられるという同時経験は一般的に成り立たない。これは、われわれの感覚器官の機能に制約があるためだと考えられる。

以上の検討により、同時経験は必ずしも双方向的ではないことが確認できる。そのため、共感覚に方向性が存在する可能性は残されている。共感覚比喻であれば、われわれの感覚器官の機能の制約がもたらす制約があるのであろう。

6.4.3 武藤(2003)の修正案について

武藤(2003)では、五感を表すオノマトペの共感覚体系は、嗅覚、味覚、触覚、聴覚、そして視覚の順に転用され、従来の「一方向性仮説」と異なることが示されている。さらに、武藤(2003)の提示する食に関するオノマトペの共感覚比喻体系では、複数の感覚を同時に表すという複合感覚表現が認められるとされる。例えば、「触覚」と「視覚」(パラパラ、クニャクニャ)、「触覚」と「視覚」と「聴覚」(プチプチ)、「嗅覚」と「味覚」(スースー)、「味覚」と「触覚」(ヒリヒリ)などがある。武藤(2003)は、「一方向性仮説」が放棄されなければならないことを示し、共感する感覚間の関係は、すべてメトニミーによって説明可能になると考えられると述べている。

ただし、武藤(2003)の提示する五感を表すオノマトペの共感覚体系においても、食に関するオノマトペの共感覚比喻の体系においても、「食に関するオノマトペ」は、「触覚」と「味覚」、「触覚」と「嗅覚」が未分化であることが関与していると考えられる。一般的に次の例(21)のように、あるものを触ったからといって、味も匂いもするわけではない。しかし、例(22)のように、飲食物の場合は、口に入れれば、口の中の食感とそのものの味や匂いが同時に感じられるものである。そして、飲食物は、一般的に味や匂いがあり、それを口に入れると何らかの食感も感じられることから、「触覚」(食感)と「味覚」「嗅覚」は、双方向の転用が成り立ち得ると考えられる。

(21) 叫ぶ、が、それは虚しく響き渡るだけだ。手探りをする。と、何かに触れた。冷たくてごっごっしている。嫌な感触だが、それしか頼るものが無い。(BCCWJ『逃奔の彼方』 柚木彩 文芸社 2004)

(22) 白川茶を素材にしたソフトクリームは季節を問わず売れる定番。甘さより茶の渋味が感じられるさっぱりした食感で、男性ファンも多い。
(中日新聞 2012.10.01)

武藤(2003)の提示する五感を表すオノマトペの共感覚体系、及び食に関するオノマトペの共感覚体系は、「一方向性仮説」と異なり、「触覚」と「味覚」「嗅覚」が双方向の転用が成り立つことを示しているが、それは、単に「食に関するオノマトペ」を対象にした考察結果であり、「食に関するオノマトペ」は、「触覚」と「味覚」「嗅覚」が未分化であることが関与するためではないかと考えられる。従って、この武藤(2003)の修正案が、すべての対象に適用できるか否かはさらに検討する余地があるであろう。

6.5 本章のまとめ

本章では、第4章、第5章の分析を踏まえて、オノマトペの意味拡張を考察した。感覚以外の意味拡張と感覚内の転用に分け、感覚内の用法について共感覚比喩の観点からその基盤を再考し、さらに、「一方向性仮説」と武藤(2003)の修正案についても検討を加えた。

感覚以外の意味拡張には、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーによる意味拡張が見られることを確認した。

感覚内の転用は、慣習的な感覚用法と非慣習的な用法がそれぞれ異なる基盤に基づいて成立していることを確認した。慣習的な用法は、メタファーを基盤として支えられてはいるが、その強固な基盤となっているのは共感覚、つまり、複数の感覚での同時経験であることを述べた。本稿の考察対象には、この共感覚に基づく転用は、実例が多く見られ、別義が確立していること、非慣習的な用法は、実例も限られており、別義として確立されず、それらは、感覚間の直接的な転用ではなく、スキーマ化を通し、元感覚との類似性を基盤として使用されていることを確認した。

また、本稿の考察対象において、感覚別の実例の多寡は、一般的に共感覚が成り立つか否かで説明が可能であることを確認し、共感覚比喩の強固な基盤は、メタファーではなく、共感覚に基づく比喩(メトニミー)であることを主張した。そして、共感覚比喩の強固な基盤は、一般的に同時経験に基づいているため、われわれの感覚器官の機能に制約があることから、同時経験の可否や一般性が決まり、共感覚を基盤とした転用に制約があることを述べた。ただし、われわれの持っている柔軟な認知能力により、類似性を見出すことが可能であるため、共感覚比喩には類似性を基盤とした転用もあると述べた。

一方、形容詞における共感覚比喩の検討により、別義として確立した慣習的な用法も、共感覚を基盤としないものが見られるため、形容詞における共感覚比喩に関しては、必ずしも共感覚がその強固な基盤であるとは言えないことを確認した。

さらに、本稿は、「一方向性仮説」を再考し、同時経験は必ずしも双方向的ではないことが確認でき、共感覚に方向性が存在する可能性は残っていることを述べた。

最後に、武藤(2003)の修正案は、「触覚」と「味覚」「嗅覚」に、双方向的な転用が認められるのは、単に「食に関するオノマトペ」を対象にした考察結果であり、「食に関するオノマトペ」は、「触覚」と「味覚」「嗅覚」が未分化であることが関与するためであることを確認し、武藤(2003)の修正案がすべての対象に適用できるか否かは検討の余地が残されていることを述べた。

第7章 結論

7.1 本稿のまとめ

本稿は、「CVQCVri」型のオノマトペ「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」を多義語として捉え、多義語分析により、意味のネットワークを明らかにした。そして、共感覚比喩を再考し、オノマトペの意味拡張は、共感覚（2つの感覚による同時経験）が強固な基盤であることを主張し、共感覚比喩の制約と柔軟性について論じた。

第1章では、本稿の提起する問題点と目的について触れ、「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の5語を分析・記述の対象とした背景について述べた。

第2章では、先行研究の概観を通して、本稿の考察対象の位置付けを明らかにした。まず、オノマトペの定義と分類を確認したうえで、特に「CVQCVri」型のオノマトペの音韻・形態的特徴及び統語的特徴を取り上げ確認した。次に、オノマトペの多義性と共感覚比喩に関する先行研究を取り上げ、その問題点を指摘して本研究の課題を整理した。本稿では、共感覚を、「すっぱい匂い」のように、「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と定義し、従来の言語学で言う共感覚比喩の中には、共感覚とは言えないものが含まれること、感覚間の転用ではあっても共感覚による転用と共感覚とは言えない転用の仕組みを解明する必要があることを述べた。

第3章では、本論文が依拠する認知言語学の経験基盤主義、百科事典的意味について確認した。経験基盤主義は Lakoff(1987)に基づき、百科事典的意味は 靱山(2010)に基づいて、その定義などを確認し、本稿の立場を示した。また、靱山(2001)に基づき多義語分析の4つの課題を示した。

第4章では、「こってり」と「あっさり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「こってり」に4つ、「あっさり」に5つの多義的別義を認め、両語とも五感内の味覚的経験を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、感覚内の意味転用に注目し、別義として確立した「こってり/あっさりした見た目」というような「味覚」から「視覚」への転用は共感覚に基づく転用であることを指摘した。最後に、「こってり」と「あっさり」の反義関係を確認し、それが両語の使用の基盤となっている経験の対立によるものである

ことを述べた。「こったり」は、「重い」の経験基盤と同じく「ものが動きにくい」という身体的経験に基づき、すぐに解消されないものが「口の中」「目」「鼻」「肌」「耳」など五感の感覚器官、あるいは対象に「残る」と捉えられることを表した語であり、「あっさり」は、「こったり」と逆で、五感の感覚器官、あるいは対象に「残らない」と捉えられることを表した語であることを示した。

第5章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「しっとり」に5つ、「さっぱり」に8つ、「すっきり」に5つの多義的別義を認め、「しっとり」と「さっぱり」は五感内の「触覚」的経験、「すっきり」は「心理状態」を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、五感内の転用に注目し、別義として確立した「しっとりした色」（触覚→視覚）、「しっとりした音」（触覚→聴覚）、「さっぱりした味」（触覚→味覚）、「さっぱりした見た目」（触覚→視覚）、「さっぱりした香り」（触覚→嗅覚）、「すっきりした味」（視覚→味覚）といったような転用は、共感覚に基づく転用であることを指摘した。最後に、「しっとり」、「さっぱり」、「すっきり」の使用の経験的基盤を明らかにした。「しっとり」は、「潤い」があると感じられると、心が癒され穏やかな気持ちになるという経験を基盤としていることを示した。「さっぱり」と「すっきり」については、五感で感じられる対象や生理的感覚がよい状態になると同時に、心理状態がよくなるという経験に基づいていることを述べた。

第6章では、第4章、第5章の分析を踏まえて、オノマトペの意味拡張を考察した。感覚以外の意味拡張と感覚内の転用に分け、感覚内の用法について共感覚比喩の観点からその基盤を再考し、さらに、「一方向性仮説」と武藤(2003)の修正案についても検討を加えた。

感覚以外の意味拡張は、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーによる意味拡張が見られることを確認した。感覚内の転用においては、慣習的な用法の強固な基盤となっているのは共感覚であり、非慣習的な用法は、スキーマ化を通し、元感覚との類似性を基盤として使用されていることを確認した。本稿の考察対象において、感覚別の実例の多寡は、一般的に共感覚が成り立つか否かで説明が可能であることを確認した。その上で、共感覚比喩の強固な基盤は、共感覚に基づく比喩（メトニミー）であることを主張し、共感覚比喩の強固な基盤は、一般的に「同時経験」に基づいているため、われわれの感覚器官の機能に制約があることを述べた。ただし、われわれの持っている

る柔軟な認知能力により、類似性を見出すことが可能であるため、共感覚比喩には類似性を基盤とした転用もあると述べた。

一方、形容詞における共感覚比喩は、必ずしも共感覚がその強固な基盤であるとは言えないことを確認した。さらに、「同時経験」は必ずしも双方向的ではないことが確認でき、共感覚に方向性が存在する可能性は残っていることを述べた。最後に、武藤(2003)の修正案は、単に「食に関するオノマトペ」を対象にした考察結果であり、「食に関するオノマトペ」は、「触覚」と「味覚」「嗅覚」が未分化であることが関与するためであることを確認し、武藤(2003)の修正案がすべての対象に適用できるか否かは検討の余地が残されていることを述べた。

以上のように、本稿は、「こったり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」という5つの「CVQCVri」型のオノマトペを考察対象とし、多義語分析を行い、その意味拡張を考察した。多義語分析により、オノマトペの意味のネットワークの階層構造を明示した。オノマトペの意味拡張の考察では、比喩の観点からは、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーを基盤として拡張していると説明できることを確認した。感覚内の転用については、共感覚の観点から再検討し、その強固な基盤となっているのが共感覚、つまり、複数の感覚での同時経験であることを述べた。

次節に、本稿を踏まえた今後の課題を提示する。

7.2 今後の課題

まず、多義語分析に課題が残されている。意味記述に用いられるメタ言語、例えば、「重さ」や「潤い」などについて再検討する必要がある。そして、別義認定の客観的基準も探究していく必要がある。また、本稿は実例と母語話者の判断を重視してプロトタイプの意味を認定したが、通時的な観点での考察はまったくしていない。そのため、意味のネットワークの記述も不安定である。

次に、本稿は、「CVQCVri」型のオノマトペを一般語彙と同じように扱い、多義語分析を行ったが、その点に関して、オノマトペとしての固有の性質を十分に考慮できていなかったという問題がある。オノマトペが臨時的に用いられるのはその音象徴性と深く関わっており、五感を表す意味の中でも、「一方向性仮説」の反例となるものや、定着度が低い意味の使用も、オノマトペの音象徴性を動機づけとしている可能性がある。また、本稿の考察対象は、いずれも「オノマトペ+スル」というように、オノマトペ動詞として用いられる場合が多いが、

オノマトペ動詞の性質について十分に考察できなかった。これらの問題については、今後の課題としたい。

最後に、本稿の考察対象の5語は、数あるオノマトペの中の限られた5語に過ぎない。多義語分析により、オノマトペの意味拡張を考察したが、今後考察対象を広げ、オノマトペの意味のネットワークについて考察を深めていきたい。

参考文献

辞典：

- 浅野鶴子編，金田一春彦解説. 1978. 『擬音語・擬態語辞典』角川書店.
- 阿刀田稔子・星野和子. 1995. 『擬音語・擬態語使い方辞典：正しい意味と用法がすぐわかる』創拓社.
- 今井新悟. 2011. 『日本語多義語学習辞典—形容詞・形容動詞編』アルク.
- 小野正弘. 2007. 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館.
- 田忠魁・泉原省二・金相順. 1998. 『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する 類義語使い分け辞典』 研究社
- 辻幸夫. 2002. 「認知言語学キーワード辞典」研究社.
- 天沼寧. 1974. 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版.
- 飛田良文・浅田秀子. 2002. 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 松村明. 2006. 『大辞林』第三版 三省堂.
- 森田良行. 1989. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山口仲美. 2003. 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社.
- Oxford Dictionary of English*. 2005. Second Edition Revised. Oxford University Press. (電子版)
- Oxford English Dictionary*. 2004. Ver.3.1. Oxford University Press.
- Oxford Sentence Dictionary*. 2008. Oxford University Press.

文献：

- 秋田喜美. 2008. 「音象徴語の「範疇化問題」への一つの答え：田守・スコラップ(1999)へのリプライ」『日本認知言語学学会論文集』8: 428-438.
- 姉齒浩美. 1987. 「気分・気持」国広哲弥編.『意味分析2』47-50. 東京大学文学部言語学研究室.
- 荒川洋平. 2002. 「『太い』回線と『重い』データ～仮想空間を見立てる形容詞メタファーの考察～」『留学生日本語教育センター論集』28: 103-116. 東京外国語大学.
- 飯島英一. 2004. 『日本の猫は副詞で鳴く、イギリスの猫は動詞で鳴く』東京：朱鳥社.
- 池上嘉彦. 1985. 『英語学コース 第4巻 意味論・文体論』東京：大修館書店.
- 泉 邦寿. 1976. 「擬声語・擬態語の特質」鈴木孝夫編.『日本語の語彙と表現』105-151. 東京：大修館書店
- 伊藤理英. 2006. 「オノマトペに関する考察--擬音語と擬態語間の共感覚的比喩表現について」『日本エドワード・サピア協会研究年報』16: 55-66.
- 井上加寿子. 2013. 「オノマトペの多義性と創造性」篠原和子・宇野良子編. 『オノマトペの射程』203-216. 東京：ひつじ書房.
- 大坪併治. 1989. 『擬声語の研究』東京：明治書院.

- 荻阪直行. 1999. 『感性のことばを研究する』 東京：新曜社.
- 大塚望. 2009. 「擬音語・擬態語と「する」の結合について」『日本語日本文学』 19:17-36.
- 角岡賢一. 2007. 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』 東京：くろしお出版.
- 笈壽雄・田守育啓. 1993. 『オノマトピア：擬音・擬態語の樂園』 東京：勁草書房.
- 影山太郎. 2006. 「擬態語動詞の統語構造」『人文論究』 56 -1: 83-101.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15 (金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房 pp. 5-26 に再録).
- (1978) 「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子編. 『擬音語・擬態語辞典』 13-14. 東京：角川書店.
- 加藤久雄・坂口昌子. 1996. 「後続成分とオノマトペの性質について」『奈良教育大学紀要』 45-1: 1-12.
- 楠見孝. 1988. 「共感覚に基づく形容表現の理解過程について：感覚形容詞の通様相的修飾」 *The Japanese Journal of Psychology*, 58 -6: 373-380.
- . 2005. 「心で味わう：味覚表現を支える認知のしくみ」瀬戸賢一・他 編. 『味ことばの世界』 80-122. 東京：海鳴社.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』 東京：三省堂.
- . 1970. 『意味の諸相』 東京：大修館書店.
- . 1982. 『意味論の方法』 東京：大修館書店.
- . 1986. 「語義研究の問題点一多義語を中心として」『日本語学』 5-9: 4-12.
- . 1989. 「五感を表す語彙：共感覚的の喩体系」『月刊言語』 18-11: 28-37.
- . 1994. 「認知的多義論一現象素の提唱」『言語研究』 106: 22-44.
- . 1995. 「語彙論と辞書学」『月刊言語』 24-6: 38-45.
- . 1997. 『理想の国語辞典』 東京：大修館書店.
- 小林英夫. 1933. 「国語象徴音の研究」『文学』 1-8. 東京：岩波書店.
- 小林英夫. 1965. 「擬音語と擬容語」『言語生活』 171: 18-29. 東京：筑摩書房.
- 小森道彦. 1993. 「共感覚表現のなかの換喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』 29-3: 49-65.
- 貞光宮城. 2000. 「共感覚比喩表現についての一考察：認知的観点から」 *JELS* 17: 174-183.
- . 2005. 「共感覚表現の転用傾向について--嗅覚と聴覚/視覚を中心に」『認知言語学論考』 5: 49-78. 東京：ひつじ書房.
- 佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』 東京：講談社.(=[1992]講談社学術文庫)
- 新地綾. 1997. 「形容詞<重い>の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』 3: 77-104.
- 鷲見幸美. 1996. 「擬音語・擬態語+する」動詞の分類」『名古屋大学人文科学研究』 25: 97-120.

- 瀬戸賢一. 1986. 『レトリックの宇宙』東京：海鳴社.
- . 2003. 「五感で味わう」『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』 156-183. 東京：海鳴社.
- . 2007. 「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』 31-61. 東京：ひつじ書房
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』東京：研究社.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ. 1999. 『オノマトペ：形態と意味』東京：くろしお出版.
- 田守育啓. 2002. 『オノマトペ 擬音・擬態語を楽しむ』東京：岩波書店.
- 辻幸夫. 2003. 『認知言語学への招待』東京：大修館書店.
- 辻村成津子. 2009. 「オノマトペ動詞の意味・項構造の一考察」 *KLS* 29: 334-343. *Proceedings of the 33rd Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society.*
- 中北美千子. 1991. 「擬音語・擬態語と形式動詞「する」の結合について」『国文目白』 31: 247-256.
- 中里理子. 2002. 「オノマトペの多義性と意味変化：近世・近代の『まじまじ』を例に」『上越教育大学研究紀要』 22-1 :268-282.
- . 2004. 「オノマトペの意味縮小：『わくわく』を例に」『上越教育大学研究紀要』 23-2 : 830-842.
- 仲本康一郎・小谷克則・井佐原均. 2004. 「予期的認知と形容表現不安に基づく状況把握」『認知言語学会論文集』 4 : 34-44
- 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』東京：くろしお出版.
- 西尾寅弥. 1981. 「(擬音語・擬態語+する)の形式について」『語学と文化』 20 :83-96.
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」『認知言語学 I 事象構造』 285-311. 東京大学出版会
- 浜野祥子. 2014. 『日本語のオノマトペ：音象徴と構造』東京：くろしお出版.
- 松本曜 .2009. 「多義語における中心的意味とその典型性：概念的中心と機能的中心性」 *Sophia Linguistic* 57 : 89-99. Sophia Linguistic Institute For International Communication.
- 宮地裕. 1978. 「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』 115 :33-39.
- 三上京子. 2004. 「多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み—「ごろごろ」「ばたばた」を例として」『小出記念日本語教育研究会論文集』 12 : 63-77.
- . 2006. 「日本語の擬音語・擬態語における意味の拡張：痕跡的認知・予期的認知の観点から」『日語日文学研究』 57-1: 199-217.
- . 2007. 『日本語オノマトペとその教育』早稲田大学博士学位論文.
- 武藤彩加. 2001. 「日本語の『五感を表すオノマトペ』における意味の転用—『共感覚的比喩』の分析を通して—」『日本認知科学会第18回大会発表論文集』 30-31.
- . 2003. 『日本語の共感覚比喩に関する記述的研究』名古屋大学博士学位論文.
- 守山恵子. 2002. 「『CVQCV リ』型のオノマトペ」『長崎大学留学生センター紀要』

10: 53-71.

- 梶山洋介. 1992. 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子他編. 『日本語研究と日本語教育』185-199. 名古屋大学出版会.
- . 1993. 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐって—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1: 35-57. 名古屋大学留学生センター.
- . 1995. 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味的転用の一方向性:空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』14: 621-639.
- . 1997. 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』80: 29-43.
- . 1998. 「換喩(メトニミー)と提喩(シネクドキー)—諸説の整理・検討」『名古屋大学日本語・日本文化論集』6: 59-81.
- . 2000. 「名詞『もの』の多義構造-ネットワーク・モデルによる分析」山田進・菊池康人・梶山洋介編. 『日本語:意味と文法の風景-国広哲弥教授古稀記念論文集』177-191.
- . 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」『認知言語論考』1: 29-58. 東京: ひつじ書房.
- . 2002. 『認知意味論のしくみ』東京: 研究社.
- . 2005. 「類義表現の体系的分類」『認知言語学会論文集』5: 579-583.
- . 2010a. 「百科事典的意味観」山梨正明編. 『認知言語学論考』9: 1-37. 東京: ひつじ書房.
- . 2010b. 『認知言語学入門』東京: 研究社.
- . 2014. 「百科事典的意味における一般性が不完全な意味の重要性」『日本認知言語学会論文集』14: 661-666.
- 呂佳蓉. 2006. 『擬音語・擬態語の比喩的拡張の諸相: 認知言語学と類型論の観点から』京都大学博士学位論文.
- 山田仁子. 1993. 「—言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」*HYPERION* 40: 29-40.
- 山口治彦. 2003. 「さらに五感で味わう」瀬戸賢一編. 『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』120-153. 東京: 海鳴社.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』東京大学出版会.
- . 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 游韋倫. 2014. 『日中両言語における擬音語の意味と意味拡張: フレーム意味論の観点からのアプローチ』神戸大学博士学位論文.
- Akita, kimi. 2009. The acquisition of the constraints on mimetic verbs in Japanese and Korean. In Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak, and Kayo Nagai, eds., *Japanese/Korean Linguistics* 16: 163-177. Stanford, CA: CSLI Publications.

- . 2010. An embodied semantic analysis of psychological mimetics in Japanese. *Linguistics* 48, 6: 1195-1220.
- . 2011. A constructionist analysis of emphatic mimetics in Japanese. *KLS* 31: *Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, 240-251.
- . 2013. Constraints on the semantic extension of onomatopoeia. *The Public Journal of Semiotics* 5, 1: 21-37.
- , and Asifa Majid. 2012. The semantic structure of sensory vocabulary in an African language. In N. Miyake, D. Peebles, and R. P., Cooper, eds., *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci 2012)*, 300-305. Austin: Cognitive Science Society.
- Baron-Cohen, S. & Harrison, J. 2003. Synaesthesia, In L. Nadal ed. *Encyclopedia of Cognitive Science*, 3. 295-301. London: Nature Publishing Group.
- Cruse, D. A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge University Press.
- Dingemanse, Mark. 2011. *The Meaning and Use of Ideophones in Siwu*. Max Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen/Radboud University.
- Apresjan, J. D. 1974. Regular Polysemy, *Linguistics* 142, 5-32.
- Hasada, Rie. 2001. Meanings of Japanese sound-symbolic emotion words. In Jean Harkins and Anna Wierzbicka, eds., *Emotions in Crosslinguistic Perspective*, 217-253. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Kageyama, Taro. 2007. Explorations in the conceptual semantics of mimetic verbs. In Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and John Smith, eds., *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, 27-82. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kita, Sotaro. 1997. Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35, 2: 379-415.
- . 2008. World-view of protolanguage speakers as inferred from semantics of sound symbolic words: A case of Japanese mimetics. In Nobuo Masataka, ed., *The Origins of Language: Unraveling Evolutionary Forces*, 25-38. Tokyo: Springer.
- Kövecses, Zoltan. 2010. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press. [池上嘉彦他訳.1993『認知意味論』 紀伊国屋書店] .
- Langacker, Ronald W. 1987. *Theoretical Prerequisites*. Foundations of Cognitive Grammar, 1. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- . 1988a. A View of Linguistic Semantics. In Brygida Rudzka-Ostyn, ed. *Topics*

- in Cognitive Linguistics*, 49-90: Amsterdam: John Benjamins.
- . 1988b. A Usage-Based Model. In Brygida Rudzka-Ostyn, ed. *Topics in Cognitive Linguistics*, 127-161: Amsterdam: John Benjamins
- . 1990. Subjectification *Cognitive Linguistics*, 1-1 5-38.
- . 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- . 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Lech, Geoffrey N. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin. (初版の訳/安藤貞雄 監訳. 1977. 『現代意味論』 研究社)
- Tuggy, David. 1993. Ambiguity, Polysemy, and Vagueness. *Cognitive Linguistics* 4-3: 273-290.
- Ullman, Stephan. 1951. *The Principles of Semantics*. Oxford: Blackwell. (池上嘉彦 (1969)=[1972] 『言語と意味』 大修館書店) .
- Watson, Richard L. 2001. A comparison of some Southeast Asian ideophones with some African ideophones. In Friedrich K. Erhard Voeltz and Christa Kilian-Hatz, eds., *Ideophones*, 385-406. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Williams, Joseph. M. 1976. Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Universals. *Language* 52, 2 : 461-478

例文出典とコーパス :

朝日新聞オンライン記事データベース

中日新聞オンライン記事データベース

毎日新聞オンライン記事データベース

Google 検索エンジン (<http://www.google.co.jp>)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』 (Balanced Corpus of Contemporary Japanese)

謝 辞

本論文は、筆者が名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程在籍中に行った研究成果をまとめたものです。本論文の執筆にあたり、さまざまなご指導やご意見を賜ったすべての方々に感謝申し上げます。

まず、指導教員である名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授の鷺見幸美先生に深く感謝の意を申し上げます。鷺見先生は、基礎的な理論知識から研究の手法まで、始終丁寧かつ熱心な指導をしてくださいました。先生のご指導なくしては、本論文を完成させることができませんでした。

本論文の審査においては、大阪大学言語文化研究科の秋田喜美先生、本研究科の玉岡賀津雄教授、初山洋介教授から非常に貴重なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。本稿で十分に考察しきれなかった点については、今後の研究発展につなげていきたいと考えております。

修士課程からの7年の間、多くの方々に支えていただきました。まず、修士課程の指導教員である宮城教育大学の市瀬智紀教授、副指導教員である高橋亜紀子准教授は、卒業後も常に温かい励ましのことばをかけてくださいました。

そして、愛知学院大学文学部・日本文化学科の多門靖容教授、東北学院大学教養学部言語文化学科の野田大志准教授、愛知学院大学大学院研究員の長谷部亜子氏には、研究に関するご助言をいただいただけでなく、研究を続ける上で、精神的にも大いに励ましていただきました。

同研究室の梶原彩子氏、松浦光氏とは、研究仲間として互いに励まし合い、高め合ってきました。特に、梶原彩子氏とは、入学以来ずっと様々な思いを共有しながら、研究の面でも、精神面でも、お互いに支え合ってきました。また、ネイティブチェックにも協力してくれました。本研究科現代日本語講座勉強会・シェア会においてお世話になりました方々にも、心から御礼申し上げます。研究に関するご助言だけでなく、様々な励ましを頂きました。本論文の容認度の判定などにご協力くださった本研究科の母語話者の方々にも感謝を申し上げます。

また、研究に専念できるよう国費奨学金を提供してくださった独立行政法人日本学生支援機構に深く感謝申し上げます。

最後に、いつも温かく守り、応援してくれた中国にいる最愛の両親に心から感謝いたします。

2015年3月

